

道元禪師伝記史料集成（十一上）

吉田道興

【解題】

今回は、本シリーズ（一）において試論的に分類した伝記の内容・形式でいえば、「戯曲伝奇類」に属する異本の四本対照と「和讃類」の五本対照を行う。

前半で取り上げる「戯曲伝奇類」とは、江戸中期（宝永年間）から後期（文化年間）までに成立した撰者不詳の高祖道元禪師（以下「高祖」と略称）の伝記（「仮称」道元禪師行状伝聞記）中の異本四種を指す。すなわち①『永平開山元禪師行状伝聞記』（宝永六年写、静岡県旭伝院蔵の一本）、②『勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記』（享和二年写、東京泉岳寺、小坂機融師蔵）、③『永平開山元禪師行状伝聞記』（文化二年刊、元山梨県興因寺蔵、『曹洞宗全書（以下「曹全書」と略称）』史伝下所収本）、④『永平開山道元禪師行状伝聞記』（江戸末期写、京都盛林寺蔵）を対照する。なお、この他に⑤『外題』日域曹洞高祖伝聞記（享和二年写、静岡県旭伝院蔵の一本）、⑥圖睡快庵（丘宗潭）隨筆『日域曹洞高祖伝聞記』（年月不詳、『新纂禪籍目録』23頁所収。これは題名が⑤と同じであることに留意しておきたい。）が知られ

道元禪師伝記史料集成（十一上）

る。しかし、⑤は現在、原本が現在行方不明であり、⑥はその所在・内容が不明である。従って今回は所収掲載が不可能で除外する。また同種の「戯曲伝奇類」には結城孫三郎等記『越前国永平寺開山記』（元禄二年五月、新版。横山重編『説経正本集』第一所収）がある。しかし、諸般の事情もあり割愛する。ただし、この「道元禪師行状伝聞記」の成立と内容との関連において、後で若干触れることになる。

次に後半で取り上げる「和讃類」五本とは、江戸中期（享保年間）から後期（弘化年間）までに成立した「偈」や「贊（讃）」の比較的短い詩文の刊本五本である。すなわち①面山瑞方撰『永平祖師年譜偈』（享保二年撰、延享元年刊）、②面山撰『永平祖師贊』（享保十七年刊）、③万切道坦撰『高祖禪師和讃』（寛保二年撰、昭和四九刊「続曹全書」）、④玄透即中撰『永平高祖行実紀年略』（天明八年刊）、⑤撰者不詳『永平和讃』（弘化四年刊）である。

一、「道元禪師行状伝聞記」中の異本四種

1、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊（写本）

外題—（題箋）ナシ

内題—永平開山元禪師行状傳聞記（同書目録）

永平開山禪師之行状傳聞記卷之上

撰者—不詳

筆写者—（一）宝永六年、赤城 龍源閑虚聲 謹書

（二）宝曆九年、普門 謹拜写之

法量—28・1cm×19・1cm

成立—（一）宝永六年（一七〇九）己丑端午日〔原本「寛永六年」

は干支からみて誤写〕

(二) 宝暦九年(一七五九) 戊卯十月七日(原本「宝歴」の歴は単純な誤記。干支の「戊卯」は「己卯」の誤り)

所蔵—静岡県焼津市旭伝院「岸沢文庫」

備考—前述のごとく旭伝院「岸沢文庫」には、外題「日域曹洞高祖

傳聞記」(新題「永平開山道元禪師行状伝聞記」、内題「道

元禪師行状伝聞記」、享和二年(一八〇二) 毒海慧舟(三重

県福聚山海禪寺十三世) 筆の写本を所蔵し、駒澤大学図書館

(駒図一・四・四—W一・五七。(MN) F一〇—一五) には、

複写本とマイクロフィルムを所蔵する。なお享和二年は「高

祖正当五百五十年遠諱」に相当する。

2、勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記 一冊(写本)

外題—勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記

内題—勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚之行状伝聞記

撰者—不詳

筆写者—南海之散人 胡乱齋

法量—26・1 cm×19・3 cm

成立—享和二年(一八〇二) 夏安居日於布施氏草庵書写(冒頭「序文」

所蔵—東京都港区泉岳寺、小坂機融師蔵

備考—本書は、小生が内地研修中の平成三年度、小坂先生のご厚意

で複写本をご提供頂いたものである。享和二年は前述のごと

く「高祖正当五百五十年遠諱」。

3、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊(刊本)

外題—永平開山元禪師行状伝聞記

内題—永平開山元禪師行状伝聞記
撰者—不詳

成立—文化二(一八〇五) 乙丑歳夷則吉辰 萬松山宗泉院主宰

所蔵—元は、山梨県(現、甲府市下積翠寺町) 興因寺蔵書

備考—本書は、当初「曹全書」史伝下(昭和十三年一月初刊) に所

収された原本(底本)である。ところが、その後、昭和四十

七年一月二十日付けの「翻刻凡例」には「当初の」『史傳

下』の翻刻に際し原本との校合を行ったが、次の収録本(再

刊)は校合用底本を探りえず、未校合のまま翻刻した」と記

している。

4、永平開山道元禪師行状伝聞記 一冊(写本)

外題—(題箋) ナシ

内題—永平開山道元禪師行状伝聞記

撰者—不詳

筆写者—不詳

法量—27・5 cm×20・4 cm

成立—不詳(江戸末期)

所蔵—京都宮津市宇喜多 盛林寺蔵

備考—本書は『曹洞宗文化財調査目録解題集5 近畿管区編』中の

盛林寺所蔵本。許可番号06—1。平成十八年五月二十六日

付)。

1、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊(写本)

まず序説として本書より前に元禄二年(一六八九) 五月に刊行されて

いた結城孫三郎等記（説経本、庶民芸能の一）「説経節」、『越前国永平寺開山記』のあらすじを述べておきたい。当該書は、高祖の父を「中納言

道忠」、高祖の幼名を「神道丸」、実母の死後、継母（金道卿の姫君）は連れ子「金若丸」可愛さから、家臣木下将監行正に命じ「神道丸」を亡きものにしよとすが、「金若丸」はそれを知り身代わりになって殺される。行正はそれを知り自害する。行正の子「梅王」は父の首を持ち、「神道丸」と共に比叡山に逃れる。このように当該書に「御家騒動」的な話も含む。一方、継母は益々「業」が募っていく。「金若丸」の妹（神道丸の義妹）は「松よ」と称し、義父「道忠」より系図（御守り）を与えられる。「道忠」の没後、神道丸と梅王の二人は出家し、「道元」と「道正」と各々改名し修行することになる。その後、入唐（宋）し、「彈虎拄杖」「血脈授与」等の逸話、さらに龍女より道正へ妙薬「神仙解毒万病圓」を授け、帰朝後、宇治の地に「光照寺」を建立する話等が所載する。帰朝後、大原の奥に住む落ちぶれた貧女母娘が住み、母が病に罹っていた。道正が「神仙解毒万病圓」を授け一命を取りとめ、庵に連れ帰る。二人は高祖より授戒する。その際、娘より布施の代わりとして出された系図から義妹の「松よ」と分かり、涙の「兄妹再会」の話となる。まことに荒唐無稽な筋書である。高祖に随伴したと伝えられる「道正」は浄瑠璃風に脚色され、史実とは異なるが、道正庵側の説く元祖像に近い。

当該書の出版年が本書（宝永六年写）の二十年前という点や本書と相似する登場人物名から類推して、恐らく道正庵から浄瑠璃作家の太夫結城孫三郎へ「説経節」の台本を創作依頼し、庶民への布教と仙薬の普及を狙ったものと思われるが、それを裏付ける資料はない。推定するに道正庵側の思惑（願望）を担って結城側の出版という側面が強い。

本論である本書『永平開山元禪師行状伝聞記』の「奥書」には次のように記されている。

寛永六年己丑五月端午日 赤城龍源閑虚聲 謹書

又寶歴九戊卯年十月七日 普門 謹拜写之

「寛永」は干支の上から「寶永」の誤写、「寶歴」は「寶曆」の誤記であるが、宝永六年（一七〇九）と宝曆九年（一七五九）の二度にわたり書写されてきたことが知られる。この「奥書」によれば、はじめ赤城（群馬県）勢多郡の龍源寺僧「閑虚聲」が書写し、次に半世紀後、「普門」が再写したことが判る。その後、どのような経路をたどったのかわ明ながら、岸沢惟安老師の永年にわたる探索とその外護者門脇聴心（章太郎）居士の援助により、旭伝院に所蔵されるに至ったものである。本書は、後述するように前掲書と共に道正庵と永平寺との関係を探る上で貴重な資料となる古文書であるといえる。

本書は、奥書の年記より昭和五十三年、曹洞宗全書刊行会で蒐集した旭伝院「岸沢文庫」所蔵の享和二年（一八〇二）・毒海慧舟筆写『（外題）日域曹洞高祖傳聞記（内題）「永平開山元禪師行状伝聞記」』から数えて九十三年ないし四十三年ほど古いものである。本書の撰者と成立年代は不明ながら、その年記「宝永六年」より元禄十五年（一七〇二）の「高祖正当四百五十年遠諱」を期した記念文化事業として宗門内外の有力者により企画・制作され、次いで書写されたものと思われる。但し、本書が実際に刊行されたかどうか、それを証明する資料がなく全く不明である。後掲の文化二年刊本に付す「目録」と同種のもが本書にもあるので、その点から刊行の可能性も考慮できる。

次に本書のあらすじを述べておく。

本書には、「花見の宴」など内容の一部に鎌倉時代ではなく江戸時代

当時の武家・町人の文化を反映した「世話物」風の情景描写を含み、淨瑠璃や歌舞伎の戯曲的脚色が施されている。高祖が入宋する前後に父（通親）の采配により文武両道の猛者「木下将監高充」が高祖の「ヲモト（御許）人」として配される。高充は、入宋前後、悪人・悪僧たちが現れるたびに縦横無尽の働きで彼らを蹴散らし退治する。中でも入宋直後、怪しげな「黒島」で高祖が五体不如意で難儀中、翁（岩清水神）が現れ「神仙」解毒円を授けられ服薬し回復、同時に処方書一卷も授けられるところがポイントである。「この下りの描写は前掲の『越前永平寺開山記』とは大いに異なる。」帰朝後、高充は高祖より「優婆（塞）戒」を受け、名を「道正」と号し、草庵を「道正庵」と称し、「解毒円」の処法も授けられ、それを販売し繁盛した旨を記している。いわば「高充（後の木下道正）」が、この物語の重要人物として描かれていると評してよからう。なお、本書では高祖は幼名を「神童丸」、舎弟（別腹の弟）を「兼若丸」と称し、後日、成人し家督相続する。前掲書では高祖を「神道丸」、舎弟を「金若丸」と称し、若くして殺される。

また、高祖の両親である父は「源ノ亜相公通親」、母は「執行能圓の御女（むすめ）」とある。これは後述する3「永平開山元禪師行状伝聞記」（刊本・曹全書本）と同じであるが、2「勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記」（写本）と4「永平開山道元禪師行状伝聞記」（写本）では、父を「源ノ亜相公通忠」、母は同じ「執行能圓の御女」としている。つまり、当該書の異本四種には、父親の「通親」と「通忠」説が併存しているのである。また、いずれもその父は入宋前に生存し、入宋中（帰朝前）に没している。

一般の伝記史料では、古くより高祖の父として「育父源亜相」（『永平広録』巻五・巻七）から「村上天皇九代之苗裔、後中書王八世之遺胤」

（『三排行業記』等）を経て「源亜相通忠」、次に「源亜相通親」、そして現在の有力説「堀川大納言通具」と変遷している。次に各伝記に高祖の「父親三説」（①通忠、②通具、③通親）を略号として付し挙げてみよう。

懶禪舜雄撰『日域曹洞列祖行業記』寛文十二年撰、同十三年刊。①通忠

撰者不詳『道元和尚行録』寛文十三年識語、延宝元年刊。①通忠

高泉性激撰『禪林僧宝伝』延宝三年撰、貞享五年刊。①通忠

大了愚門撰『永平佛法道元禪師紀年録』延宝六年刊。①（忠通は誤記）通忠、②通具「或名家譜」、③通親（元禄二年刊本）

止元師蛮撰『延宝伝灯録』延宝六年撰、宝永三年刊。①通忠

（筆者不明）『延宝本建撕記』延宝八年。①通忠

安州玄貞撰『永平語録標指鈔』元禪師行状記』貞享二年刊。①通忠、②通具「或家伝譜」

版鏡晃全撰『僧譜冠字韻類』貞享二年撰、元禄元年刊。③通親

結城孫三郎等記『越前永平寺開山記』元禄二年刊。①通忠

湛元自澄撰『日域洞上諸祖伝』元禄六年撰、同七年刊。③通親

『道元禪師行状伝聞記』（旭伝院蔵。宝永六年閑虚聲写・宝曆九年普門再写）③通親

面山瑞方撰『永平開山和尚実録』宝永七年。③通親

嶺南秀恕撰『洞上聯灯録』享保十二年序、寛保二年刊。③通親

古谿秀蓮撰『日本洞宗始祖道元禪師伝』享保十五年撰、同十六年刊。③通親

面山瑞方撰『訂補建撕記』宝曆三年撰、同四年刊。③通親

③通親

面山瑞方撰『訂補建撕記』宝曆三年撰、同四年刊。③通親

『日域曹洞高祖伝聞記』（旭伝院蔵。毒海慧舟、享和二年写）①通忠
 『勅賜佛法禪師道元大和尚行状伝聞記』（泉岳寺蔵。胡乱齋、享和二年写）①通忠

『永平開山元禪師行状伝聞記』文化二年刊。③通親

面山瑞方撰『訂補建斯記図会』文化三年刊・文化十四年刊。③通親

『永平開山道元禪師行状伝聞記』（西林寺蔵。筆者不明、幕末写）①通忠

この中「通忠」説の初出は、寛文十二年（一六七二）・懶禪撰『（略称）列祖行業記』を経て、延宝六年（二六七八）・大了撰『（略称）永平紀年録』等に至るとされる。さらに次の「通親」説の初出は、貞享二年（二六八五）・〔永平寺三五代〕版橈晃全撰、元禄元年（一六八八）刊『僧譜冠字韻類』巻八八「宋 道元」所載の「亜相通親之季子、通光之弟、通忠之伯父」である。ちなみに同書では、母を「師之母者基房公之女」としている。

前掲の大了〔永平寺三五代〕撰『永平紀年録』では、初めに「亜相忠通（通忠）の誤記」之子也」とし、続く文に「又或名家譜曰、村上天皇第六王子、具平親王十代内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子。母法性寺執行能圓之女、八條二位殿之女姪也」としているが、『僧譜冠字韻類』の影響を受けてか、大了の没後に門人が編述した元禄二年刊本において「亜相通親」と訂正、そこに二転三転してやや錯綜があるといえる。

この『永平紀年録』の文中「或名家譜」と同じく、また『永平語録標指鈔』にも初め「源亜相通忠」とし、その後「或家傳譜曰」として右と同文の「内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子」があるこ

道元禪師伝記史料集成（十一上）

とに注目しておきたい。その「或名家譜」と「或家傳譜」とは、おそらく「久我家系譜」を指すものと思われる。

ところが宝永七年・面山撰『（略称）永平実録』には、「按久我家譜曰、永平元禪師者、通親之季子、通光之弟、通忠之伯父也」と通親の子とし、同じく文化三年『訂補建斯記図会』の「補注」にも帰するところ内相府「通親」の子とする（後掲）。これは、前掲の『僧譜冠字韻類』の説と同じである。その「久我家系譜」と前掲の「或名家譜」・「或家傳譜」とは別本なのであろうか。久我家に異なる二本の系譜を所持していたのであろうか。それとも『僧譜冠字韻類』が版橈禪師の撰述という「権威」に屈しての記述であらうか。

寛延四年（一七五一）六月、永平寺四三代央元密蔵が道正庵に滞在中、「久我家系譜」を拝覧。その央元が道正庵十九世庵主ト順（既に延宝五年没）の所有していたそれを権中納言久我通名（享保八年卒）に書写させ、時の庵主三三世省順より宝曆三年（一七五三）三月、永平寺へ納入させている（『道正庵備忘集』）。その永平寺所蔵「久我家系譜」の該当箇所を次に掲げる。

〔越前州吉祥山永平禪寺初祖道元大和尚者 村上之皇別而我先内相府源通親公之支子相國通光公之令弟也 世稱俗譜者以爲右幕下通忠 卿通忠公之卿之息或謂亜相具房卿通忠卿二男號愛石之子也 雖不宜強辨 然移於浮辭者已尚矣〕

これは面山が寛保三年に道正庵を訪ね庵主承順より拝覧したものであり、『訂補建斯記』補注（二）とほぼ同じ文章である。これは、前掲の「内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子」（通具説）と全く異なる。面山は補注（二）の後半部で版橈の「亜相通親之季子、通光之弟、通忠之伯父」説と一致したのであるが、果たしてそれが正しかったの

か。それ以後、その「通親説」は版橋と面山の説示により決定的な流れになつていく。

これら「伝記」諸本と同様に当該書の異本四種は、右の諸本の説に影響を受け、書写者が何故か「通具説」を排し、高祖の父を「通親」とか、「通忠」としているものと思われる。

本書の副主人公といえる「木下将監高充」は道正庵元祖木下隆英（一一七一一―一二四八）をモデルに設定されていることにより、その活躍を世の人びとに知らせ、合わせて同庵の特効薬「神仙解毒万病円」の販売を促進する意図が窺える。

ちなみに前掲の道正庵徳幽卜順が寛永六年（一六三九）に撰述した『道正庵元祖伝』には、高祖（当該本では「道玄」）の入宋した際、元祖（道正）も入宋し、ある広野において高祖が身体困羸、魂魄を失いかけた時に白髪のお嫗（稲荷神）が出現し、神仙解毒万病円を与えられ蘇生した旨を述べている。これをそっくり受容しているのが、前掲の版橋晃全撰『僧譜冠字韻類』であり、高祖伝中に道正庵側の資料を使った嚆矢といえる。その後、『越前永平寺開山記』と『道元禪師行状伝聞記』、さらに面山瑞方撰『永平開山和尚実録』等へと引き継がれていくのである。

さて永平寺・總持寺を含む曹洞宗と道正庵との関係が密接になったのは、正確には不明であるが江戸期の初め、幕府の寺院統制の一環として慶長ないし元和・寛永年間頃からと思われる。それは、道正庵が主に曹洞宗の寺院住職に関わる出世・瑞世・転衣等、朝廷の寺社伝奏家である勧修寺家への請奏を取り次ぐ役職をしていたからである。曹洞宗の大本寺（永平寺や総持寺）の住職になるには、まず幕府の許可を得た後、上京し宿坊として道正庵に数日間滞在し、礼式作法を予修し参内の準備をす

るのである。必然的に僧侶は道正庵に種々頼ることになり、必然的に大事にせざるを得なかったわけである。時代は多少下るが、延宝年間の頃、出世・瑞世等に関わらず永平寺僧が上落した際には、宿所を道正庵衆寮とすることが定められていた（洞寿院文書）。

慶長五年（一六〇〇）三月付けの「永平寺門鶴寄進状」と寛永十二年（一六三五）の「木下道正庵衆寮造営帳序」（秀察代）の史料は、道正庵の本屋ならびに衆寮の造営に関するものであり、總持寺とともに曹洞宗の一宗の勧化によつて援助したことが記されている。また佛山秀察が寛永十六年（一六三九）三月五日付けの「道正庵掟五条」を発している。道正庵には曹洞宗僧侶が恒常的に安居・滞在している状態であつたのである。

道正庵中興とされる十九世庵主法眼徳幽卜順（元禄三年卒）は、寛永十六年（一六三九）七月に『道正庵元祖伝』と『道正庵神仙解毒万病圓記』を撰述・刊行していることが知られる。その徳幽卜順と万治三年（一六六〇）八月に永平寺へ昇住した鉄心御洲（寛文四年没）が後述するように道正庵の政治的役割等から相方の互恵関係が一致し、密接になつていったように推定できるのである。それは、万治四年三月に徳幽卜順が定め作成し、鉄心御洲が認証した「日本曹洞宗永平開山大禪師派流出世之次第附官物之覚」（十三条中の第十二条）は、前掲の寛永十二年「木下道正庵衆寮造営帳序」を追認するものであり、曹洞宗側が道正庵の役割を踏まえ、道正庵の衆寮造営は曹洞宗一宗の勧化によつて行うこと、要するに金銭等の保証をするむねの内容条目が入っているのである。

高祖の四百五十年遠諱を準備し始めたのは、三六代融峰本祝（一七〇〇没）であるが、その正当忌直前に遷化し、実際にその正当法要を厳修

したのは三七代石牛天梁である。なお道正庵元祖の四百五十回忌は元禄十一年（一六九八）であった。その際の法要は融峰が大導師となり、古庵主木像の点眼供養を行っている。その状況を道正庵二一世隆守貞順（二七〇〇没）が『道正庵備忘集』に記録し、その後代々受け継がれている。このように高祖と道正庵元祖の遠忌が相前後していることも本書の成立と無関係ではあるまい。

永平寺との関係は特に道正庵十九世徳幽卜順（元禄三年八月卒）から二三世省順の頃までの時代がさかんであったようである。永平寺住持では二十代門鶴（元和元年没）ないし三代佛山秀察（寛永十八年没）、二代鉄心御洲（寛文四年没）以降の歴代住持である。中でも三代大了愚門（貞享四年没）と三五代版曉晃全（一六二三〜九三）は「高祖伝」（『紀年録』・『僧譜冠字韻類』巻八八）を撰述している点が注目される。また既述のごとく四三代密巖史元（宝暦十一年没）は、宝暦三年三月、省順を通し「久我家系譜」（久我通名撰）を永平寺へもたらしている。

これら道正庵と永平寺の密接な関係より、恐らく寛永から元禄年間の頃、徳幽卜順とその周辺にいた人びと、およびその後の庵主たちが自然発生的に元祖の木下降英を顕彰し、あわせて「神仙解毒万病圓」の販路を拡張する一助として『越前国永平寺開山記』と本書の企画出版を画策した可能性が想定できるのである。

参考 永平寺史 第五章「幕府の統制と永平寺」・第三節「江戸期の瑞世」廣瀬良弘

中野東禪「高祖伝における庶民芸能の影響——『越前国永平寺開山記』」（『宗学研究』）所収

廣瀬良弘「曹洞宗と朝廷——中世から近世にかけての禪師号・紫衣・出世・勅書・繪旨・勅願書」（『曹洞宗人権擁護推進本部紀要

第一号」所収。一九九四年三月）

圭室文雄「江戸時代における勅許紫衣・転衣の展開」（同上）

圭室文雄『道正庵文書』について（『傘松』622〜624）

熊谷忠興「大遠忌と道元禪師の伝記（その一）——木下卜順撰『道

正庵系譜』（『傘松』690）

熊谷忠興「大遠忌と道元禪師の伝記（その二）——木下卜順所持の

『久我家系譜』（『傘松』691）

皆川義孝「解説」『道正庵文書』（その12）「永平寺門鶴寄進状」

（『傘松』699）

拙稿「版曉晃全撰『僧譜冠字韻類』所載の「道元伝」考」（『印度学

佛教学研究紀要』54巻2号）

同右「『永平開山元禪師行状伝聞記』における「伝説・説話」の類

型」（『宗学研究』40号）

2、勅賜佛法禪師永平開山道元和尚行状傳聞記 一冊（写本）

まず異本四種中、本書の題名は多少仰々しい感がするのは否めない。

その語句「勅賜佛法禪師」とは、所謂古本「建搨記」（明州本）の後半部「道元禪師縁記」の諱号中に見えるものであり、天台四教五時の名目中に天竺震旦日本佛法興起次第にある一般的敬称で必ずしも特定しているものではない。高祖が曹洞宗の宗名を嫌い、「正伝の佛法」と称した（『正法眼蔵』仏道巻）ことが想起できる。なお比叡山において修行中に「佛法房」（『兵範記』紙背裏打文書。京都東山文庫蔵）と称されていたとも伝える。それが後嵯峨院より高祖の道誉を聞き紫衣と共に禪師号を下賜されたという記事になり、懶禪舜雄撰『日域曹洞宗列祖行業記』（寛文十二年。同十三年刊）や撰者不詳『永平開山道元和尚行録』（延宝元年刊）等に引き継がれていくが、史実としてというよりも崇敬の念か

ら生じた記述といえる。本書の筆者もその念を抱き、冠称として付け加えたものと思われる。それは、大了撰『永平佛法道元禪師紀年録』の命名「佛法道元禪師」にもつながる。

本書では、高祖の名を「希玄」、両親の血筋（家柄）を通し「姓ハ源氏、村上天皇九世之孫、源ノ亜相公通忠ノ御長子、御母ハ執行能圓ノ御女也」とあり、父親を「通忠」としていることは前述したとおりである。次に本書が他の異本と異なる点は、構成の上で第十三項目「十三ニハ勅シテ号并ニ紫衣ヲ賜フ事附時頼寺ヲ建テ師ヲ請スル事并師亡靈ヲ救玉フ事」の部分である。その初めに設定している項目「勅シテ号并ニ紫衣ヲ賜フ事」は、他の異本では末尾に付いている。すなわち、この点からも高祖への崇敬心は、題名の付け方と軌を一にしているといえよう。

序文の末尾に「于時享和二年夏安居日於布施氏草庵書写／南海之散人胡乱齊」とある。これにより本書の成立（書写）は、享和二年（一八〇二）である。前述したようにこの年は高祖の没後「五百五十年」の大遠忌の年に該当する。従って筆者は高祖への報恩の念を深めながら真摯に筆写したに相違ない。ところでその筆者は「南海之散人 胡乱齊」と記し、あえて実名ではなく謙譲を込めた仮の名（雅号）にしている。ここで「南海之散人」とは、伊勢・志摩・紀伊半島か、淡路か、四国の阿波・讃岐・土佐か地域は全く不明ながら、そのいずれかの地域を東奔西走していた行脚中の僧と思われる。「散人」の意味は、一般に「役に立たない人」や「文人（風流人）」であるが、ここでは「安居日於布施氏草庵書写」とあるので当然「出世間の人」出家者であろう。

3、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊（刊本）

本書は、『曹洞宗全書 史伝下』（昭和十一年初刊・昭和四十七年再

刊）に収集されている刊本を便宜的に用いた。その奥書に「文化二乙丑歳夷則吉辰／萬松山宗泉院主宰」とあり、元は山梨県興因寺（現、甲府市下積翠寺町）に所蔵されていたものである。

文化二年（一八〇五）陰曆七月、宗泉院（現、葦崎市円野町上円井）において、当時の住職 某 が主宰して刊行されたものである。その刊本は、再刊版の「覆刻凡例」には『史伝下』の覆刻に際し原本との校合を行ったが、次の収録本は校合用底本を探りえず、未校合のまま復刻した」と記され、その校合のできなかった複数本の中に本書が含まれている。つまり現在のところ、その底本は行方不明になっている。しかし、今後、その刊本が発見される余地を残している。

本書の冒頭には、「永平開山元禪師行状伝聞記目録」が付いていて、「巻之上」に七章、「巻之下」にも七章の章題が並べられている。それは、1の旭伝院藏「永平開山元禪師行状伝聞記」も同様に「目録」があり、この点から同書も刊行された可能性が大いにある。

本書では、これも前述の通り、高祖の名を「希玄」、両親は「姓ハ源氏、村上天皇九世之孫、源ノ亜相公通親ノ御長子、御母ハ執行能圓ノ御女也」とあり、父親を「通親」と記す。

参考 『曹洞宗全書 解題・索引』384頁、竹内道雄師「解題」

4、永平開山道元禪師行状伝聞記 一冊（写本）

本書は『曹洞宗文化財調査目録解題集5 近畿管区編』中の京都盛林寺にその所蔵が記されているものである。それを小生が曹洞宗文化財調査委員会に当該史料の提供を申請すると同時に、所蔵元の盛林寺様の許可を得て、提供頂いた「複写」本を用いた。

本書では、2「勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状傳聞記」と同じ

く高祖の名を「希玄」、両親の素姓は「姓ハ源氏、村上天皇九世ノ孫、源ノ匝相公通忠ノ御長子、御母ハ執行能円公ノ御女也」とあり、その父親を「通忠」としている。

本書の末尾には、「若州遠敷郡田野村／大光寺去外／荒木三秀 拝主」とある。これは、恐らく本書の元の所持者が署名したものである。「目録解題集」の解説では「荒木三秀筆」としているが、本文の字と奥書の字とは全く異なるので別人と思われる。「若州遠敷郡田野村（現、福井県小浜市遠敷郡田縄）大光寺」は、現存する。地名の「田野村」は江戸期に多縄城たのじょうがあり、後（昭和二十六年）に「口名田村」「中名田村」と「口田縄」が合併し「田野」と改名した。「大光寺去外／荒木三秀」とは、若狭（小浜市）日輪山大光寺山内僧の名・荒木三秀であり、また去外は道号か諱で荒木去外・去外三秀とも称した人物と思われる。なお盛林寺蔵の明治十七年写『無尽蔵』一巻一冊の筆者「盛林寺飯頭寮、明治一七年正月写、荒木天外筆」とは別人と思われるが、よく似た名前であるので何らかの関係があった人物と想定できる。小浜大光寺から京都盛林寺へ移ってきた僧の縁者か。また盛林寺の本寺は、福井県武生市大虫町の瑞洞院である。そうした「地縁」もあり、追及の余地を残す。しかし、ここではその指摘にとどめておきたい。

本書の末尾には、「奥書」・「識語」類もなく、また所持者の書名箇所にも年記がないので、いつ書写したのか不明であるが、体裁や文字の具合から恐らく江戸末期か明治初期のものだと推定できる。

二、「和讃類」の五本

1、永平祖師年譜偈 一巻一冊（刊本）

外題―永平元祖師語録

道元祖師伝記史料集成（十一上）

内題―永平祖師年譜偈
別名―年譜偈（版心・奥題）

永平和尚年譜総頌

撰者―面山瑞方（二六八三〜一七六九）撰

成立―享保二年（一七一七）八月二十八日撰

延享元年（一七四四）刊、京都柳枝軒小川多左衛門、

所蔵―駒図一三一・五一六

備考―同書には元文四年（一七三九）の刊本がある。本書は『永平

元祖師語録』（延享元年刊本）と合綴（駒図一三一・五一

六）。これは『続曹洞宗全書』『史伝』に所収。同じく『永平

家訓（内題「永平家訓綱要」）（延享元年・元文四年刊本）と

も合綴。いずれもその末尾等に付されている。さらに寛政七

年写・江藤昌綱筆『永平祖師年譜吟』（中峯和尚座右銘・永

平仮名法語・明峯和尚法語と合綴。旭伝院岸沢文庫蔵、駒図

一一四・四一W一五五）がある。また写本には明治十七年書

写の宮城県繁昌院所蔵本等がある。

2、永平祖師贊并序 一冊（刊本）

外題（題箋）―永平祖師贊 全

内題―永平祖師贊并序 一冊（刊）

別名―祖師贊（版心）

撰者―面山瑞方「北海若雲濱城空印禪寺老梅室謹」撰

成立―享保十七年（一七三二）壬子八月二十八日、京都具葉書院刊

所蔵―駒図魯一九

備考―後刷本として享保十七年（駒図一一四・四一W九）がある。

また愛知県豊川市西明寺には、冒頭に「高祖贊」(十言四句の二首)、奥書に「嘉永七年甲寅閏七月二十八日／長山隨時之節／釋氏禪透謹書」とある写本を所蔵する。

3、高祖禪師和讃 一冊(刊)

外題―句雙紙

内題―高祖禪師和讃

別名―永平元禪師和讃

撰者―伝、万仞道坦撰

成立―寛保二年(一七四二)撰

所蔵―駒図一三三―W九二(群馬県長学寺所蔵、大正十二年再写本)。これが『統曹洞宗全書』「法語・歌頌」に所収された。

備考―関連書には、後掲の弘化四年刊、折本の『永平和讃』(江戸谷中玉林禅寺、現住蘭關秀叟印施)重松辰四郎編、明治四五年刊『承陽大師和讃』(『傘松道詠』と合綴、駒図一一四・九一三八)や百々百箭編(編集兼発行人)、昭和五三年刊『永平祖師和讃』(駒図魯一〇)がある。

4、永平高祖行実紀年略

外題―辨道話

内題―永平高祖行実紀年略

撰者―玄透即中撰

成立―摂州佛眼禅寺空華室中、天明八年(一七八八)正月序刊
所蔵―駒図一三二・二一八(『統曹洞宗全書』史伝所収)

備考―『辨道話』と合綴(駒図一三二・二一八)

序文の「刊刻辨道話縁起」末尾には「昔天明第八歳龍次戊申春王正月／幻寓佛眼玄透即中拝稽首／書於空華室中」とある。また末尾の「識語」には、「天明八年歳次戊申雪安居日摂州熊耳山佛眼禅寺院蔵版／幹事比丘 尊古謹誌」と記す。その後には本書の所持者「英道持持」との筆字署名がある。

5、永平和讃 折本(一冊)

外題―永平和讃

内題―永平和讃

撰者―不詳

成立―弘化四年(一八四七)丁未中春刊、江戸谷中玉林禅寺、現住蘭關秀叟印施

所蔵―駒図折一六(登録番号 一一三二一三)
備考―末尾に「釋迦歎偈」を付す。同書の別刷本(小型版)もあり、それには冒頭に椅上に坐す「高祖像」が付いている。しかし、末尾に「釋迦歎偈」がない。
この他には、内容は別であるが、同種のものに以下のものがある。

①『承陽大師和讃』(『傘松道詠集』と合綴)、明治四十五年春、森田悟由贊。

冒頭に「懺悔文」「三帰依文」、以下に「南無承陽大師年譜和讃」の本文十三章が始まり「十方三世一切佛諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅密 三拝」で終わる。
その後「傘松道詠集」が付き、末尾に「吉祥講々員心得」(二三条)曹洞宗大本山永平寺とあり、編集発行兼印

刷者の住所と氏名「浜松市鍛冶町九番地 乗松辰四郎」とある。

② 『永平祖師和讃』は、昭和五年三月、編集兼発行人の雅号「百々百箭」編と住所「三重県一志郡八知村三一七八」が記されている。恐らく宗門の僧侶と思われる。内容は、所謂「年譜和讃」である。文章は流麗な和文で綴られている。

印刷人は池田栄次郎（東京市浅草区千束町）、印刷所は櫻や印刷所（同右）。

本書は「非売品」となっているが、有縁者に配られたものであろう。

1、永平祖師年譜偈 一卷一冊（刊本）

本書は『永平元禪師語録』（延享元年刊）や『永平家訓綱要』（同上）と合綴され、その後部についている。また『統曹洞宗全書』『史伝』に所収する。本書（年譜偈）の末尾には、面山瑞方（一六八三〜一七六九）の法嗣である一人、環堂慧中による「識語」があり、次に掲げておく。

「前年、師海東に在りし日、随徒に訓誨し、此の年譜偈を述ぶ。其の後、叢林にて往々展転書写される。今、また但だ烏焉（誤写の恐れ）に非ずや。痛むべし。故に此に附して考讎（考正）を便ぜしむる者なり。侍者慧中謹識」（原漢文）

これによると、面山が享保元年（二七一六）、海東（尾州萬松寺・小牧正眼寺「面山年譜」）に滞在中、随徒（門人）たちに教示して、この「年譜偈」を述べたものであり、後に広く叢林（寺院）で書写され広

道元禪師伝記史料集成（十一上）

まったという。なお本文では、その末尾に「享保二年丁酉八月二十八日／遠孫相州老梅菴沙門面山瑞方謹撰」と認めている。慧中は師面山の作に対し、謙遜して誤写等があるかもしれないので、それを正してほしい旨を述べている。なお「八月二十八日」は高祖の入寂日であり、面山は高祖の冥福を祈ると同時に報恩の念を込め撰述したことが判る。

本書の本文は「七字八四句」の偈に加えて遺偈「五十四年、照第一天、打箇踣跳、觸破大千、咦、渾身無著處、活陷黄泉」を付けている。

題名が似ているが内容は別であると思われるものに面山の法嗣三洲白龍・正徳六年撰『承陽古佛年譜吟』（『新纂禪籍目録』所収、212頁）がある。しかし、その所在が不明であり比較できず、面山の「年譜偈」との内容やその関連も判明しない。

本書の関連書には以下のごとく数種ある。いずれもその注釈書といえよう。

撰者不詳『永平祖師年譜和偈』一卷（岸沢文庫蔵、『禅目』23頁）

機鋒良尖撰、享和元年写・泰嶺筆『永平祖師年譜和偈補注』一卷

（岸沢文庫蔵、駒図（MN）F 〇一—二〇）

智顔白逢撰『永平祖師年譜偈注解（外題「註永平年譜偈」）（明和

二年刊、駒図一—四四—W一九）

智顔白逢撰『永平祖師年譜偈注解訂議』明和五年序刊、駒図〇八四

—一六。『統曹洞宗全書』「注解一」に所収）

黄泉無著撰、文化十三年写『永平祖師年譜鈔』（岸沢文庫蔵）

参考 『曹洞宗全書』 解題・索引 597頁、桜井秀雄師「解題」

2、永平祖師贊并序 一冊（刊本）

本書は『曹全書』には収集されていない。本書の末尾に「于崑／享保

十七壬子八月二十八日／北海若雲濱城空印禪寺老梅室謹撰」とあるように、面山瑞方が享保十七年（一七三二）八月、小浜市空印寺の方丈「老梅室」において撰述したものである。

前半に日本に伝わった禅宗二十四流の中、三家として第一に千光（栄西禪師）、第二に高祖道元禪師、第三に聖一（円爾）禪師を採り上げ、その行状・行録・年譜を元に分析しつつ、高祖の行実を推揚する比較的長い「序」文を置き、高祖への敬慕の念を縷々のべている。その後「五言百句」の偈を列挙している。前掲の「年譜偈」とは多少相違し、時系列的に列挙しているものではない。行実の主要事項を達意的に述べ讃嘆している内容であり、末尾には「達磨あつてより後、誰か此れと鴻なるを比せん。二萬四千の寺、悉く一鉢の中に飯す。謂う事なかれ、鼎足の如しと。その徳、廻として同じからず。云々」（原漢文）とあり、文字通り遠孫の「永平祖師贊」である。

3、高祖禪師和讃

本書は、萬仞道坦撰『句雙紙』に合綴されているものの一つである。なお流布本の俳諧集『句雙紙』とは全く異なる別本である。この『句雙紙』は明和六年（一七六九）撰であるが、所収されている本書「高祖禪師和讃」は、末尾の本文「寛保二年己二至り、四百九十七年ト、流ヲ汲テ河、一派ノ児孫カソウレバ、恒河沙数ニ餘リケル」とある個所から寛保二年（一七四二）の撰述であると伝える。この「高祖禪師和讃」の後には「イボノマジナイ」等が付いていて、萬仞の撰述したものが沢山含まれている。

本書では、高祖の両親を「源氏ノ苗裔通親ノ二男」「母ハ九条ノ関白之基房公之娘」としている。前述した版橈晃全や面山瑞方による説の踏

襲といえよう

その和文は、誠に流麗な美文調であり、声に出し読み上げると心地よい響きを持つている。種々の「逸話」「伝説」も盛り込んでいるが、木下道正の逸話はない。

4、永平高祖行実紀年略

本書は、玄透即中撰『辨道話』（天明八年刊）と合綴し、その後についているものである。これも『統曹洞宗全書』『史伝』に所収。

冒頭に「刊刻辨道話縁起」（序文）があり、末尾に玄透即中の「識語」がある。

皆天明第八歳龍次戊申春王正月

幻寓佛眼玄透即中拜稽首

書於空華室中 角印・角印

原本『辨道話』末尾には、「助縁」記も付いていて多くの寄付者の名が連ねられている。その後の「刊記」には、次のように蔵版と刊行の責任者である弟子復庵遵古の名が記されている。

天明八年歳次戊申夏安居

攝州熊耳山佛眼禪寺蔵版（行書）

幹事比丘遵古謹誌（楷書）

円印・角印

また次頁の一紙の末尾に筆字で「英道拝持」と認めてある。これは本書の所持者である。

本文は、「永平高祖行実紀年略」の題名の後に縦横の野線が引かれ、上部に大きな字で「京兆誕生」から「示現圓寂」までの十五項目が記され、その下部に解説文が述べられている。

『統曹洞宗全書』「史伝」では、それを編集し、項目を本文より二字下げで前に出し、その後には解説文を並べている。また原本では、その本文に「返り点」の他に右横に「送り仮名」も付しているが、「統曹全書」ではその「送り仮名」は外している。

参考 『曹洞宗全書 解題・索引』596頁、桜井秀雄師「解題」

5、永平和讃 折本（一冊）

本書は、その末尾の「刊記」に次のように記されている。

弘化四年丁未仲秋

江戸谷中玉林禅寺

現住蘭關秀叟印施

本書の撰述者は、印施の玉林寺住持蘭關秀叟の可能性もあるが不明である。本書は弘化四年（一八四七）仲秋（陰曆八月）に折本の形で刊行され、広く流布された模様である。流布本の中には、冒頭に録に坐し拂子を右手に持つ高祖像のものがある（三重県東雲寺蔵）。これには「刊記」がない。

本文は、「帰命頂禮元古佛」に始まり、「南無永平元古佛」で終わる。その後に「釋迦歎偈」があり、その後には上掲の「刊記」が付く。また本文は、行書で書かれ、漢字の大部分にはルビ（読み仮名）が施されている。

【凡例】

一、本文対照の掲載は、刊本・写本に限らず基本的に成立順である。なお、『永平開山元禅師行状伝聞記』は文化二年に刊行されているが、他の三本はいずれも写本である。「和讃類」の五本は、いずれも刊本

である。

一、翻刻にあたり、いずれの史料においても原則として原文にしたが、組版上、便宜的に次のようにした。

①本文を対照する上で内容により各段および文節に分け、上蘭外に本文内容の小見出しを付けた。

②史料の原本にある異体字・略字・別体字・俗字類、および誤字は、原則として活字用漢字（常用漢字）に統一した。但し、原文の旧漢字はできるだけ残した。

「道元禅師行状伝聞記」は、文化二年の刊本を除き他の三本は「写本」であるので、多くの異体字類がある。また「和讃類」五本はすべて刊本であるが、その中の「高祖禅師和讃」の原本である「再写本」（大正十二年筆、駒込所蔵）の複写を入手した。

「曹全書」所収の分は、それを活字にしているが、ここでは敢えてそこに含まれる異体字をわずかの数であるが後方に挙げておく。

〔例一〕「永平開山元禅師行状伝聞記」（旭伝院蔵本）

亶（事）、若（若）、將監（將監）、惡（惡）、遁（遁）、獻山（獻山）、尋（尋）、法師（法師）、蒙（蒙）、旅（旅）、值（值）、臚・臚（臚）、惡僮（惡黨）、每（無）、以末（以来）、難（難）、故（故）、生死（生死）、怨（怨）、此兒（此兒）、喫（照）、奇異（奇異）、畏（畏）、難（歎）、凡（凡）、丸（丸）、稱（稱）、添（添）、樹（樹）、仰（仰）、隨（隨）、寵（寵）、自然（自然）、庶（庶）、稱（稱）、嘆、永（永）、御（御）、路（路）、踴（踴）、咷（咷）、氣（氣）、然（然）、喪處（喪處）、宋（叙）、靈・靈（靈）、供養（供養）、思（恩）、禱（禱）、幼（幼）、傷（傷）、勅宣（勅宣）、禅閣（禅閣）、

辱(書)、命(命)、貴賤(貴賤)、虧(虧)、內訌(內談)、密(密)、衰(衰)、別腸(別腹)、減少(減少)、棧嫌(機嫌)、亘(亘)、美(承)、效(敬)、顛(貌)、慈恩(慈恩)、競(競)、美(美)、種(種)、籠(籠)、珍菓(珍菓)、宴(宴)、歌舞(歌舞)、短冊(短冊)、堂(堂)、賴(賴)、再(再)、恣(戀)、羅(羅)、昼(晝)、降(降)、貪(貪)、穿(穿)、脇(脇)、禍(禍)、死(死)、蝸牛(蝸牛)、紆細(仔細)、臨薨(臨薨)、沉淪(沈淪)、極(極)、負(負)、嘉臚(嘉臚)、廿(廿)、初(初)、僧侶(僧侶)、縮素(縮素)、夙(夙)、歲(歲)、戒檀(戒檀)、聰(聰)、妬(妬)、肝冤(肝冤)、預(預)、經(經)、法器(法器)、壽(壽)、答(答)、圖(圖)、旨(旨)、佟(修)、定坐(定坐)、況(設)凶(聞)、盱(謂(所謂)、垂(垂)、潔(潔)、疑(疑)、決定(決定)、印(印)、蔭涼(蔭涼)、乞(乞)、遊(遊)、頡(頡)、冀(冀)、留(留)、獸(獸)、奏(奏)、麻(麻)、夙(夙)、隱(隱)、臆(臆)、難(難)、儀(儀)、凜(凜)、煎(煎)、茉(葉)、與(與)、呎(呎)、泥涅(泥涅)、边(辺)、寢(寢)、伏法(佛法)、讚(讚)、夏(夏)、梵網(梵網)、奴婢(奴婢)、卒(卒)、輩(輩)、鼻(鼻)、甲冑(甲冑)、奧(奧)、愕(愕)、還(還)、聽(聽)、俟(俟)、左(左)、恭慕(恭慕)、顛倒(顛倒)、倭國(倭國)、叢(叢)、茲(茲)、英(英)、徑山(徑山)、詰(詰)、寺(寺)、扶桑(扶桑)、老鍾(老鍾)、寧(寧)、詔(詔)、疾(疾)、隄(陰)、勤(勤)、鬱(鬱)、觸(觸)、甘美(甘美)、隔(隔)、幽(幽)、減(減)、飛未(飛來)、詔(詔)、寐(寢)、袂(袂)、椋梁(柱梁)、咲(咲)、佩(佩)、鉢囊(鉢囊)、道場(道場)、說法(說法)、灯燭(灯燭)、擎(擎)、法息(法息)、苾滿(苾滿)、頃(頃)、寓居(寓居)、正直

(正直)、方便(方便)、檀越(檀越)、平(聖)、貞(聖)、傘(傘)、澁(澁)、朽(朽)、囊(囊)、禱(禱)、悅(悅)、脫(脫)、蛇(蛇)、羅漢(羅漢)、降臨(降臨)、團扇(團扇)、榔(榔)、勝會(勝會)、彌(號)、雖(雖)、謬(謬)、根枕(根機)、膾炙(膾炙)、寐(寂)、澡浴(澡浴)、遮民(遮民)、輩(輩)、靈隱(靈隱)、契(契)、一滴(一滴)

〔例二〕「勅賜佛法禪師永平開山道元和尚行狀伝聞記」(泉岳寺藏本)

亘(事)、故(故)、直(直)、凡夫(凡夫)、旨(旨)、欲(欲)、衆生(衆生)、若(若)、閉(聞)、師(師)、葉(葉)、易(易)、擎(擎)、寫(寫)、永平(永平)、和尙(和尚)、斧心(斧心)、尋(尋)、庚申(庚申)、奇異(奇異)、畏(畏)、嘆(嘆)、丸(丸)、樹(樹)、將鑑(將鑑)、寵愛(寵愛)、左傳(左傳)、通達(通達)、庶人(庶人)、稱嘆(稱嘆)、兼(承)、取(取)、號咷(號咷)、表處(喪處)、子阜(子阜)、想像(想像)、嗟(嗟)、初世(初世)、難(難)、俱舍(俱舍)、誠(誠)、敵(敵)、叡(叡)、命(命)、盈顧(盈顧)、謀(謀)、五衰(五衰)、別腹(別腹)、華(華)、御只(御只)、那達(那達)、裝束(裝束)、競(競)、優美(優美)、遊(遊)、幕(幕)、花鬘(花鬘)、御宴(御宴)、舞(歌舞)、寔(實)、千顛(千顛)、再(再)、綉(綉)、疊(疊)、祇(袂)、映(映)、詔(詔)、鬢(鬢)、昼(晝)、降(降)、惡賊(惡賊)、奴等(奴等)、判(判)、眷屬(眷屬)、奪(奪)、與(與)、穩當(穩當)、勢(勢)、詰(詰)、鼎(鼎)、股膝(股膝)、足踏(足踏)、契約(契約)、挖鉢(挖鉢)、無益(無益)、蒙(蒙)、蝸牛(蝸牛)、遂(遂)、臨薨(臨薨)、沉淪(沈淪)、真(真)、愕(愕)、

賢慮(賢慮)、負(員)、積(積)、僕(僕)、戒壇(戒壇)、聰惠(聰惠)、魁(魁)、往復(往復)、文章(文章)、拒(拒)、憤(憤)、謀(謀)、覓(魂)、冥顯(冥顯)、法器(法器)、屬(屬)、答(答)、盡(盡)、滲漏(滲漏)、定坐(定坐)、虛空(虛空)、極(極)、灵應(靈應)、汚(濁)、不潔(不潔)、唐(唐)、旅(旅)、疑滯(疑滯)、公胤(公胤)、融(融)、頤(頤)、惡獸(惡獸)、葦原(葦原)、單刀(單刀)、說(說)、臙月(臙月)、忽然(忽然)、員(負)、煮(煮)、澤邊(澤邊)、蛇尾(蛇尾)、床(鹿)、喚(喚)、遲(遲)、驛(驛)、派(派)、奴婢(奴婢)、拈切(拈切)、頸(頸)、大平(大衆、潛)、奧(奧)、且過(且過)、傷(傷)、本郷(本郷)、還(還)、定坐(定坐)、珍布(珍布)、獨語(獨語)、怨(怨)、慙(慙)、饗應(饗應)、頓倒(頓倒)欵(欵)、獅子(獅子)、虫(虫)、毀犯(毀犯)、宥(宥)、叢林(叢林)、徑山(徑山)、器(器)、寸陰(寸陰)、雜(雜)、服勒(服勒)、觸(觸)、耳美(甘美)、取困(取困)、貪(貪)、奴僕小婢(奴僕小婢)、駝(駝)、障(障)、忽(忽)、神咒(神咒)、免(免)、香風(香風)、虎(虎)、響虫(響虫)、葦將軍(葦將軍)、閔(閔)、怨敵(怨敵)、豹(狗)、振舞(振舞)、嗅異(嗅異)、鉢囊(鉢囊)、圖(圖)、河尻(河尻)、謹(謹)、幽冥(幽冥)、衷(衰)、神廟(神廟)、烟(烟)、隔(隔)、昼(晝)、天竺(天竺)、號(號)、銀(銀)、奈時(泰時)、蜀(蜀)、獸蛇蝎(獸蛇蝎)、羅漢(羅漢)、降臨(降臨)、礼謁(礼謁)、輩(輩)、灵骨(靈骨)、虚坐(虚坐)〔例三〕「永平開山道元禪師行狀伝聞記」(盛林寺藏本)

永(永)、叟(事)、難(難)、死(死)、若(若)、伏法(佛法)、師(師)、初(初)、兒(兒)、畏(畏)、玉杪(玉樹)、夏(爰)、

將鑑(將鑑)、仰(仰)、寵愛(寵愛)、以(此)、称嘆(称嘆)、有(有)、重(重)、兼(承)、取(取)、紅葉(紅葉)、哀(哀)、掃(掃)、喪處(喪處)、御勤(御勤)、想像(想像)、桑門(桑門)、幼(幼)、愁傷(愁傷)、喪齋(喪齋)、過(過)、深(深)、凡(凡)、取聞(取聞)、勅宣(勅宣)、命(命)、衰(衰)、結(結)、夢(夢)、別腹(別腹)、繼子(繼子)、賺(賺)、亘(宜)、處(處)、賢慮(賢慮)、本懷(本懷)、御只(御貌)、保類(保養)、棧(遊)、競(競)、優美(優美)、惡(惡)、兼(承)、兩(兩)、口(口)、劫奪(劫奪)、業(業)、鼎(鼎)、股(脇)、伊美(伊美)、嗚牛(嗚牛)、臨薨(臨薨)、亘(宜)、極(極)、不捫(不捫)、聰(聰)、戒檀(戒檀)、聰(聰)、魁(魁)、文章(文章)、降(降)、覓(魂)、答(答)、旅(旅)、公胤(公胤)、融(融)、頤(頤)、謹(謹)、葦原(葦原)、紆衣(紆衣)、濱(濱)、温類(温貌)、菜(菜)、帆(帆)、澤邊(澤邊)、蛇尾(蛇尾)、線(纒)、繇(繇)、躡(躡)、無道、妻(爰)、嗟(嗟)、含(含)、還(還)、圍(圍)、躡(躡)、慙(慙)、顛倒(顛倒)、欵(欵)、風相(風相)、輩(輩)、徑山(徑山)、叢社(叢社)、寸陰(寸陰)、服勒(服勒)、耳美(甘美)、小婢(小婢)、歸投(歸投)、深思(深思)、聚促織(聚促織)、葦將軍(葦將軍)、衆生(衆生)、穩(隱)、觀(觀)、鬱憤(鬱憤)、勅制(勅制)、聰(聰)、逐(逐)、道場(道場)、滿(滿)、壽永(壽永)、傘松(傘松)、結構(結構)、與(興)、烟(烟)、神廟(神廟)、隔(隔)、昼(晝)、鉢囊(鉢囊)、緇(緇)、禱(禱)、亡灵(亡靈)、傷(傷)、猿鶴(猿鶴)、膾炙(膾炙)、輩(輩)〔例四〕「高祖禪師和讚」

凡(凡)、市匠(師匠)、予(弔)、建福(建福)、迂化(遷化)、叟

(事)、帆(帆)、兼陽(承陽)、數(數)

一、漢字は、原本を忠実に翻刻したいとの願いで、旧漢字と新漢字が混在するままにした。

一、固有名詞の人名については、これもできるだけ原本通りにした。

一、句読点については、読解に便利なようにすべて統一的につけた。

一、返り点は、それぞれの原本のままにしたが、一部補ったり、修正した箇所もある。

一、送り仮名もそれぞれの原本のままに保つように努めた。

一、文中の仮名文字中、二字合体の仮名用字は必ずしも活字用正字に改めなかった。

「(コト)、氏(トモ)、ノ(シテ)、伝(ト云)、へ(ナリ)

なお写本の筆者の中には、「メ」の字を読めず「メ」と記している者もいるが、この扱いは難しく一律に「ママ」としたり、あえてその誤写を直している箇所もある。

【注記】

「道元禪師行状伝聞記」の第七話に太白(天童)山へ上る際、「山賤(やまがつ・やましづ)・樵」に出会い、その案内で景德寺へ到ることができたと記される。実はその「山賤」は太白星の使いであり、天童山の開山義興にまつわる逸話に由来する。しかし、日本の中世ないし近世で用いられる「山賤」は、「山窩」と同様、山間に住む獵師や樵を指し、差別語である。ここではそれに留意しつつ、歴史資料として用いたことをお断りしておきたい。

【前回の訂正】

通し番号10頁の上段にある見出し語「此巻を護持遵守すべき事」と一段目「元古佛縁記」の文章を9頁の方に移動する。通し番号22頁の上段にある見出し語「道元禪師の数多い諱号」を23頁に移動する。

【今回の御礼】

当該書に史料をご提供頂いた静岡旭伝院(青木浄翁師)、東京泉岳寺(小坂機融師)、京都宮津市盛林寺院(井笹良昭師)・曹洞宗文化財調査委員会に甚深なる感謝の意を表します。

『永平開山元禪師行状伝聞記』・『永平祖師年譜傷』・『永平高祖行実紀年略』の三冊は、『曹洞宗全書』『続曹洞宗全書』に所収されているものである。また『永平祖師贊并序』『永平和讃(折本)』の二冊は、駒澤大学図書館の所蔵書である。合わせて感謝申し上げます。また元学生の河合功一さんには、一部写本の異体字抜き出しと対照表作成の協力を頂き、厚くお礼を申し上げます。

外題（撰者）

内題（成立・刊写）

序文

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>寶永六年五月 閑虛聲・ 宝曆九年十月 普門</p> <p>⑤</p>	
<p>勅賜佛法禪師 永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>勅賜佛法禪師 永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>享和二年夏安居日 南海之散人胡乱齊筆</p> <p>⑤</p>	<p>夫レ不立文字教外別傳トハ、我宗、 語句ニシテ佛心宗ノ方便説ナリ。 上根上智ノ者ハ、文字ノ文字ニア ラザル事ヲ知故ニ悟リ、中下根ノ 者ハ、迷悟ヲモ超越ス故ニ直指 人身見性成佛ナリ。迷悟ニ依ルカ 故ニ凡夫ナリ。不立文字旨開示セ ント欲シテ、佛ト説キ衆生ト説 キ、菩提ト説キ煩惱ト説キ、迷ト 説キ悟ト説キ、極樂ト説イテ、引 導シ成佛セシメ玉フ。若シ然ラズ ンバ、暗キヨリ暗キニ入テ佛法ノ 名字ヲダモ聞ザラン。</p> <p>茲ニ釋尊ヨリ五十一代曹洞元祖佛 法禪師、獨リ入宋ノ佛心宗ヲ傳テ、 此ノ方ヲ救イ玉フ事、誠ニ我等ガ 幸イナリ。</p> <p>今五百五十年ニナンナントシテ門 下已ニ二万五千餘院、其ノ枝葉ヲ</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>文化二年 萬松崇泉院主宰刊</p> <p>⑩</p>	
<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>⑤</p>	

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
	<p> <small>サカ</small>榮ルモ根ヲ尋ルニ、<small>カウフン</small>禪師ノ厚恩ニ <small>シカ</small>アラズヤ。然ルニ我宗ノ道俗、其 <small>シカ</small>流ヲクンデ源ヲ知ラザル者多シ。 <small>クイ</small>嗟、<small>クイ</small>喰ヘレ其味ヲ知ラザルガ如シ。 <small>ニ</small>ユエイカントナレバ、世ニ禪師行 <small>ハ</small>狀有リト云ヘレ、或文章或偈頌故 <small>ニ</small>ニ、一文不知ノ童蒙ニヨイテハ讀 <small>ス</small>スル事アタハズ。此ニ行狀記二卷 <small>イ</small>草書ニ似テ、文体イヤシクモ知リ <small>ニ</small>易ク解シヤスキヲ以テ、童蒙ノ為 <small>ニ</small>ニ書寫シテ世ニフ。傳フ。若一度 <small>モ</small>モヨミスル者、禪師ノ道德奇跡ヲ <small>信</small>信スル則ニハ、面下元祖ノ教化 <small>ニ</small>ニ預ルト何ゾコトナラン。願ラ <small>ク</small>クハ、流ニサカ上テ不立文字ノ旨 <small>ヲ</small>ヲ得セシメン事ヲ。然ルトキンハ、 <small>ク</small>觀ニ 彼久遠ニ猶如ニ今日ニ末世ニ <small>シ</small>シテ末世ニアラズ。心佛及衆生 <small>是</small>是三無差別ニナラン。實ニ我宗門 <small>ノ</small>ノ兒孫トモ釈氏トモ云ベキナリ。 <small>若</small>若然ラズンバ、文字ノ文字ナル <small>マ</small>マ、ニ、上佛祖ヲ慕フテ香花ヲ <small>擎</small>擎 供養シテ、報恩謝徳一分ヲ奉 <small>ル</small>ルヘシ。是レ入法界ノ結縁ナラ <small>ン</small>ン。猶上四恩ニ報シ、下モ三有ヲ </p>		

目錄

<p>永平開山元禪師之行狀傳聞記目錄</p> <p>一 御誕生事附發心給事</p> <p>二 若君愁傷給事附將監慰奉事</p> <p>三 若君花見事附高充惡賊退治事</p> <p>四 若君夜半遁叡山附高充尋出申事</p> <p>五 蓮常法師神罰蒙事附三輪示現事</p> <p>六 師渡唐之事附旅行解毒圓之事</p> <p>七 師太白星值玉事附戒臘公事</p> <p>八 惡僧共神天之罰蒙事</p> <p>九 師臘質了如淨依事並亡靈救玉事</p> <p>十 虎齒痕之拄杖事並皈朝之路惡儻值玉事</p>	<p>救フノミ。</p> <p>于時享和二年夏安居日於布施氏草庵書寫</p> <p>南海之散人胡乱齋</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記目錄卷之上</p> <p>一 御誕生事付發心シ給フ事</p> <p>二 若君愁傷シ玉フ事付將監慰奉ル事</p> <p>三 若君花見付高充惡賊退治之事</p> <p>四 若君夜半遁叡山付高充尋出シ申ス事</p> <p>五 蓮常法師神罰蒙ル事付三輪示現之事</p> <p>六 師渡唐之事付旅行解毒圓之事</p> <p>七 師太白星ニ值玉フ事付戒臘公事ノ事</p> <p>卷之下</p> <p>八 惡僧共神天ノ罰ヲ蒙ル事</p> <p>九 師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル事并亡靈ヲ救玉フ事</p> <p>十 虎齒痕之拄杖之事并歸朝之路惡儻ニ逢玉フ事</p>	

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>十一 龍天善神並一葉觀音現玉事 御父母生天事</p> <p>十二 師住弘之事並白山詣事</p> <p>十三 時頼師請寺建事 附師亡靈救並勅受玉事</p> <p>十四 師疾由入洛之事 附遷化示寂之事</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>十一 龍天善神并一葉觀音現玉事 附師御父母生天之事</p> <p>十二 師住持弘法之事并白山詣之事</p> <p>十三 時頼師ヲ請シ寺ヲ建ル事 附師亡靈救并勅ヲ受玉フ事</p> <p>十四 師病ニ由テ入洛之事 附遷化示滅之事</p> <p>目錄終</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>永平開山禪師之行狀傳聞記卷之上</p> <p>一、御誕生之事 附發心給事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀スルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山ヲ出難シ。故ニ生死流轉ノイマワシキ六趣四生ノ怨ミ有リ。佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>一ニハ御誕生之事 附發心シ玉フ事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀ズルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山マ出テ難シ。故ニ生死流轉ノイマハシキ六趣四生ノ怨アリ。若シ佛祖ノ出世ニ値ハズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>一 御誕生事 附發心シ給フ事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀ズルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山ヲ出難シ。故ニ生死流轉ノイマワシキ六趣四生ノ怨有。佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>發心シ給フ事 附御誕生ノ事</p> <p>夫ツラク 三界人物ノ有様ヲ觀スルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山出難シ。故ニ生死流轉ノイマハシキ六趣四生ノウラミアリ。若シ佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>
<p>家系・両親</p> <p>爰ニ我朝洞宗ノ元祖佛法禪師ノ遺跡ヲ尋奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云。姓ハ源氏村上天王ノ九世ノ</p>	<p>爰ニ我朝禪曹洞宗ノ元祖ノ遺跡ヲ尋奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト曰。姓ハ源氏、村上天皇九世ノ孫、</p>	<p>爰ニ我朝洞宗ノ元祖佛法禪師之遺跡ヲ尋奉ニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云フ。姓ハ源氏、村上天皇九世之</p>	<p>爰ニ我朝洞家ノ元、祖佛法禪師ノ遺跡ヲ尋子奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云。姓ハ源氏村上天皇九世</p>

御元人木下高
充

<p>孫、源ノ亞相公通親ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生有リ。御胎内ニ在マス事十三月也。</p>	<p>天告の神異 御母懐妊シ玉フ時、虚空ニ声アリ。告テ曰ク、此兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ為ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ時、清白ノ光御室ヲ照シ、異香薫ジケレバ、通親ヲ始侍從ノ人々奇異ノ思ヲナシケリ。</p>	<p>祖師の言 時ニ通親相人ヲ召テ、此若二名ヲ考エト有レバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見奉テ歎ノ云、若君ノ御姿秀異ニノ凡ナラズ。御眼ニ重瞳有リ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞召、御悅限リ無キ際、乳母御守リ數添テ、芝蘭玉樹ノ御メクミ浅カラヌコソ道リナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ザリシカ、智仁勇ノ德備リ、文武二道ノ好士ナリ。通親是ヲ召</p>
<p>源ノ亞相公通忠ノ御長子ナリ。御母ハ執行能圓ノ御女ナリ。師ハ正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、胎内ニ在 事十三月ナリ。</p>	<p>御母懐妊シ玉フ時キ、空ニ声アリ。告テ曰ク、此ノ兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ為ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ時キ、清白ノ光リ室ヲ照シ、異香薫シテケレバ、通忠ヲ始メ、侍從ノ人々、皆奇異ノ思ヲナシケル。</p>	<p>時ニ通忠相師ヲ召シ、此ノ若二名ヲ考エト有リケレバ、相師畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆曰ク、此君ノ御姿秀異ニシテ凡ナラズ。御眼ニ重瞳アリ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母モ由ヲ聞食、御悅限無キ際、乳母御守ノカズソエテ芝蘭玉樹ノ御惠、浅カラズ社見エニケル。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ生年二十ニタラザリシガ、智仁勇ノ德ヲソナエ、文武二道ノ好士ナリ。通忠</p>
<p>孫、源ノ亞相公通親ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、御胎内ニマシマス事十三月也。</p>	<p>御母懐妊シ玉フ時、空ニ聲在リ。告テ曰、此兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ爲ニ托胎スト。然シテ誕生シ玉フ時、清白ノ光リ御室ヲ照シ、異香薫ジケレバ、通親ヲ始侍從ノ人々、奇異ノ思ヲナシテケリ。</p>	<p>時ニ通親相人ヲ召テ、此若二名ヲ考エト有リケレバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆ジテ曰、此君ノ御姿秀異ニシテ、凡ナラズ、御眼ニ重瞳有リ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞召、御悅限リ無キ儘、乳母御守ノ數添テ、芝蘭玉樹ノ御メグミ浅カラヌ社理リナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ラザリシガ、智仁勇ノ德備リ、文武二道ノ好士ナリ。通親是</p>
<p>ノ孫、源ノ亞相公通忠ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。師ハ正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、胎内ニマシマス事スデニ三月。</p>	<p>御母御懐妊シ玉フ時、空ニ声アリ。告テ曰、此兒ハ五百年來ノ聖人ナリ。法ノ爲ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ。時清白ノ光室ヲ照シ異香薫ジケレバ、通忠公ヲ始メ、侍從ノ人々、奇異ノ思ヲナシテケリ。</p>	<p>時ニ通忠相人ヲ召レ、此ノ若二名ヲ考ヘヨト有リケレバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆ノ曰、此ノ君ノ御姿秀異ニノ凡ナラズ。御眼ニ重瞳アリ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞食、御悅カギリナキ際、乳母御守ノ數ソヘテ、芝蘭玉樹ノ御メグミ浅カラヌ社理ナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ザリシガ、智仁勇ノ德兼ソナワリ、文武二道ノ好士ナリ。通忠</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>出シ、若君ノヲモト人ニ附玉フ。 高充仰ニ隨テ、晝夜守護ヲ怠ラズ寵愛シ奉ル。</p> <p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨山ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、是ヨリ一切ノ文字、師ノ訓ニ不依ノ、自然ニ通達シ玉エリ。仍テ其名四方ニ響キ、上王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ル迄、誠ニヤ名ニシアフ神童丸ノ生智トテ、稱嘆セザル方モ無シ。</p> <p>○建永元年 悲母逝去 御遺言</p> <p>然ノ神童丸八歳ニ成リ玉フ頃ハ、建永元年丙寅九月三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重クシテ殆ク見エサセ給ハ、神童本ヨリ至孝ニシテ臆病ノ至レルヲ、恒ノ之發姐ノ有様ナリ。母人重キ枕ヲ揚玉イ、如何ニ神童ウチ玉ハレ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ、誰モ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル迹ノ孝行ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、<u>遯</u>ニ出家シテ母ガ菩提ノヨサ。寢タノシキワ桑門實ニタウ</p>	<p>是ヲ召シ出シ、若君ノ御元人ニ付玉フ。高充仰ニ從テ、晝夜守護怠ラズ寵愛奉ル。</p> <p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、此ヨリ一切ノ文字、師ノ訓ニ由ラズシテ、自然ニ通達シ玉ヘリ。仍テ其ノ名四方ニ響キ、上ハ王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ルマテ、誠ニヤ名ニシラウ神童丸ノ生智トテ、稱嘆セザル方ハナシ。</p> <p>然ジテ神童丸御歳八歳ニ成リ玉フ。時キニ建永元年丙寅九月十三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重クシテ殆ク見エサセ給ハ、神童本來至孝ノ志ニテ臆病ノ至レル事、恒之發姐ノ有様ナリ。母上重キ枕ヲ上ケ玉ヒ仰セケルハ、如何ニ神童丸承レヨ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ誰カノガレヌニ玉ノ緒ノ絶タル後ノ孝事ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、<u>遯</u>ニ出家ヲ遂ゲ母ガ菩提ヲヨザシナレ。</p>	<p>ヲ召出シ、若君ノオトモ人ニ附ケ玉フ。高充仰ニ隨テ、晝夜守護怠ラズ寵愛奉ル。</p> <p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨山ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、此ヨリ一切ノ文字、師ノ訓ニ由ラズシテ、自然ニ通達シ玉エリ。仍テ其名四方ニ響キ、上王公大臣ヨリ、下庶人ニ至迄、誠ニヤ名ニシアフ神童丸ノ性智トテ、稱嘆セザル方モナシ。</p> <p>然テ神童丸八歳ニ成玉フ頃ハ、建永元年丙寅九月三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重シテ危ク見エサセ給エバ、神童本來至孝ニシテ臆病ノ至レル事、恒之發姐ノ有様也。母上重キ枕ヲ揚ゲノ玉ヒケルハ、如何ニ神童ウケ玉ハレ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ、誰モ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル迹ノ孝事ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、<u>遯</u>ニ出家シテ母ガ菩提ノヨサシナレ。取タノシキハ、桑門</p>	<p>是ヲ召出シ、若君ノヲモト人ニ附玉フ。高充仰ニ從イ、晝夜守護ヲ怠ラズ寵愛奉ル。</p> <p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨山ガ百詠ノ詩ヲヨミ、七歳ニノ毛詩左傳ヲヨミ、此ヨリ一切ノ文字言句、師ノ訓ニ由スノ、自然ニ通達シ玉ヘリ。依テ其名四方ニ響キ、上ハ王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ル迄、誠ニヤ名ニシラウ神童丸ノ生智トテ、稱嘆セザル方モナシ。</p> <p>然ノ神童丸八歳ニ成リ玉フ頃ハ、建永元年丙寅ノ九月三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重病殆ク見ヘザセ給ヘバ、神童君本來至孝ニテ臆病ノ至レルヲ、恒之發姐ノ有様ナリ。母上重キ枕ヲアゲノ玉フヨフ、如何ニ神童承レ、露ニ宿假有為ノ身ワ、誰レモ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル跡ノ孝事ニワ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、<u>遯</u>ニ出家ノ母ガ菩提ノヨザシナレ。取タノシキワ尋門實貴キワ法ノ道ト、</p>

奠典

無常を觀ず

<p>トキハ法ノ道ト、是ゾ最後ノ御言、三十字四年ノ御齡申セバ、人ノ花盛、秋ノ紅葉ト置露ト共ニ、御マカリマシマセバ、通親モ若君モ侍従アマタノ人々モ悲泣哀嘆限リナシ。</p>	<p>取タノシキ桑門實ニタウトキハ法ノ道ヲト、是ヲ最後ノ御言、三十字四年ノ御齡イ申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニヨク露ト共ニ、御マカリマシマセハ、通忠モ若君モ侍従ノ人々マデ、悲泣哀嘆カギリナシ。</p>	<p>實ニトウトキ法ノ道ト。是レゾ最後ノ御言バ、三十字四年ノ御齡申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニ置露ト共ニ、御マカリマシマセバ、通親モ若君モ侍従アマタノ人モ、悲泣哀嘆限リ無シ。</p>	<p>是ゾ最後ノ御言、三十字四十ノ御齡申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニ置ク露ト共ニ御マカリマシマセバ、通忠公若君モ侍従アマタノ人々迄、悲泣哀嘆カギリナシ。</p>
<p>就中別路ノ深思ハ若君ニ留タリ。擗号踴號眺身ニアマリ、五体心肉モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカワル。サレドモ歸ラヌ無常ノ道、終ニ葬送シ奉ル。然ノ若君ハ泣々喪處ノ御勤ノ如在。莫祭マシマセバ、子貢曾子ガ古エモカクヤト想像シツ、見ル人モ、共ニ感涙頻ナリ。</p>	<p>中ニ就テモ哀レノイク〜ハ若君ニ留リヌ。擗踴號眺身ニ餘リ、五内心膂モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカハル、サレ共飯ラヌ悔ノ道ヲ、終ニ葬送シ奉ル、然シテ若君ハ泣々喪處ノ御務、如在ノ祭奠マシマスハ、子臯曾子ガ古エモカクヤト想像シツ、見ル人モ聞ク人モ、共ニ感涙シキリナリ。</p>	<p>就レ中別路ノ思イク〜ハ若君ニ留タリ。擗踴號眺身ニアマリ、五内心肉モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカワシ、サレドモ歸ラヌ悔ノ道、終ニ葬送奉ル。然テ若君ハ泣々喪處ノ御勤如在ノ祭奠マシマセバ、子貢曾子ガ古モカクヤト想像シツ見ル人々モ、共ニ感涙頻ナリ。</p>	<p>就レ中別テ哀ノイク〜ワ若君ニ留タリ。去レ共歸ラズ□□リ、五内心膂モ、ヤミ〜ト磨碎マスカト、氣ツカワル。去レ共歸ラヌ悔ノ道、終ニ葬送奉ル。然ノ若君ハ泣々喪處ノ御勤如在ノ祭奠マシマスハ、子臯曾子ガ古ヘモカクヤト想像シツ、見ル人モ聞ク人モ、共ニ感涙セザルワナシ。</p>
<p>カクテモノウキ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、灯ヒ少ク暁シツ、御香炷テ供養ス。煙リツヤ〜見玉フニ、火影ノ糸野馬ノ影、有カト見エテ無キ物ヲ、深ク嘆シテノ玉フハ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ハ</p>	<p>カクテ懶キ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ燈火細明シツ、御香炷テ供養マス。烟ヲ寂々見給フニ、ヒカケノ絲野馬カゲ、有ルカト見ヘテ無キ物ヲ、深ク嘆メノ玉フハ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ハ常ナラヌ理</p>	<p>カクテモノウキ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、燈捕捉暁シツツ、御香炷テ供養マス。煙リツヤ〜見玉フニ、火影ノ糸野馬ノ影、有カト見エテ無レ物ヲ、深ク嘆ジテノ玉フハ、嗟呼物ニオキ人ニヨキ、世ハ常ナラ</p>	<p>カクテ懶キ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、灯ホソク暁ツ、御香炷テ供養マス。煙リヲツヤ〜觀タマフ、ヒカゲノ絲野馬ノカゲ、有ルカト見ヘテ無キ物ヲ、深ク嘆ノ玉フワ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ワ常</p>

*「去レ共歸」の右横に「ジャクユフコゴウ」とある。これは「擗踴眺(身ニアマリ)」の字句の一部と思われ。異本参照。

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>常ナラヌ理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一首ノ御詠アリ</p> <p>○世ノ中ハ市ノノ假屋ゾマテシバシ、誰モ残ラヌ秋ノ夕暮</p> <p>ト詠シ玉フテ、更ニ思召様ハ、カ、ル常無キ世ノ中ノ、夢ノ榮花ハ何ニナラズ。疾リ桑門ノ身トナリテ、生處ノ恩ヲ報ズベシ。一ニハ親恩深カ為メ。二ニハ利生限り無キ。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三宝ト、禱マシマス御心底有リ難シト云フハカリ。是發心ノ始ニテ世ニ幼ケナキ若君ノカ、ル弘誓ノマシマス、タメシ希ナル御事也。</p>	<p>リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、一首ノ御詠アリ。</p> <p>世ノ中ハ市ノノ假リヤゾイマシバシ、誰カ残ラン秋ノ夕暮</p> <p>ト詠シ玉イテ、更ニ思召ヤウハ、カ、ル常ナキ世ノ中ニ、夢ノ榮花ハ何ニナラン。疾桑門ノ身ト成ルベシ。一ニハ親恩深カ為メ。二ニハ利生限無ク。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三宝ト、祈念マシマス御心底アリガタシトモ云フハカリナシ。是レ發心ノ御初世ニ幼ナキノ若君ノカ、ル弘誓シマス事、タメシ希ナル御事ナリ。</p>	<p>又理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一首ノ御詠有リ。</p> <p>世ノ中ハ市ノノ假屋ゾマテシバシ、誰モ残ラヌ秋ノ夕暮</p> <p>ト詠ジ玉イテ、更ニ思召様ハ、掛ル常ナキ世ノ中ノ、夢ノ榮花ハ何ニナラズ、疾、桑門ノ身トナリテ、生處ノ恩ヲ報ズベシ。一ニハ親恩。二ニハ利生限り無ク。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三寶ト、禱マシマス御心底有リ難シトモ云バカリナリ。是發心ノ御初世ニ幼キ若君ノカカル弘誓ノマシマス事、タメシ希ナル御事也。</p>	<p>ナラヌ理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一種ノ御詠歌アリ。</p> <p>世ノ中ワ市ノノ假ヤゾマテシバシ、タレモノコラヌ秋ノ夕暮</p> <p>ト詠シ玉イテ、更ニ思召様ワ、カ、ル常ナキ世ノ中ノ、夢ノ榮花ワナニナラン。疾桑門ノ身ト成ルヘシ。一ツニワ親恩深カ為。二ツニワ利生カギリナク、三ツニワ自證アヤマトズ。守ラセ玉ヘ三寶ト、祈念マシマス御心底難レ有シトモ云バカリナシ。是發心ノ御初幼キ若君ノカ、ル弘誓ノマスコトハ、タメシ希ナル御事也。</p> <p>*付箋に「世ノ中ワ市ノノ假ヤゾマテシバシ誰モノコラヌ秋ノ夕暮」八歳ノ片</p> <p>人皇六十二代村上天皇九世ノ孫源ノ重相公通親ノ長男八歳時母死ス後チニ出家ス」とあり。</p>
<p>御詠 発心</p>	<p>下將監慰奉ル事</p>	<p>奉ル事</p>	<p>奉ル事</p>
<p>十歳、出家の 志念 俱舍論を読む</p>	<p>二、若君愁傷シ給事附將監慰奉</p>	<p>二 若君愁傷シ玉フ事付將監慰</p>	<p>二、若君愁傷シ玉フ事付將監慰</p>
<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過タレバ、若君十歳ニ成給</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過キヌレバ、若君十歳ニ成リ</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過ギヌレバ、若君十歳ニ成リ</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過ヌレバ、若君十歳ニ成リセ</p>

松殿基房、猶
子に望む

<p>フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果ノ出家シ玉ント、誠誓深クマシマセバ、世間ノ書経ヲ習ハンヨリ、出世ノ教論学バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ具舍論ヲ見玉エリ。人々奇異ノ思ヲナシ、誠ニ文義ヲ問奉ルニ、懸河ノ智辯ホトハシリ、世ノ智辨以テ敵スヘキアラズ。是凡ナラズ宿習ナリ。</p>	<p>玉フ。父母ノ報シ難キ恩徳ヲ恒ニ感嘆アサカラズ。果シテ出家シ玉ハント、試誠深クマシマス。故エ世間ノ書ヲ習ハンヨリ、出世ノ教論学バント、去來ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舍論ヲ見玉エリ。人々奇異ノ思ヲナシ誠ニ文義ヲ問エハ懸河ノ智辨ホドハシル。世智辨以テ敵スベキヤ。是レ凡ナラズ宿習ナリ。</p>	<p>玉フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果シテ出家シ玉ント、誠誓深クマシマス。故世間ノ書経ヲ習シヨリ、出世ノ教論ヲ學バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舍論ヲ見玉エリ。人人奇異ノ思ヲナシ、試ニ文義ヲ問ヒ奉ルニ、懸河ノ智辯ホトバシリ、世智辨以テ敵スベキニ非ズ。是凡ナラズ宿習也。</p>	<p>玉フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果シテ出家シ玉フ。誠誓深クマシマス、故世間ノ書経ヲ習ワンヨリ、出世ノ教論学バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舍論ヲ見玉ヘリ。人々奇異ノ思ヲナシ、誠ニ文義ヲ問上バ、懸河ノ智弁ホドバシリ、世智弁以テ敵スベカラ。是凡ナラズ宿習ナリ。</p>
<p>依之名聲遠ク響キ、貴賤口々稱スレバ、朝廷叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒タリ、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又稱ノ文殊童子ト申上ル。時ニ、松殿禪閣基房公九条殿ハ詩歌ノ道クラカラズ。学ハ内外ノ書ヲ兼テ、古今ニ通セルノミナラズ、五常四徳ノフルマイアリ。當世ノ摸楷トシテ、寔ニ名譽モ希ナレバ、御門賞命重々ニ貴賤仰ザルハ無シ。サレモ盈虧半ハアリ。六十字近齡マテ、御子一人モマシマサズ。神童丸ヲ才子トシテ、接家重職ヲ補ハント思召、通親エ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々ニ事アゲス。朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒ニテ文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又タ稱シテ文殊童子ト申ケル。時ニ、松殿禪閣基房公九條殿也。ハ、詩歌ノ道暗カラズ。學ハ内外ノ書ヲ兼テ今古ニ通ゼルノミナラズ、五常四徳ノ行儀アリ。當世ノ模楷、寔ニ名譽希レナル故エ、御門賞命重々ニテ、貴賤仰ザルハナシ。サレドモ盈虧ナカバアリ。六十字近キ齡マテ、御子一人モマシマサズ。仍テ神童丸ヲ才子トシテ、接家ノ重職補ナハシ思召、通忠公ヘ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々稱スレバ、朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又稱シテ文殊童子ト申上ル。時ニ、松殿禪閣基房公九條殿ハ、詩歌ノ道クラカラズ、學ハ内外ノ書ヲ兼テ古今ニ通ルノミナラズ、五常四徳ノフルマイアリ。當世ノ模楷トシテ、寔ニ名譽希ナレバ、御門賞命重々ニテ、貴賤仰ザルハナシ。サレドモ盈虧半バアリ。六十字ニ近キ齡イマデ、御子一人モマシマサズ。仍テ神童丸ヲ才子トシテ、攝家重職ヲ補ハント思召、通親エ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々コトアゲズ、朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ仍テ又稱文殊童子ト申上ル。時ニ松殿禪閣基房公九條殿、詩歌ノ道クラカラズ。学ワ内典外典兼テ今古ニ通ゼルノミナラズ、五常四徳ノ行儀アリ。當世ノ模楷トシテ、寔ニ名譽希ナル御方故、御門賞命重々ニテ、貴賤仰カザルワナケレモ、盈虧ナカバアリ。六十字ニ近キ齡ニテ、御子一人モマシマサズ。依テ神童丸ヲ才子トシテ、接家ノ重職ヲ補ハント思召、通忠公ヘ内談アル。</p>

<p>父、出家許さず</p>	<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>時ニ若君密カニ是ヲ聞召、悲泣シテノ曰ク、此ハ何事ヲ謀マス。接家ノ職ハ何ナラン。四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。マシテ人世ハ幾程ゾ。手ノ中ノ水ニ宿レル月影ノ、有力無キノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ナラン。出家社有レ、父上ト頻リニ願セ玉エトモ、通親許シ玉ハ子ハ、如何ハセント涙ニクレテ御在ス。</p>	<p>時ニ若君密ニ是ヲ聞キ玉イ、悲泣シテノ玉ハク、此ハ何事ヲ謀リマス。接家ノ職ハ何ニナラヌ、四王切利ノ福樂モ、五衰千化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結フ水ニ宿ドレル月影ノ、有力無キカノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ニナラン。出家コソアレ、父上トテ頻ニ願ハセ玉ヘ共、通忠許シ玉ハ子ハ、如何セント涙ニクレテ御居。</p>	<p>于レ時若君密ニ是ヲ聞召、悲泣シテ曰、此ハ何事ヲ謀マス、攝家ノ職ハ切何ニナラヌ、四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結ブ水ニ宿レル月影ノ、有力無カノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ナラン。出家社ソ有レ、父上トシテ頻ニ願セ玉エドモ、通親許シ玉ワネバ、如何ワセント涙ニクレテ御座ス。</p>	<p>時ニ若君密ニ是由ヲ聞シ召、悲泣マシマシテ曰ク、何事ヲ計マス、接家ノ職ハ何ナラン。四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結フ水ニヤドレル月影ノ、有ルカ無カノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ワ何ナラン。出家コソアレ、父上トテ頻ニ願ワセ玉ヘトモ、通忠許シ玉ワ子ハ、如何ワセント涙ニクレテ御居。</p>	
<p>高充の取なし</p>	<p>時ニ通親、將監ヲ召シ如何ニヤ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ト云ナカラ、兼若モ智惠ニヨキ形相ニヨキ、更ニ仁恕ノ心込兄神童ニ劣ヌ弟ナレバ、吾ガ家ノ繼子トナシ、榮行末ヲ思ヘトモ、神童ガ心岩城ニシテ出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫テモ、中々父ニ隨ハズ。近頃一家ノ者共カ擧テ強諫シ故ニ、愁傷轉々熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見エテ、四五ヶ月以來ハ飲食ヲ減少シ、ヤツレシ面ノ憐レマシ。汝チ彼ヲ慰メテ、機嫌ヲ調エ得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉</p>	<p>時ニ通忠、將鑑ヲ召シ、如何ニ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ナレ共、兼若モ智惠ニ於キ形相ニ於キ、更ニ仁恕心マテ兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾家ノ繼子トナシテ、榮行ク末エヲ思ヒ氏、神童ガ心岩城ニシテ、出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫テモ、泣ク父ニシタガハズ。近來一家ノ者共ガ擧テ強諫シ故ニ、愁情轉々熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見ヘテ、四五日以來飲食ヲ減少シテ、ヤツレシ面ノ憐マル。汝彼ヲ慰問シテ、機嫌ヲ調ヘ得サスベシ。宜ク頼トノ</p>	<p>于時通親、將監ヲ召シ、如何ニ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ト云イナガラ、兼若モ智惠ニヨキ形相ニヨキ、更ニ仁恕ノ心込兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾ガ家ノ繼子トナシ、榮行ク末ヲ思ドモ、神童ガ心岩城ニシテ、出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫メテモ、中々父ニ隨ハズ。近比一家ノ者共ガ擧テ強ク諫シ故、愁傷轉熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見テ、四五ヶ月此方ハ飲食ヲ減少シテ、ヤツレシ面ノ憐レマシ。汝彼ヲ慰メテ、機嫌ヲ調エ得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉</p>	<p>于時通忠、將鑑ヲ召サレ、如何ニ將監此度神童ヲ、松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹トワ云ナカラ、兼若モ智惠ニ於形相ニ於、更ニ如ノ心込兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾家ノ繼子トナシ、榮行末ヲ思ヘ氏、神童ガ心岩城ニノ出家ヲ望ム志シ賺シテモ、ナカナカ父ニシタカワズ。近來一家ノ者共ガ擧テ強ク諫シ故、愁情轉熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見ヘテ、四五ヶ月以來ハ飲食ヲ減少メ、ヤツレシ面ノ憐マル。汝カレヲ慰問メ、機嫌ヲ調得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉ヘバ、將鑑御意畏リ、即</p>

花見遊參

道元禪師伝記史料集成（十一上）

<p>エハ、將監御意ヲ承リ、即チ御前ヲ退出シテ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不豫ノ至ヲ恐ナガラモ某ガ情感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓イ有難キ処ニ御本懷ナラズ。松殿ノ御願アナカチナルヲ以テカク御意傷シム。サノミ悲傷シ玉ワザレ。某愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸メ奉リ、御本懷ヲ達スヘシ。カク閑居マシマシテワ、父君エ對シ御不孝也。先々出頭サムライテ、父君ノ御機嫌ヲ訪イ玉ヘト慰ヲナシ奉レバ、若君愁雨乍止ミ、本懷タニ開キナバ、何カワアラン將監トテ、御快ゲニ笑タマイ花香シキ御貌ニテ、父ノ御前エ出テ玉フ。通親怡悅マシマシテ、オコト此頃病恙ハ幾、覺束無リシカ平愈アル社嬉シケレ。</p>	<p>玉エバ、將監御意畏リ、即チ御前退出シテ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至リ恐ナカラ某甲情々感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓イ有難キ攸ニ御本意ニカナハン。松殿ノ御願イアナガチナルヲ以テ、カク御意ヲ傷シムサノミ悲傷シ玉ハサレ。某甲愚案ヲ盡シ、君ガ勸メ奉リ、御本意ヲ達スベシ。カク閑居マシマセバ、君父上エ對シ御不孝ナリ。先々出頭シ玉エテ、父上ノ御機嫌訪ヒ玉ヘト慰諭シ奉ルニ、若君愁雨乍止ミ、本懷ヲタニ聞キナハ、何ニカハアラン將監トテ、御快ゲニ笑華ノイト香キ御貌ニテ、父ノ御前ニ出テ玉フ。通忠怡悅マシマシテ、ヲコト此頃病恙ハ幾ク、無覺束カ平愈アルコソ嬉シケレ。</p>	<p>ヘバ、將監御意ヲ畏リ、即チ御前ヲ退出シテ、若君ノ御所ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至ヲ恐ナガラ某情感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ。出塵ノ御誓難有處ニ御本懷ナラズ。松殿ノ御願アナガチ成ルヲ以テ、カク御意ヲ傷マシム。サノミ悲傷シ玉ハザレ。某愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸メ奉リ、御本懷ヲ達スベシ。カク閑居マシマシテハ、父君エ對シ御不孝也。先々出頭サムライテ、父君ノ御機嫌ヲ訪イ玉エト慰諭ヲナシ上レバ、若君秋雨乍止ミ、本懷タニ開キナバ、何カ憂ン將監トテ、御快ゲニ笑華ノイト香シキ御貌ニテ、父ノ御前エ出玉フ。通親怡悅マシマシテ、ヲコト此ノ比病苦如何ト、無覺束ノリシガ平愈アル社嬉シケレ。</p>	<p>御前ヲ退出シ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ申上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至リヲ、恐レナカラ某甲ガツラノ感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓有難キ所ニ御本意ナラヌ、松殿ノ御願アナガチナルヲ以テ、カク御心ヲ傷マシム。サノミ悲傷シ玉ワザレ。某甲愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸奉リ御本意ヲ達スベシ。カク閑居マシマシテワ、御父君ヘ對シ御不孝ナリ。先々出頭サフライテ、父君ノ御機嫌御訪玉ヘト慰諭シ奉リケレバ、若君愁雨乍止ミ本懷ヲタニ聞キナバ、何カワアラン將監トテ、御快ニ笑花ノ井ト香キ御貌ニテ、父ノ御前ヘ出玉フ。通忠公怡悅マシマシテ、オコト此頃病恙ワ幾ク、無覺練リシガ平愈在リソ嬉シケレ。</p>
<p>猶保養ノ為ナレバ、花見ノ遊山セシメヨト、將監ニ仰付ラル。將監承リ然ル可キ御意ナリトテ、御遊ノ用意仕ル。頃ハ三月ノ上旬ノ五日ト聞エタリ。若君欣然淺カラズ、父上ノ御慈恩有難シトテ、御</p>	<p>猶保養ノ為メナレバ、花見ノ遊山セシメヨト、將監ニ仰セ付ケラル。將監承リ、然ルベキ御意ナリトテ、御遊山ノ用意仕ル項ハ、三月上旬ノ上ノ五日ト聞エタリ。若君忻然アサカラズ、父上ノ御慈</p>	<p>猶保養ノタメナレバ、花見ノ遊參セシメヨト、將監ニ仰付ラレ、將監承リ、然ル可キ御意ナリトテ、御遊ノ用意仕ル頃ハ、三月ノ上旬ノ上ノ五日ト聞エタリ。若君忻然淺カラズ、父上ノ御慈恩有難シト</p>	<p>猶保養ノ為ナレバ、花見遊山セシメヨト、將監承リ、然ルヘキ御意トテ、御遊ノ用意仕ル。頃ハ三月上旬ノ上五日ト聞ヘタリ。若君欣然アサカラズ、父上ノ御慈恩有難シトテ、御舍弟若殿ヲ始、御</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>舍弟兼若丸ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、何レモ御年前後ノ少人ニテ一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御裳花ヲ競フ御ヨソヲイ、御伴ノ人々マテ、キラヲ磨シ行列ニテ、吉野エ御駕ヲ進メラル。優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>御有リガタシト、御舍弟兼若殿ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、レヅレモ御年前後ノ少人ニテ一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御ツカヤ花ヲ競テノ御ヨソヲヒ、御伴ノ人々マテ、キラヲミガケル行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。誠ニ優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>テ、恩舍弟兼若丸ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、何レモ御年前後ノ少人ニテ、一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御モスソノ花ヲ競フ御ヨソヲイ、御供奉ノ人々マデ、キラヲミガキシ行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>一門ノ公子卿達ヲ御遊誘引、イツレモ御年前後ノ少人ニテ、一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御モソカヤ、花ヲ競御ヨソヲヒ、御伴ノ人々込キラヲミガケル行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。此ヤ此優美希ナル御風情ナリ。</p>
<p>三、若君花見遊山事附高充惡賊退治之事</p>	<p>三二八、若君花見之事附將鑑高充惡賊退治之事</p>	<p>三 若君花見付高充惡賊退治之事</p>	<p>三、若君花見付高充惡賊退治ノ事</p>
<p>既ニ吉野ニ着玉エバ、先ツ高充カ案内ニテ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幔幕打セ、美席花氈ノ御座清ク、小作筒破籠ノ色々ニ、種々ノ珍菓ヲ取揃エ、若君達ヲ饗應セリ。サテ御宴ノ慰ミワ、絲竹音楽歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科ヲ尽シ奏スレバ、意モ浮立斗リナリ。然ノ若君達、去來、花コソ詠ントテ、色紙短冊処持セラレ、思イ思イノ口スサミ、色香争フ御風情、各々遊歩徐々トノ、此ニ吟シ彼コニ嘯キ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白シ吉野山、花ハシケシケ枝ヲ</p>	<p>已ニ吉野ニ着キ玉フ、先ツ高充ガ前テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幕ヲウチ、美席花氈ノ御座清ク、小竹筒破籠ノ種々色々、珍菓ヲ取り揃へ、若君達チヲゾ饗應ケリ。扱テ御宴ノ慰ハ、絲竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ料尽シテ、意モ浮立バカリナリ。然ノ若君達、去來、花コソ詠ントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トシテ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白ヤ吉野山、花ハシケシケ枝ヲナミ梢ヲ交、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日々に營風ニ營、高底千</p>	<p>已ニ吉野ニ著キ玉フ。先ツ高充ガ先達テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幕ヲ打チ、美席華氈ノ御座清ク、小竹筒破籠ノ色々ニ、種種ノ珍菓ヲ取り揃エ、若君達ヲ饗應ケリ。サテ御宴ノ慰ハ、糸竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科盡シ、意モ浮立計リ也。然而若君達、去來、花コソ詠メントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トシテ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白シ吉野山、花ハシゲシゲ枝ヲナミ梢ヲ交エ、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日ニ營風ニ營ク、高底千顆萬</p>	<p>已ニ吉野ニ著玉ウ。先高充カ先達テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、四方八面ニ幕ヲ打、美席花氈ノ御座清ク、小竹筒破籠色々ニ、種々ノ珍菓ヲ取揃へ、若君達ヲゾ饗應ケリ。扱御宴ノ慰ワ、絲竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科尽シ、意モ浮立斗也。然ノ若君タチ、去來ヤ花コソ詠メントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トノ、花ノ下ニ盤桓セリ。實面白ヤ吉野山、花ワシゲシゲ枝ヲナミ梢ヲ交、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日ニ營風ニ營ク、高底千顆萬顆ノ玉、枝ヲ</p>

神童丸の姿

道元禪師伝記史料集成（十一上）

<p>中ニモ殊ニ妙ナル神童丸ノ御姿、</p>	<p>ナミ梢ヲ交ヘシ濃艶ハ、昔シ歌人ノ口吟ミ、日、ニ瑩風ニ瑩ク、高低千顆万顆ノ玉枝ヲ染メ浪ヲ染ム。表裏一入再入ノ紅イヤ、又花飛テ錦綉忽チ布ク如ク、幾濃莊ソ。織者ハ春ノ風未タ筒ニ疊ス、巧ニ綴ル人モアハレニ聞エケル。</p> <p>サレハニヤ世ノ中ニ、絶テ櫻ノ無リセバ、春ノ心ハ如何ナラヌ、等閑ナラマシ今日ノ中、見ルコソ見ヨト人毎ニ、花ノ情ニホダサレテ、散ナン后ノ戀シカルヘキ、謂レ有リ看テノミ止ズ、郷達ノ手コトニ花ノ枝折テ、土産ニサクラカザシテ遊ヒマス。時ニ遠近ノ遊人男女群集雲ノ如ク成リケルカ、此郷達ノ美貌ト云イ、羅綾ノ袂ト香ク、花ニ映 風情ヲ見テ、聲ヲ秘メ袖ヲ曳、相共ニ謂様ハ、如何ナル方ノ郷達ニテ御座ラン。誠ニヤ人華トテ、人モ花ノ数ナレト、是レコソ華ノ花ナリトテ、伏ツ仰ツ競忍テ、樹々ノ花ヲバ見ザリケリ。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>顆ノ玉、枝ヲ染メ浪ヲ染ム、表裏一入再入ノ紅ヒナド、又花飛デ錦ノ如ク、幾濃粧ゾ。織者ハ春ノ風未箇疊マズ、巧ミ綴ル人モアワレニ聞エケル。</p> <p>サレバコソ世ノ中ニ、タエテ櫻ノナカリセハ、春ノ心ハ如何ナラン。等閑ナラマシ今日ノウチ、見テコソ見ヨヤト人トゴトニ、花ノ情ニホダサレテ、チリナン后チゾ戀カレベキ、謂レアリ。見テノミ止ヌ、郷達ノ手ゴトニ折リテ、家ヅトニ櫻カサシテ遊ヒマス。時ニ遠チ近チノ遊人男女トモ群聚雲ノ如クナリケルガ、此郷達ノ美貌ト云ヒ、羅綾ノ袂ト香シク、花ニ映 風情ヲ見テ、声ヲ秘 袖ヲ曳、互ニ謂フヤウハ、如何成カタノ郷達ニテ御在ラン。真ニヤ人花トテ、人モ花ノ類ナレト、是コソ華ノ花ナリトテ、伏ツ仰ツ競イ忍テ、樹々ノ華ヲバ見ザリケル。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>染浪ヲ染。表裏一入再入ノ紅ヒナト、又花飛ンデ綿ノ如、幾濃粧ゾ。織者ハ春ノ風未タ箱ニ疊ズト、巧ニ綴ル人モアワレニ聞ヘ宛。</p> <p>サレバコソ世ノ中ニ、タヘテ様ノナカリセバ、春ノ心ワ如何ナラン。等閑ナラマシ今日ノ中、見テコソ見ヨト人毎トニ、花ノ情ニホダサレテ、散ナン后ノ戀シカルベキ、謂レアリ。見テノミ止マヌ郷達ノ手ゴトニ折テイヘズトニ桜カザシテ遊ヒマス。時ニ遠近ノ遊人男女トモ群聚雲ノ如クナリケルガ、此ノ郷達ノ美貌ト云ヒ、羅綾ノ袂ト香ク、ハナウツロフ風情ヲ見テ、声ヲ秘 袖ヲ引、相互ニ謂様ハ、如何ナル方ノ御郷達ニテ御座ラン。誠ニヤ人華トテ、人モ花ノ数ナレド、是コソ花ノ花ナリト、伏ツ仰ツ競忍テ、樹々ノ花ヲバ見ザリケリ。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>リ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>双ノ鬢ツラ八字ノ眉、青黛ヲ備エズシテサナカラ畫クニ異ナラズ。其ノ光御面ハ三五ノ月ニ依稀^{サセニタリ}。七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セザルヘキ、是ハサテ置此ニ櫻ノ有リケルガ、風少^{フツカ}ニゾフキ来テ、ハラ／＼ト散ル華ヲ、神童丸倩々ト見玉イケルカ、感慨ヤ深ク起リケン。愁色俄ニ面ニウカミ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉エルヲ、御舎弟兼若丸殿由ヲ見玉イ、是ハ如何コトヤマシマス、御意如何ト向シケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ</p>	<p>姿、雙ノ鬢ツラ八字眉、青黛ヲ借ズシテサナガ畫カクニ異ナラス。其ノ光御面テハ三五ノ月依稀シツ、七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セサルベキ。是ハ扱^{ナゲ}テ置キコ、ニ櫻ノアリケルガ、風少^{フツカ}ニソヨギ来テ、ハラ／＼ト散リケル花ヲ、神童丸ハ見玉ヒケルガ、慨ヤ深ク起リマシケン。愁色俄ニ浮ビ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉ヘルヲ、御舎弟兼若丸殿由ヲ見テ、コハ何ニ事ヤマシマス。御心如何、ト問ハシケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ</p>	<p>姿、鬢ツラ八字ノ眉、青黛ヲ借ズシテサナガラ畫クニ異ナラズ。其ノ光御面ハ三五ノ月ニ依稀^{サセニタリ}。七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セザルベキ。是ハ扱^{ナゲ}置此ニ櫻ノ有リケルガ、風少^{フツカ}ニソヨギ来テ、ハラ／＼ト散ル花ヲ、神童丸見玉ヒケルガ、感慨ヤ深ク起リマシケン。愁色俄ニウカミ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉エルヲ、御舎弟兼若丸殿ノ由ヲ見テ、是ハ何事ヤマシマス、御心如何ト問レケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ、</p>	<p>姿、双ノ鬢ツラ八字ノ眉、青タイヲカラズ、畫ニ異ナラズ、其ノ光御面ヲ三五ノ月ニ依稀^{イキ}シツ、七處圓備マシマセリ、誰力愛敬セザルマジ。是ハ先ツ置キ比ニ桜ノ在ケルガ、風少^{フツカ}ソヨギ来テ、ハラ／＼ト散ケル花ヲ、神童見玉ヒケルガ、慨ヤ深ク作ケン。愁色俄ニウカビ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉ヘルヲ、御弟兼若丸殿、此由ヲミテコハ何事ヤマシマス。御心如何ト問ワシケレバ、神童ノ仰セニ、サレバコソ古キ歌ニ、</p>
<p>古歌 櫻散ル木ノ下影ハ寒カラテ空ニ知ラレヌ雪ゾ降ケル トヨメル心ヲ忍カ子テゾト言シハ、又無常ヲ思召、心傷シメ玉フナリ。</p>	<p>櫻チル樹ノ下風サムカラテ空ニシラレヌ雪ゾ降りケル トヨメル心ヲ忍ヒカ子テゾト言ハ、又夕無常ヲ思召ハナリ。</p>	<p>櫻散ル木ノ下風ハ寒カラデ空ニ知レム雪ゾ降りケル トヨメル心ヲ忍カネテ、ソト言シハ、又無常ヲ思召、心傷シメ玉フ也。</p>	<p>様ナル木ノ下風ハサムカラデ空ニ知レヌ雪ゾ降ケル トヨメル心ヲ、忍ヒカ子テ、ゾト言イシワ、又無常ヲ思食バナリ。</p>
<p>悪賊出現 カクテ御遊ヒモアカヌ間ニ、遠寺ノ晚鐘聞エレバ、去來皈ン方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、此ニ布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人</p>	<p>カクテ御遊ビモアカヌ間ニ、遠寺ノ晚鐘キコユレバ、去來ヤ皈ラス方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將ニ</p>	<p>カクテ御遊モアカヌ間ニ、遠寺晚鐘聞エレバ、去來歸ン方方トテ、御駕ヲ回シケル處エ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人在リ。此</p>	<p>カクテ御遊モアカヌマニ、遠寺ノ晚鐘キコユレバ、イザヤ皈シ方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人有</p>

<p>在リ。此ノ奴等元ト信州伊那ノ生 レト承ル。布留熊ガ父ハ佐久ノ黒 鷹云フ、安良熊カ父ハ伊那ノ黒熊 トカヤ。此ノ二人ノ父ハ先年熊坂 長攀ガ着属タリ。熊坂已ニ御曹子 牛若丸ニ討レシ時、主ヲ失フ口惜 ケレト、叫叫テ渡リ合セシカ、 鬼神ヲ欺ク熊坂タニ屑、トモメサ レ子バ、何カワ以テタマルヘキニ 人モ則チ討レニケリ。今ノ兩人モ 其子共ニテ父ガ好ム悪事ヲ続キ、 小字ヨリ天窓勝ナル放逸者、殊ニ 盜殺ヲ好ム事、父等ニモ勝タリ。 布留熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色 黒ク兩目ワ睜、逆、眼中ニ赤筋太 ク張り、口ハ鰐口ナリ。安良熊カ 身ノ長六尺一寸三分、色赤ク兩目 ハ圓クシテ、眼中ハ銅ヲ張ルニ似 タリ。サナカラ悪魔疫神カト聞ク サエ猶恐ロシ。一人劣又強力ニ テ、恐レ憚ル事モ無ク、數タノ悪 黨ヲ引率シ、在々處々ヲ經廻シ テ、家々ニ乱レ入り家財ヲ奪イ火 ヲ放チ、或曠原山路ニ横テ、常ニ 旅人ヲ劫苦ル事、幾多哉。今郷 達ノ御装束最妙ニ花声ナルヲ貪觀 テ、適レ今日ノ幸哉。切剥セン者</p>	<p>人アリ。此ノ奴等元トハ信濃国伊 那郡ノ生ニテ、安良熊ガ父ハ伊那 ノ黒熊ト云。布留熊ガ父ハ佐久郡 ノ生ニテ佐久ノ黒鷹トヤラ。二人 共ニ先年熊坂長判ガ眷屬タリ。熊 坂已ニ御曹子牛若丸ニ討シ時キ、 主ヲ失フ口惜ケレト、呼叫テハ タリ合シガ、鬼神ヲ欺ク熊坂タニ、 屑、トモメサレ子バ、何ニカハ以 テタマルベキ、二人モ即チ討レニ ケリ。今ノ兩人其ノ子共ニテヨク 父ガ悪事ヲ續キ、又小字ヨリ 天窓勝ナル放逸者ノ、殊ニ盜殺ヲ 好ノム事父等ニモ勝レタリ。布留 熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色黒ク 兩目ハ睜、逆、テ、眼中赤筋大ク 張り、口チハ鰐口チナリ。安良熊 ガ身ノ長六尺一寸三分、色赤、兩 目マルクシテ、眼中ハ銅ヲハルニ 似タリ。二人劣ラン強力ニテ、憚ル 處トモナク、數多ノ悪黨ヲ卒シ、 在々處々ヲ經廻シテ、家々ニ乱レ入 テ家財ヲ奪、火ヲ放チ、或ハ曠原 山路ニ横タハリテ、常ニ旅人ヲ劫 メ苦ムル事、幾多ヤ。今卿達ノ御 装束最妙ニ花声ナルヲ貪リ觀テ、 適レ今日ノ幸イカナ。切剥者共ト</p>	<p>奴等モト信州伊那ノ生ト承ル。布 留熊ガ父ハ佐久ノ黒鷹ト云フ。安 良熊ガ父ハ伊那ノ黒熊トカヤ。此 二人ノ父ハ先年熊坂長攀ガ眷屬タ リ。熊坂已ニ御曹子牛若丸ニ討レ シ時、主ヲ失フ口惜ケレトテ、 叫叫テ渡リ合シガ、鬼神ヲ欺ク 熊坂タニ、屑、トモメサレネバ、 何カハ以テタマルベキ、二人モ則 チ討レニケリ。今ノ兩人モ其子共 ニテヨク父ガ悪事ヲツギ、小字ヨ リ天窓勝ナル放逸者、殊ニ盜賊殺 伐ヲ好ム事父等ニモ勝リタリ。布 留熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色黒 兩目ハ睜、逆、テ、眼中赤筋太ク張 ル、口ハ鰐口也。安良熊ハ身ノ長 六尺一寸三分、色赤ク兩目圓クシ テ、眼中ハ銅ヲ張ルニ似タリ。二 人劣又強力ニテ、恐レ憚ル事モ無 ク、數多ノ悪黨ヲ引率シ、在々 處々ヲ經廻シテ、家々ニ亂入シテ 家財ヲ奪ヒ、火ヲ放チ、或ハ曠原 山路ニ横リテ、常ニ旅人ヲ劫苦 ル事、幾多哉。今卿達ノ御装束最 妙ニ花声ナルヲ貪見テ、適レ今日 ノ幸哉。劫剥セン者共トシテ、二 百餘人ノ悪黨共勢ヒ掛テ執リ圍ム。</p>	<p>リ。此奴等元信濃ノ國伊那ノ生 レト承ル。布留熊父ワ佐久ノ黒鷹ト 云フ。安良熊カ父ワ伊那ノ黒熊ト カヤ。此ノ二人父ワ先年熊坂長判 カ眷屬タリ。熊坂已ニ御曹子牛若 丸ニ討レシ時、主ヲ失フ口惜ケレ バトテ、叫叫ワタリ合シガ、鬼 神ヲ欺ク熊坂タニ、屑、トモメサ レ子バ、何カハ以テタマルヘキ、 二人モ比ニ討レニケリ。今ノ兩人 其子共ニテヨク父カ悪業ヲ受續 ヌ。小字立ヨリ天窓勝ナル放逸 者、殊ニ盜殺ヲコノム事、父等ニ モ勝レタリ。布留熊カ身ノ長六尺 二寸一步、色黒ク兩目ハ睜リアガ ツテ、眼中赤筋大ク、口ハ鰐口也。 安良熊カ身ノ長六尺一寸三分、色 赤ク兩目圓クノ、眼中ハ赤金ヲ張 ルニ似タリ。一人劣又強力ニテ、 恐レ憚ル氣色モナク、數多ノ悪黨 ヲ引率シ、在々所々ニ經廻シテ、 家々ニ亂入テ家財ヲ奪ヒ、火ヲ放 チ、或ハ曠原山路ニ横リテ、常々 旅人ヲ劫苦シムル、幾多ゾヤ。 今卿達ノ御装束最妙ニ花声ナルヲ 見テ、アツパレ今日ノ幸イカナ。切 剥セン者共トテ二百餘人ノ悪黨ト</p>
--	--	--	--

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>共トテ、二百余人ノ惡黨共執圍ム。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>テ、二百余人ノ惡黨共執圍。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>モ執圍。</p>
<p>時ニ布留熊進ミ出不畏氣ニ云様ハ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ハ長キ穿人ニテ、匱乏カ為ノ當ミニ却奪ヲ業ト仕ル。疾ク各々ノ衣服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押ヘテ剥執ント云ケレバ、若君達膽ヲケシ、遂ニ見又強賊ノ大勢ニカコマレテ如何ハセントテアハテ二目氣玉イケル。中ニモ神童丸少モサハカセ玉ハズノ仰セケル様ハ、穿人ナラハ、哀ムベシ。金銀與エヨ高充ト、サモ穩堂ニノ玉エバ、高充畏リ若君達ヲ彼シコニ忍セ、供奉ノ人々ニ守護セサセ、其身ハ一人身ヲ固メ實ニ一文字ニ進ミ出、ヤア惡盜共我君ヨリ慈悲ノ惠ミノノ引出物、今高充カ引渡ス。近ク依テ頂戴セヨト云俣ニ、傍ヲ見レバ、岐路ノチマタ新キ立木有リ。八寸四角ノ新削リ、長サ土底カケテ一丈有餘アリケルヲ、隻手ニ拈テ、ツ、ト抜き、是ゾ賜ル引出物、依レ取セント云ケレバ、安良熊キツ</p>	<p>時ニ布留熊進出テ不畏氣ニ曰フヤウハ、如何ニ花見ノ御冠者タチ、吾等ハ長キ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押テ剥執ト曰ヒケレバ、神童丸ノ仰ケルハ、穿人ナラバ哀レム可シ。金銀與ヨ高充ト、サモ穩當ニノ玉ヘハ、高充畏リ卿達ヲ後ニマワシ挾テ、前ニ進ミ、ヤア惡黨共我ガ君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出物、今高充ガ引渡ス。近キニ依テ頂戴セヨト曰俣ニ、傍リヲ見レバ、岐路ニマダ新キ立木アリ。横ハ、廣サ八寸余リ、四角ニ削、長サ土底カケテ一丈二尺バカリアリケルヲ、隻手ニ拈ンテ、ツ、トヌキ、是レソ賜ル引出物、倚レトラセント云ケレバ、安良熊キツト見テ、形ニ似セ又腕ダテカナ、先切リ剥キトレト下辞スレバ、賊黨一度ニ抽揃、勢カ、ツテ詰カクレハ、高充元ヨリモ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破鼎ヲ烈立木</p>	<p>于レ時布留熊進ミ出テ不畏氣ニ云様ハ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ハ長ノ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營ニ却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押テ剥取ムト云ケレバ、神童仰セケル様ハ、穿人ナラバ哀ムベシ。金銀與ヘヨ高充ト、サモ穩當ニノ玉エバ、高充畏リ卿達ヲ後エ廻シ狹デ、前ニ進ミ、ヤア惡盜共我君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出物、今高充ガ引渡ス。進エ依テ頂戴セヨト云儘ニ、傍ヲ見レバ、岐路ニマダ新キ立ツ木有リ。横平廣サ八寸餘リ、四角ニ削リ、長ハ土ソコカケテ一丈二尺有ケルヲ、片手ニ拈ンデ、ツツト抜き、是ゾ賜ル引出物、ヨレ取セント云ケレバ、安良熊是ヲキツト見テ、形ニ似セ又腕ダテカナ。先ゾ切剝ト下知スレバ、賊黨一度ニ抽キ揃ヘ、勢イカ、ツテ詰メカクレバ、高充元ヨリ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破リ鼎ヲ引裂大力ナレバ、</p>	<p>時ニ布留熊進出テ不畏氣ニ云様ワ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ワ長ノ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營ニ却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜アレ。左ナクハ押ヘテ剥取ント云ケレバ、神童丸仰ケル様ハ、穿人ナラバ哀ムベシ、金銀與ヨ高充ト。サモ穩當ニノ玉ヘバ、高充畏リ卿達ヲ後ヘマワシ挾テ、前ニ進ミ、ヤア惡盜ドモ我君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出者、今高充カ引渡ス。近クヘ依テ頂戴セヨト云俣ニ、傍リヲ見レバ、岐路ノマダ新キ立木アリ。横ヒラ廣サ八寸余リ、四角ニ削、長サハ土底カケテ一丈二尺アリケルヲ、隻手拈ンテ、ツ、トヌキ、是ゾ賜ハル引出物、倚取セント云ケレバ、安良熊キツト見テ形ニ似ヌ腕ダテカナ、先切剝ト下辞スレバ、賊黨一度ニ抽揃、勢カ、ツテ詰カクレバ、高充元ヨリ兼流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破鼎ヲ裂、立木ハ折ヨ碎ヨト、縦横無尽ニ打テ廻</p>

高充の悪賊退治

道元禪師伝記史料集成（十一上）

<p>ト見テ、形ニ似セン腕タテヤ、物ナ云セゾ切剥ト下知スレバ、賊黨一度ニ抽キツレテ、勢イカ、ツテ話カクレバ、高充元トヨリ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破リ鼎ヲ裂ク勇士ニテ、立木ハ折ヨ碎ヨト、縦横ニ廻レハ、眉間頂キ双ノ眉、手クヒ高股膝ノ節、アタルヲ幸イ此世ノ名コリ死出ノ山路ノ獄卒ガ罪人セメル如クニテ、歎キ大セイトハ申セトモ、立木一本千手ノ働キ散々ニ打碎レテ、少ニ残ル奴等モ叶ハシモノト、後ヲ見バ社逃失セケリ。</p>	<p>アレ氏布留熊安良熊ノ大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫呼無念ナリ。小冠者ニカクハ仕成サレタル事ヤ。倚シクマントテ大手ヲ開キ、足踏シテ飛テ掛ルヲ、高充ニツコト打晒イ、汝等モ逃ヤラデ運ノ究ノ不便サヨト、云間ニ布留熊掛テツ、ト入ル。互ニ劣ヌ大力ニテ推ツ推サレツ、少時勝負ハ見エサリケル。</p> <p>サレ氏高充ハヤワラ把手ノ名人ニテ、何カシツラン。布留熊ガ右ノ</p>
<p>ハ折ヨ碎ヨト、縦横ニ打テ廻レバ、眉間頂キ雙ノ肩、手クビ高股膝ノ、節サンノニ打碎レ、百五十四人ノ賊利那ガ間ニ殺ルレバ、少ニ残ル奴等ハ叶ハジトヤ思、後ヲモ見ズコソ逃失ニケリ。</p>	<p>アレ共布留熊安良熊ハ大ニ怒、牙ヲカミ、噫無念ナリ。小冠者メニカクハ仕成レタル事ヤ。倚レクマントテ大手ヒロゲ、足踏シトシテデカ、ル。高充莞爾ト打晒、汝等モ逃ヤラデ運ノ極メノ不便ヤナト布留熊カ、レトツ、ト入。互ニ劣ヌ大力ナレバ推シツ推レツ少時勝負ハ付サリシ。</p> <p>サレ氏高充ハヤハラ取リノ名人ニテ、何ニトヤシツラン。右ノ手ノ</p>
<p>右ノ立木ヲ折ヨ碎ヨト、縦横ニ打テ廻レバ、眉間頂キ雙ノカタ、手タヒ高股膝ノ節、散々ニ打碎カレ、一百五十餘人ノ賊利那ガ間ニ殺レテ、少ニ残ル奴原モ叶ハジトヤ思ヒケン。後ヲモ見バ社逃失ケリ。</p>	<p>サレ共布留熊安良熊大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫呼無念ナリ。小冠者ニカクハ仕成サレタル事ヤ。倚ヤクマントテ大手ヲ開ケ、足踏シテ飛デ掛ル。高充莞爾ト打笑ヒ、汝等モ逃ヤラデ運ノ究メノ不便サヨト。聞ヨリ布留熊ツツト入ル。互ニ劣ヌ大力ノ推ツ推サレツ、少時勝負ハ見ヘザリケリ。</p> <p>サレドモ高充ハ柔術把手ノ名人ニテ、何トカシケン。布留熊ガ右手</p>
<p>レバ、眉間頂キ双ノ肩手クビ高股膝ノサラサンノ、キイニ打碎カレ、百五十四人ノ賊利那ガ間ニ殺サルレバ、少カニ残ルヤツバラワ叶ジトヤ思ヒケン。跡ヲモ見バコソ逃失ケル。</p>	<p>アレ氏布留熊安良熊大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫無念ナリ。小冠者ニカクワ仕成サレタル事ヤ。倚クマントテ大手ヲヒロゲ、足踏ノ飛デカ、ル。高充ニツコト打笑イ、汝等モ逃ヤラデ運ノ極力不便サヨ。布留熊カ、レトツ、ト入ル。互ニ劣ヌ大力ラ、推ツ推レツ少時勝負ワ付サリシ。</p> <p>サレ氏高充ヤワラ把手ノ名人ニテ、何トヤシツラン。右手ノ脇ヲ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>脇ツヨキ當身ニ少シ緩ム処ヲ高充スカサズハ子ノホツテ、ウツ伏ニトウト抛付、馬駕シ頭執ントセシカバ、安良熊ハセ付、後ヨリ高充ヲ曳倒ス。危カリケル次第也。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ハキヲ痛少シ、緩ム処ヲ、高充スカサズ、ウツ伏シニドウト抛、馬駕ニシツカト駕頸ニ切ラントセシカバ、安良熊後ロヨリ高充ヲ拽倒ス。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ノ脇痛メシカバ、少シ緩ムト見ヘシ處ヲ、高充透サズヒツツカミ、ウツ伏ニドウト抛グレバ、安良熊後ヨリ高充ヲ曳キ倒ス。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>痛少シ緩ム処ヲ、高充透サズウツ伏テフト抛、馬乗ニシテ、シツカトヲサへ、頭取トセシカバ、安良熊後ヨリ高充ヲ引倒ス。</p>
<p>サレモ高充金剛力、ムツクトモ動カバコソ、悪シキ汝カ助力カナ。同穴ノ約セヨト、後手手ニ抓拈テ、二人並ベテ引シキメ手ニ、二人カ髻ヲシツカト執テ押へ、右ノ手ニハ扇キヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ノ花見ヤ腰ヲ掛テ、今日ノ花見ハ是ゾ此ノ頭拔ンヤ、敷ツフサンヤ伝處ニ、神童丸兼若御立ヨリ、適レ伊美シキ働キ哉。日本童男ノ威勢アリ。</p>	<p>高充ガ金剛力 少モ動ズ、悪キ汝ガ助手カナ。同穴ノ契約ヲ結ハセント抓拈 二人ナラベテ引シキ左手ニハ、二人ガ髻ヲシカト執テ押へ、右ノ手ニ扇ヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ヤコシカケテ、今日ノ花見ハコレゾ、是レ頸拔ンヤ、シキ禿ント曰処へ、神童兼若御立ヨリ、適レ伊美シキ働キカナ。日本童男威力有。</p>	<p>サレドモ高充ガ金剛力、ムツクト起キ上リ、悪キ汝ガ助力哉。同穴ノ契リセヨト、抓拈テ二人並ベテ引シキメ手ニテ、二人ガ髻ヲシツカト執テ押エ、右手ニテハ扇ヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ヤ腰掛ケテ、今ノ花見ハ是ゾ此ノ頸拔ヤ、敷ツフサンヤト云所エ、神童兼若御立ヨリ、適レ伊美ジキ働キ哉。日本童男ノ威勢有リ。</p>	<p>高充ガ金剛力、ムツクトヨキ、動ゼバコソニツクキ汝ガ助手哉。同穴ノ約セヨト、抓拈テ人ナラベ引鋪々、左手ニテ二人ガ髻ヲツカト執テ押へ、右手ニワ扇ヲ開、汗ヲ入、アラ面白ヤ人円座、今ノ花見ワ是ゾ此レ頭拔ンヤ、シキツフサンヤト云処へ、神童兼若御立ヨリ適レ伊美シキキタイノ動キ、日本童男ノ威力アリ。</p>
<p>去リナガラ高充ヨ、唯希ハ命ヲ資ケテ追拂エ。存スル者ノ有ルゾトテ、重々慈言淺カラス。高充承リ、君命ナレバ力無シ。命ハ助ケ得サスベシ。去リ乍ラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、懷中剃刀取出シ、兩人ノ頭ヲウツフセ、</p>	<p>去リナカラ高充ヨ、願クハ命ヲ資テ追拂。存ズル旨ノ有ルゾトテ、重々慈言淺カラス。高充承リ、君命ナレバ是非ナシ。命ヲバ得サスベシ。去リナガラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、クワイ中ヨリカミソリ取り出シ、二人頭</p>	<p>去乍ラ高充ヨ、唯希ハ命ヲ資ケテ追拂エ。存ル旨ノ在ルゾトテ、重々慈言淺ズ。高充承リ、君命ナレバ力無シ、命ハ助ケ得サスベシ。去乍ラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、懷中剃刀取出シ、兩人ノ頭ヲウツフセ、毛際ヨ</p>	<p>去乍高充ヨ、唯命斗ワ資テ追拂へ。存スル旨ノ在ゾトテ、慈言淺カラズ。高充承ワリ、君命ナレバ力ナシ。命ヲ資得サスベシ。去乍其身ニテ放チナバ、重テ禍ヒ仕出サント。コシ刀ニテ二人ノ頭ヲ散落々ト剃コホチ、双ノ耳ブ切テ捨</p>

○建曆二年
比叡山良頭の
室に入る

<p>毛際ヨリ散落タト刺コボシ、双ノ耳タフ切テ捨テ、二人カ太刀ガ微塵ニ打碎キ、ヨ、見事ナル法師ブリ、托鉢シテ渡リセヨ。無道ノ業無益トテ辛キ命ハ捨子氏、耳ノタブマデ失エハ、人ノ交リ成難シ。二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死失タリ。高充カ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザルハ無リケリ。</p>	<p>ヲウツブセ、毛涯ヨリ散落トソリコボシ、双ノ耳タフ切テ捨テ、二人帶シ太刀ガ微塵ニ打碎キ、ヨ、見事ナ法師ブリ、托鉢シテ世渡リセヨ。無道業ハ無益トテ突放タレ。辛キ命ハ捨共、耳ノタブマデ失ナハバ、人ノ交リナルベシヤトテ、二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死ニ失セリ。高充ガ働キ希代ノ勇士ヤトテ、少子ノ連ガ勅ヲ蒙リ、天雷ヲ捉エ来リシモカクヤトテ、貴賤上下推ナエテミナク讃嘆セザ者ゾナシ。</p>	<p>リ散落トト刺コボシ、雙ノ耳タフ切テ捨テ、兩人ガ太刀刀細微塵ニ打碎キ、ヨヲ見事ナル法師ブリ、托鉢シテ世渡リセヨ。無道業ナ無益トテ突放サレテ、兩人ハ辛命ハ助カレ共、耳ノタブ迄失ナエバ、人ノ交リ成難シト、二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死失タリ。高充ガ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザルハナカリケリ。</p>	<p>テ、二人ガ佩シ太刀刀細ナ微塵ニ打碎ヲ見事ナ法師ブリ、托鉢ノ世渡リセヨ。無道業ヲ無益トソ突放タレ、辛命ヲ捨ヘ耳ノタブ迄失ヘバ、人ノ交リ成ベキヤ。二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死タリケリ。高充カ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザル者ゾナシ。</p>
<p>四、若君夜半ニ遁叡山附高充尋 出申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成リ玉フ。三月六日ノ夜半ニツラツラ、思惟在ル様ハ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常ノ切ナルヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ御意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮華ヲ思召。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂ヘシ、夜ヲ冒シテ潜洛陽ヲ出テ玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大ニ驚愕シ、未タ少年身ノ如何ナル仔細</p>	<p>四二ハ若君夜半遁叡山之事 附將鑑高充尋奉ル事</p> <p>其ノ時キ建曆二壬申、若君十三歳ニ成リ玉フ。三月六日ノ夜半ニ、倩々思惟在様ハ、昨日ノ遊覽落花ヲ見テ、無常ノ切ナルコトヲ悟リ、近頃頻ニ父上ノ御意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思食。御意噫蝸牛角上何ニ事ヲカ争ハン。急ギ本意ヲ遂ケベシト、夜ヲ冒テ洛陽ヲ出デ玉フテ獨リ叡山ニ登。良顯法師ニ依リ玉フ。是ハ一家ノ法師ナル由ニテ、未タ少年身ノ如何</p>	<p>四 若君夜半遁叡山付高充尋出 申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成玉フ。三月六日ノ夜半ニ、ツラツラ、思惟在ル様ハ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常切ナル事ヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思召。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂可シ、夜ヲ冒テ潜洛陽ヲ出玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大ニ驚愕、未少年ノ身ノ如何成ル子細ニ</p>	<p>四、若君夜半遁叡山付高充尋 出申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成玉フ。三月十日ノ夜半ニ、ツラツラ、思惟マシマス様ワ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常ノ切ナル事ヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思意。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂ヘシトテ、夜ヲ冒シテ潜洛陽ヲ出玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大ニ驚愕、未少年身ノ如何ナル仔細ニヤ、供奉</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ニヤ、供奉モナク唯孤登山アルコ怪シケレト、由ヲ尋子サセケレバ、若君ノ仰ニ、我カ千母臨薨ノ時ニシテ余レニ囑シテ曰、自ラ終焉出家シテ下沈淪ヲ濟イ、上佛果ヲ得セシメヨト。真ニ父母ハ形生ノ本也。養ハ以テ親恩ヲ報ズルニ足ラズ。故ニ悉多太子輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年御座テ、正覺ヲ取玉フ。遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉イヌ。サルカラ余カ意、白刃ハ冒スベク、飲食ハナル可トモ、晝極リ罔キニ於テ、此豈忘ルヘケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼マイラスル。願クハ本意ヲ遂ケシメ給ヘト有ケレバ、良顯聞食、至哉出塵ノ志シ、妙ナル哉報恩ノ思イ、感激スルニ堪エ難シ。去リ乍ラ父通親ノ御心、又松殿ノ以為如何ガアラント、小縁ナラヌ善事タリ共、前後ノ料簡アルベシト有リケレバ、</p>	<p>ナル子細ニヤ、供奉モナク唯孤登山アルコソ怪シケレド、尋サセケレバ若君ノ仰ニ、我母臨薨ノ朝ニ余ニ囑シテ曰ク、身ヲ終焉出家シテ下沈淪ヲ濟ヒ、上佛果ヲ得セシメヨト。真ニ父母ハ形生ノ本ナリ。養ヲ以テ親恩ヲ報ズルニ足ズ。故ニ悉多太子モ輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取リ玉フ。故ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉イヌ。サルカラニ余カ意、白刃ハ冒スベク、飲食ハ無カルベク共、昊天ノ極リナキヲイテモ、是レ豈ニ忘ベケン。故ニ登山仕テ師ヲ頼ミマヒラスル願ハ、本意ヲ遂ゲシメ給ヘトアレバ、良顯聞之テ、至哉出塵ノ志、妙ナル哉謝恩ノ思氣、感激スルニ堪ガタシ。乍ラ去父通忠ノ心、又松殿ノ以為如何アラシ。小縁ナラヌ善事ナレ共、前後ノ料簡アルベシト有リケレバ、</p>	<p>ヤ、供奉モ無ク唯孤リ登山有ル社怪シケレト、子細ヲ尋サセケレバ、若君ノ仰ニ、我母臨薨ノ朝ニハ餘レニ囑シテ曰、自ラ終リ焉出家シテ下沈淪ヲ濟イ、上佛果ヲ得セシメヨト。眞如淨父母ハ形生ノ本也、養ハ以テ親恩ヲ報ズルニ足ラズ。故ニ悉忠太子輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取玉ヒ、遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉ヒヌ。サルカラニ餘ガ意、白刃ハ冒ス可ク、飲食ハ無ル可クトモ、昊天極リ無キニ於テ、此豈忘ルベケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼ミマイラスル願ハ、本意ヲ遂ゲシメ給エト有レバ、良顯聞食、至哉出塵之志シ、妙哉報恩ノ思、感激スルニ堪エ難シ。乍ラ去父通親ノ心、又松殿ノ以為如何ト、小縁ナラズ善事タリ共、前後ノ料簡アル可シト有リケレバ、</p>	<p>モナク唯孤登山アルコソ怪ケレト、由ヲ尋サセケレバ、若君ノ仰ニ我母臨薨ノ朝ニ余ニ囑ノ曰ク、自終焉出家シテ下沈淪ヲスクヒ、上佛果ヲ得セシメヨト。眞ニ父母ハ形生ノ本也。養ヲ以テ親恩ヲ報ズルニ足ラズ。故ニ悉達太子モ輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取玉ヒ、遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉ヒヌ。去カラニ余カ意、白刃ヲ冒ヘク飲食ハ無ル可トモ、昊天極罔於テ、此レ豈ニ忘ルヘケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼マヒラスル願、本意ヲ遂シメ給ヘトアレバ、良顯聞之、至レル哉出塵ノ志、妙ナル哉報恩ノ思ヒ、感激スルニ堪エガタシ。去乍父通忠ノ心中、又松殿ノ以為如何ナラン。小縁ナラン善事タリトイヘ氏、前後ノ了簡アルベシト有ケレバ、</p>
<p>二人の老翁 (山王・客人) 出現</p>	<p>二人の老翁見レテ云ク、善哉ヤ小人ハ希有ニシテ来ル。真ノ佛子ノ菩薩也。宜ク以テ愛護セヨ。</p>	<p>忽チ二人ノ老翁見レテ曰、善哉、少人希布ニシテ来。是真ノ佛子ノ菩薩ナリ。宜ク以テ愛護セヨ。他</p>	<p>忽二人ノ老翁見レテ云ク、善哉々々、少人ワ希有ニシテ来ル。是真ノ佛子ノ菩薩ナリ。宜ク以テ愛護</p>

<p>化^{ワケ}ニ遊シムル事ナカレ。吾ハ是山主、我ハ是客人ト、言^ノテ見エ玉ハズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御蹤ヲ伏シ拜ミ、若君諸トモニ感涙袖ヲ湿セリ。</p>	<p>父、高充を遣わし慰撫 時ニ良顯宿誓ノ大士成ル事ヲ知リ、先此方ニ御在トテ愛護斜メナラザリキ。扱テ洛陽ニ御座通親公ヤ、御一門ノ方々、角トワ夢知ロシメサテ、若ハ何地ヘ井ニシトテ、愕蹠^{ワロキ}歎敷、四方ヘ人ヲ遣シ、尋子玉フス道理ナル。高充告シケレハ、若君兼テ遁世ノ御志深ケレハ、三井寺ガ在無ハ叡山ニマシマス可シ。某申尋子奉ント告シ上レバ、通親聞食、言處然アルヘシ。急キタツ子ヨト仰セアル。高充ハ畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果ノ若君ニ値奉ル。高充恐悅限リ無ク、先申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺エス。乍レ恐道ニ戻セ玉フニツアリ。一ワ若君見エ玉ハ又故、父上ノ御心ヲ察シ玉エ。御一門ノ方々迄、人ヲ手分ニ尋子シメ、其嘆^{ナゲ}キ忍ヒ難クマシマス、積牛ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。何ゾヤ孝子</p>
<p>ニ遊バシムル事ナカレ。吾^{ワレ}是レ山王、吾ハ是レ客人ト、言ヘテ見ヘ玉ハズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御跡ヲ伏拜ミ、若君諸共、感涙袖ヲ湿セリ。</p>	<p>時ニ即チ誓^{チカ}ノ菩薩ナルヲ知リ、先此ノ方ニ御在トテ、愛護斜ナラズ。扱テ洛陽ニ御在座通忠公、御一門ノ方々、カクトハ夢モ知シロシメサレズ、若シハ何地ヘイニシトテ、愕^{ワロキ}蹠^{サハキ}歎敷、四方ニ人ヲ遣シ尋玉フゾ道理ナリ。高充告シ上ケルハ、若君兼テ御遁世ノ御志シ深カリケレバ、三井寺カ左ナクバ叡山ニマシマスベシ。某甲尋奉ルラント告上ケレバ、通忠聞召、言處シカアルラン。急キ尋ヨト仰セラル。高充畏リ叡岳ニ到リ尋シカバ、果シテ若君ニ値奉リ、高充恐悅限リナク、先申上ケルハ、サスガ御賢慮共覺ヘズ。恐ナカラ道チニ戻ラセ玉フ事ニツニアリ。一ニハ君見ヘサセ玉ハ又故、父上ノ御心ヲ察シ玉ヘ、御一門ノ方々迄テモ、人ヲ手分ニ尋サシメ玉フ。其ノ御嘆^{ナゲ}、忍ガタクマシマス事、</p>
<p>ヨ。他ニ遊バシムル事無レ。吾ハ是山王、我ハ是客人ト、宣テ見エ給ハズ。良顯奇異ノ思ヒヲナシ、御蹤ヲ伏拜ミ、若君モロ共ニ感涙袖ヲ濕セリ。</p>	<p>時ニ良顯宿誓ノ大士ナル事ヲ知リ、先此方ニ御在トテ、愛護斜ナラザリキ。扱テ洛陽ニ御座ス通親公オヤ、御一門ノ方々、角トハ夢ニモ知シメサデ、若ハ何地エキニシトテ、愕^{ワロキ}蹠^{サハキ}歎敷、四方ニ人ヲ遣シ尋玉フゾ道理也。高充告シケルハ、若君曾テ御遁世ノ御志シ深ケレバ、三井寺カ左無バ叡山ニマシマス可シ。某シ尋奉ラント告上ツレバ、通親聞食、汝ガ言處左モ有ベシ、急キ尋ヨト仰ラル。高充ハ畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果シテ若君ニ値イ奉リ、高充恐悅限リ無ク、先ツ申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺ズ。乍レ恐道ニ戻ラセ給フ事ニ有リ。一ニハ君見エサセ給ハ又故、父上御案ジ御察シ有可シ。又御一門ノ方々迄、人ヲ手分ケニ尋ネシメ、其嘆^{ナゲ}キ忍ヒ難クマシマス事、積ノ母ヲ尋ヌルニ異ナラ</p>
<p>セヨ。他ニ遊バシムル事ナカレ。吾ワ是山王、吾ワ是客人ト言テ見ヘ玉ワズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御跡ヲ伏拜キ、若君モロ共ニ感涙袖ヲ濕セリ。</p>	<p>時ニ良顯宿誓ノ大士ナル事知リ、先ス此方ニ御在マセトテ、愛護斜ナラザリキ。扱テ洛陽ニ御坐在ル通忠公ヤ、御一門ノ方々、カクトワ夢ニモ知ロシメサデ、若ワ何地エ井マシトテ、蹠^{ワロキ}愕^{サハキ}歎カセ玉ヒ、四方ヘ人ヲ遣シ尋玉フゾ道理ナリ。高充告シケルハ、若君曾テ御遁世ノ御志シ深カリケレバ、三井寺カ左ナクバ叡山ニマシマスベシ。某シ尋子奉ント告シ上ケレバ、通忠聞食言處然アル。急キ尋ヨト仰ラル。高充畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果ノ若君ニ値奉リ、高充恐悅カキリナク、先ツ申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺ヘズ、恐乍道ニ戻ラセ玉フ事ニアリ。一ワ君見ヘ玉ワ又故、父上ノ御意ヲ察シ玉ヘ。御一門ノ御方々迄、人ヲ手分ニ尋シメ、其嘆^{ナゲ}、忍ヒ難クマシマス事、積ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>トシテ父ヲ泣シメ、親屬ヲ愁シメテ是子タルノ道ナルヤ。二ツニハ某甲ガ如キ真ニ無智不肖ニノ員ナラヌ身ナレト、父上ノ恩賞ヲ戴キ、御君ノ後見トノ一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜マズ事ルベキ彼カ志明疎ミマスヤアルナト、芥子斗リモ知ラセ玉ハテ、カクハ在ラセ玉フ者カ。</p>	<p>憤ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。何ソノヤ孝子トシテ父ヲ泣カシメ、親族ヲ愁シメ玉フ事、子タルノ道ナルヤ。二ニハ某甲シガ如キ真無智不肖ニテ員ナラン身ナレ共、父上ノ恩賞ヲ戴キ、君ノ御後見トシテ、一日モ御左右ヲハナレズ、身命ヲ惜ス事ルベキヤカレガ志疎マシマス事アル。芥子計リモ告テ知ラセ玉ハテ、カクハアラセ玉フ者カナ。</p>	<p>ズ。何ゾヤ孝子トシテ父ヲ泣シメ、親屬ヲ愁シメテ是子タルノ道ナルヤ。二ニハ某甲ガ如キ真ニ無智不肖ニシテ、員ナラヌ身ナレドモ、父君ノ恩賞ヲ戴キ、御後見トシテ、一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜シマズ仕フマツル可キヤツガレガ志モ、疎ミマス事ヤアル。芥子計リモ告知ラセ給エテ、カクハ有可キ也。</p>	<p>何ゾ孝子トシテ父ヲ泣シメ、親族ヲ愁ヒシメテ是子タルノ道ナルヤ。二ニワ某カ如キ真ニ無智不肖ニノ、員ナラヌ身ナレト、父上ノ御恩賞ヲ戴キ、御君ノ後見トノ一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜マズ、事ルベキヤツカレガ志モ、跡マズ事ヤアル。芥子計リモ告知ラセ玉ワデ、カクワアラセ玉フ者哉。</p>
<p>然レバ父上、父上エノ君臣ノ道欠ケタルニ似タリ。乍レ去今恩顔ヲ拜スルコト、飢テ嘉膳ニ會ウ如ク、渴シテ甘泉ヲ得タルニ似タリ。僕カ幸イ恐ラクハ、主従ノ約浅カラヌ故ナリ。唯願ハ速ニ洛ニ還御マシテ、父上ノ愁ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉エトテ、世ニ猛キ武力眼蓋ニ泪ヲ包ミ、愁色面ニ忍カ子、伏敬ノ勸メマイラスルヲ、良頭ヲ初メ有會僧侶、通親ノ愁情又高充カ忠節ヲ感シ、各々衣ノ袖ヲ湿セリ。依テ緇素諸共ニ若君ヲ</p>	<p>然ラバ父子君臣ノ道欠タルニ似タリ。去ナガラ今恩顔拜シ奉ル事、飢テ嘉膳ニ會ガ如ク、渴シテ水ヲ得タルニ似タリ。僕ガ幸イ恐クハ、主従ノ約リ浅カラヌ故エナリ。唯願ハ速ニ洛へ還御マシマシテ、父上ノ愁火ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉ヘトテ、世ニ猛キ武士ガ眼蓋泪ヲ包ミ、愁色面ニシノビ兼、伏敬テ勸マイラセスルヲ、良頭ヲ始メ有會ノ僧侶マテ、通忠ヲ愁情又高充カ忠節ヲ感シ、各々衣ノ袖ヲ湿シケリ。仍</p>	<p>然レバ兩道缺ケタルニ似タリ。乍レ去命恩顔ヲ拜スルコト、飢テ美膳ニ會フガ如ク、渴シテ水ヲ得タルニ似タリ。僕ガ幸ヒ恐ラクハ、主従ノ約リ浅カラヌ故ナリ。唯願ハ速ニ洛ニ還御マシマシテ、父上ノ愁ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉エトテ、世ニ猛キ武士ガ眼蓋ニ泪ヲ包、愁色面ニ忍ビ兼、伏敬テ勸メマイラスルヲ、良頭ヲ初メ有會フ僧侶迄、通親ノ愁情又高充ガ忠節ヲ感ジ、各々衣ノ袖ヲ濕セリ。依テ緇素諸共ニ若君ヲ誘</p>	<p>然レバ父子君臣ノ道欠タルニ似タリ。去乍今恩顔ヲ拜スル事ワ、飢テ喜膳ニ逢カ如ク、渴ノ水ヲ得タルニ似タリ。僕カ幸恐ク、主従ノチギリ浅カラヌ由ヘナリ。唯願ワ速洛陽へ還郷マシテ、父上ノ愁火ヲ消、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉ヘト、世ニ猛キ武者ガ眼蓋ニ涙ヲ包ミ兼、愁色面ニ忍ヒ兼、伏シ敬テ勸マヒラスルヲ、良頭ヲ初、有會僧侶マデ、通忠公ノ愁情又高充ガ忠節ヲ感シ入、各々衣ノ袖ヲ濕セリ。仍テ緇素諸共ニ若君ヲ誘テ</p>

誘テ洛ニ皈シマイラセント勸奉レト。

若君益々出家ノ信心固シテ、仰セケルハ、父上ノ憂イ一門ノ悲ミ亦ヲコトガ言フ處、皆人間ノ愛執生死ノ媒也。苟モ余的ニ有愛ノ家ヲ出テ真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸、當來ノ善因ナリ。乃イ却テ慮思セバ、是一旦ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ妨クヘシ。唯今忠節ヲ余ニ尽ス。何ゾ空ク捨ニ結縁ノ最淺カラヌ程、後日ニ思ヒ當ルヘシ。早ク洛エ立皈リ、此旨ヲ語ルヘシ。設日ハ涼カレハ、更ニ移サヌ余意ソト仰セケレバ、高充モ今ハ力無ク、先洛エ皈リ、由ヲ申シ上ヘシトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

○吾力アラリトナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲ移シカタレバ
若君モ亦不レ摺 御返歌ニ
○吾心岩ヲト言ゾイタツラニ法ノ道ニモ拽レ來ヌレバ

テ縊素諸トモ若君ヲ誘テ洛ニ皈シマイラセントス。

若君出家信心堅固ニシテ、仰セケルハ、父上ノ憂イ一門ノ悲ミマタヲ事ガ言ウ心、ミナ人間ノ愛執生死ノ媒ナリ。苟モ余レ的ニ有愛ノ家ヲ出テ、真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸イ、當來ノ善因ナリ。イマシイアエテ恨ミ思イセゾ、是レ一旦親思ニ背ニ似テ、報恩ノ道ヲ廣シ。且イマシイ節ヲ余ニ尽ス。マタナンゾヤ。空ク捨ニ結縁ノ取淺カラヌ程、後日ニ思當ルベケン。早ク洛ニ回リ、コノ旨ヲ語ルベシ。設日ハ涼シカルベク、月ハ暑カルベク共、更ニ移サン吾カ心ソト仰セケレバ、高充今ハ力無ク覺エ、先ツ洛ニ皈リ、申由ヲトテ、一首ノ歌ヲ讀テ上リケル。

○我カ力アリトナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲウツシカヌレバ
若君モ又タ不摺シテ御返歌有リ。
○吾カ意イハホト言ゾ徒ニ法ノ道ニモ拽レキヌレバ。

テ洛ニ歸シマイラセントス。

若君益々出家ノ信心固フシテ、仰ケルハ、父上ノ悲ミ一門ノ憂イ又ヲコトガ言フ處、皆人間ノ愛執生死ノ媒也。苟モ吾レ的ニ有愛ノ家ヲ出テ真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸ヒ、當來ノ善因成リ。乃チ却テ慮思イセバ、此一旦親思ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ廣シ。唯今忠節ヲ餘ニ盡ス。何ゾヤ、空ク捨ニ結縁ノイト淺カラヌ程、後日ニ思當ル可シ。早ク洛エ回リ、此旨ヲ語ルベシ。設日ハ冷カナル可ク、月ハ暖ナルベクトモ、更ニ移サヌ餘ガ意ソト仰セケレバ、高充今ハ力無ク先洛エ歸リ、此由申上可シトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

吾ガ力有トナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲ移シ兼ヌレバ、
若君モマタサシロカズ御返歌ニ、
吾ガ心岩ヲト言ゾイタツラニ法ノ道ニモ拽來ヌレバ、

洛ニ皈シマイラセントス。

若君マス々出家ノ信心固シテ、仰ケルワ、父上ノ憂イ一門ノ悲、マタヲコトガ言フ心、皆人間ノ愛執生死ノ媒ナリ。苟モ余的ニ有愛ノ家ヲ出、真人道明ニ極メナハ、六親眷属生天ノ幸、當來ノ善因ナリイマシイアヘテウラ思ヒセゾ、是レ一旦親ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ廣シ。且イマシ節ヲ余ニ尽ス。ナゾヤ、空ク捨ニ結縁ノ井ト淺カラヌ程、後日思當ケレ。早ク洛ニカヘリ此旨ヲ語ルヘシ。設日ワ涼カナルベク、月ハ暑カルベク共、更ニ移サヌ余心ソト仰セケレバ、高充今ハ力ナク覺。先洛ニ歸リ、此由申上ベシトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

吾力アリトナ云ゾイワホナル君ノ意ヲウツシカヌレバ
又若君モ不摺テ御返歌ニ
吾心イワホト言ゾ徒ニノリノ道ニ拽シキヌレバ

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>	
<p>出家許容 トアソバシケル。高充弥々感心シ、拜辭ノ洛ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ、通親松殿御一門ノ方々、其ノ羈絆スヘカラサルヲ知シメシ、遂ニ許シマス。故ニ若君今ハ出家ノ礙ナクテ、吾思俣トテ御怡限リ無シ。</p>	<p>高充弥々感心シ、拜辭申テ洛陽ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ、松殿通忠御一門ノ方々、其ノ羈絆スベカラサル事ヲ知シ食シ、遂ニ是レヲ許シマスナリ。故ニ若君今ハ出家ノ礙リナシ。思フ俣ニトテ御怡ハ限リナシ。</p>	<p>ト有リケレバ、高充彌々感心シ奉リ、拜辭シテ洛ニ歸リ、様子具ニ言上シケレバ、松殿通親御一門ノ方々、其ノ羈絆スベカラザル事ヲ知ロシメシ、遂ニ是ヲ許シマシケリ。故ニ若君今ハ出家ノ礙ナシ。是ヨリ我思フ儘ナリトテ御悦ハ限リナシ。</p>	<p>ト。高充イヨク感心シ、拜辭申ノ洛ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ松殿通忠御一家ノ方々、其羈絆スベカラザル事ヲ知シメシ、遂ニ是ヲ許シマスナリ。故ニ若君イマワ出家ノ礙ナシ。思フマ、ニトテ御怡ハ限リナシ。</p>	
<p>○建保元年 横川にて剃髮 戒壇院にて受戒</p>	<p>五、蓮常法師神罰ヲ蒙ル事附三輪示現事 于時人王八十四代須德天王ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニナリ玉フ。此年四月上旬ニツラツラ思召様ハ、悉多太子ノ御出胎及出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宜ク思ナリト。則チ横川首楞嚴院ニ至テ剃髮染衣ノ体ニナリ、神童ヲ改テ希玄ト稱シ上ル。然シテ延曆寺ノ戒壇ニ登リ、具足戒ヲ受玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利キ事、邪ヲ折リ</p>	<p>五ニハ若君出家并ニ蓮常法師神罰ヲ蒙ル事附三輪示現之事 時二人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成リ玉フ。此ノ年四月上旬ニ倩々思召ル、ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起ヨロシク思フナリトテ、便チ横川首楞嚴ニ投リテ剃髮染衣トナラセテ、神童丸ノ御名ヲ改メ希玄ト稱シ奉ル。然シテ延曆寺ノ戒壇ニ登リテ、具足戒ヲ受ケ玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト、問論往復ス</p>	<p>五 蓮常法師神罰ヲ蒙ル事付三輪示現之事 于時人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成給フ。此年四月上旬ニツラツラ思召ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宣布思フ也トテ、則チ横川ノ首楞嚴院ニ到テ剃髮染衣ノ體キニ成リ、神童ヲ改テ希玄ト稱シ上ル。然テ延曆寺ノ戒壇ニ登リ、具足戒受給フ。聰惠人ニ絶シ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、臺家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノトモガラト、問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利キ</p>	<p>五、蓮常法師神罰ヲ蒙事付三輪示現ノ事 于時人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成玉フ。此年四月上旬ニツラツラ思召ル、ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宜ク思フナリトテ、便チ横川ノ首楞嚴院ニ投リテ剃髮染衣ナラセテ、神童ノ御名ヲ改メ希玄ト稱シ上ル。然ノ延曆寺ノ戒壇ニ登テ、具足戒ヲ受玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス。故台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト、問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利事</p>

○建保二年
蓮常法師の悪
逆

<p>正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者無シ。</p>	<p>同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルニ、鞍馬寺ニ學僧在リ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲ閱シ粗文章ノ事モ得ニケリ。只名ヲ貪リ利ニ歛、僞慢降シ難ク、邪見伏セス。故ニ希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ヒケルヲ、妬ミ増テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振ウト云トモ、螢火力灯火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱シメラル。然レ自慢止ズシテ、憤リ尚深ク毒ヲマイラセテ殺サハヤト謀リケレハ、天俄ニ攪曇、震動雷電シ、風林ヲ倒シテ寒シリ、車軸ノ兩岩ヲ碎ク計リニテ、其醜キヲ肝魂モ滅スル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ面色變リ、身振シ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモ苦ルシゲニ見エシガ、頸ハ何地エカ拔ウセケン。只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号ニ、嗚呼畏ロシヤ慎レ之ヨ。天道ニ私無シ。善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道ノ法師ハ次郎坊ニ非</p>
<p>ルニ、智箭言鈍ノ利キ事、邪ヲ折正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者ナシ。</p>	<p>同ク建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルニ、鞍馬寺ニ學僧アリ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲモ閱シ、粗文章ノ事ヲモ得ニケレト只名ヲ貪リ利ニ歛リ僞慢降リシカタシ。邪見伏シ難シ故ニ、希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共貴ヒケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ルニ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振ト云ト、子ガ燈火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱メラル、事ヲ。然レ共自慢ヤマズシテ、憤リナヲ深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀ケレバ、天俄ニカキクモリ、震動雷電シ、風モ林木ヲ倒シ寒ク、車軸ノ兩メ岩ヲ碎ク計ニテ、其ノ醜キ事魂イモ滅ル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ面色變リ、身振シ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモ苦シゲニ見ヘシガ、頸ハ何國拔失シヤ。只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号チ号ンテ、嗚呼畏ノ慎レ天道ニ私シナク善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道</p>
<p>事ヤ、邪ヲ折キ正ヲ立テ、敢テ敵シ申者無シ。</p>	<p>同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事成ガ、鞍馬寺ニ學僧在リ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲ閱シ、粗文章ノ事モ會得セリ。只名ヲ貪リ利ニ歛、僞慢降シ難ク、邪見甚シキ故ニ、希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振トイエドモ、螢ガ燈火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。卻テ自ラ辱シメラル。然レドモ自慢止ズシテ、憤リ尚深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀リケレバ、天俄ニ攪曇リ、震動雷電シ、風鈴木ヲ倒テ寒ク、車軸ノ兩岩ヲ碎ク計ニテ、其恐シキ事肝モ魂モ消ル計也ケルガ、法師ハ忽チ面色變ジ、身振シテ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモクルシゲニ見ヘケルガ、頸ハ何國ハ拔ウセシ、只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号ニ、嗚呼恐ロシヤ慎メヨ。天道ニ私無ク善ヲ賞テ惡ヲ罰ス。無道法師ハ次郎坊ニ非則バ、太郎坊ノ</p>
<p>ヤ、邪ヲ折キ正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者ナシ。</p>	<p>同ク建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルガ、鞍馬寺ニ學僧アリ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲモ閱シ、粗文章ノ事モ得ケレバ、只名利ムサボリ僞慢降シカタク、邪見伏セス。故ニ希玄ノ生知超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ヒケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振トイヘトモ、子ガ燈火ヲ、常ニ蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱ル。然レ自慢猶ヤマズシテ憤リ深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀ケレバ、天俄ニカキクモリ、震動雷電シ、風林木ヲ吹倒ノ寒ク、車輪ノ兩山クズル計ニテ、其ヲソロシキ事肝魂モ滅ル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ頭ヲ何地ハ拔ウセシソ。只ムクロ計ゾノコリケル。時ノ人口号テ、ア、畏レ之慎メヨ。天道ニ私ナク善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道法師ヤ次郎坊ニアラスンバ、太郎坊ノワザナラントゾ云ケルナリ。希玄危キ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ラズンバ、太郎坊ノワサナラント云ケル。希玄危キ毒害ヲ免レ玉フ事ハ、単エニ自善ノ力、亦ハ冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>	<p>法師也、次郎坊ニ非ズンハ、太郎坊ノ業ナラントソ云ケルナリ。希玄危キ毒害ナラント免カレ玉フ事ハ、單ニ自善ノ力、且冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>	<p>ワザナラントゾ云ケル。希玄危キ毒害ヲ免レ玉フ事ハ、單ヘニ自善ノ力、又ハ冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバ也。</p>	<p>毒害ノ難ヲ免レ玉フ事ワ、單ニ自善ノ力、且冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>
<p>○建保三年 建仁寺栄西の 室に入る</p> <p>同建保三歳乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思召ケルハ、吾歳早ヤ十六歳、既ニ入学以來内外ノ經傳、凡ソ古今ニ暗カラヌト雖モ、法心法性ノ迷イ言外ニ超然タル。更ニ是ヲ明メガタシ。聞バ此頃建仁榮西禪師ハ、台密禪ノ三宗ヲ兼主サトリ、實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參ジ玉フ。一見マシマシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任セラレタリ。希玄親ク西公ニ事エテ、參話入室精誠ヲ尽シ玉エバ、倍々智見猛利ナリ。</p>	<p>同建保三年乙亥正月ノ十日ニ、密ニ思食ケルハ、吾歳早ク十六歳ニ、入学以來内外ノ經傳、ヨヨソ暗カラヌト雖モ、法心法性ノ迷イ言外ニ超然タルヤ。更ニ是ヲ明メガタシ。聞ハ此頃建仁ノ榮西禪師ハ、台密禪ノ三宗兼主ト。實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參ズ。公一見シテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任ゼラル。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ尽シ玉ヘハ、倍々智見猛利ナリ。</p>	<p>同建保三年乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思食シケルハ、吾年早ヤ十六歳、既ニ入学以來内外ノ經傳、凡ソ古今ニ暗カラズト雖モ、法心法性ノ迷ヒ言外ニ超然タルヤ。更ニ是ヲ明メ難シ、聞バ此頃建仁ノ榮西禪師ハ、臺密禪ノ三宗ヲ兼主サドリ、實ニ希代ノ明師也トテ、遂ニ往テ西公ニ參ジ玉フ。公一見マシマシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任セラレタリ。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ盡シ玉ヘバ、倍々知見猛利也。</p>	<p>同建保三年乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思食ケルワ、吾歳早ク十六歳也。已ニ入学以來内外ノ經傳、凡古今ニ黒カラズト雖モ、法心法性ノ迷ヒ言外ニ超然タル也。更ニ是ヲ明メガタシ。聞バ此頃建仁ノ榮西禪師ワ、台密禪ノ三宗ヲ兼主リ、實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參シ玉フ。西公一見マシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任ゼラル。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ尽シ玉ヘバ、倍々知見猛利ナリ。</p>
<p>栄西の入寂 明全に随侍 師資相伝</p> <p>アレヒ時ニ恨ラクハ、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營シ了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然ジテ後ハ明全和尚ニ隨侍ノ、辨道參禪マシマセリ。一日</p>	<p>アレヒ此ニ恨之、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營シ了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然ノ後チハ明全和尚ニ隨侍ノ、雜道參禪マシマセリ。一日因ニ全和</p>	<p>去ドモ于レ時恨ムラクハ、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然シテ後ハ明全和尚ニ隨侍シテ、辨道參禪マシマセリ。</p>	<p>アレヒ于レ此恨之ワ、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬ノ入寂セリ。然後ワ明全和尚ニ隨侍ノ、辨道參禪マシマセリ。一日因ニ全和</p>

大藏經周覽二
遍
希玄と号す
三輪明神出現

<p>因ニ全和尚二問、法性何為迷悟アル。和尚答云、三世ノ諸仏モ有レ知レ有、狸奴白狐却テ知有ト、言下ニテ玄有レ肖三玄四喝盡ク通達セリ。仍テ和尚宗派ノ圖乃菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授マス。希玄ハ是楊岐山ヨリ九世孫ト成リ玉フ。</p>	<p>尚二問、法心法性何為迷アル。和尚答テ曰ク、三世ノ諸國佛不レ知レ有、狸奴白狐却テ知レ有。希玄言下ニ省之三玄四喝盡ク通達セルナリ。仍テ和尚宗派ノ圖及ビ菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授ケマス。希玄楊岐ヨリ九世ノ孫ト成ル。</p>	<p>一日因二問、法心法性何為迷ヒアル。和尚答テ曰ク、三世ノ諸佛不レ知レ有、狸奴白狐却テ知レ有ト。言下ニ玄有レ省、三玄四喝盡ク通達セリ。仍テ和尚宗派ノ圖及ビ菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授ケ玉フ。希玄ハ是揚岐ヨリ九世ノ孫ト成玉フ。</p>	<p>尚二問、法身法性何為迷アル。和尚答曰ク、三世ノ諸仏不レ知レ有、狸奴白狐却テ知レ有。希玄言下ニ省之。三玄四喝盡ク通達セルナリ。仍テ和尚宗派ノ圖及ビ菩薩戒ヲ以テ、希玄ニ授ケ玉フ。希玄ハ是楊岐ヨリ九世ノ孫ト成玉フ。</p>
<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アル前後六年、大藏ヲ見玉フ事二遍、十三ヨリ十八年ニ到ルト聞アルケル。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉フト云トモ、深ク自ラ顧レバ、未タ滲漏ノ無ニ非ズ。猶悟ルヘキ旨アラント。更ニ自己ヲ容シ玉ハテ、増々修心練行アリ。</p>	<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アル前後六年、大藏ヲ見玉フ事二返。十三ヨリ十八歳ニ到ト聞エケリ。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉フト雖モ、深ク自顧ス、未タ滲漏ノ無キニアラズ。猶ヲ悟ルベキ旨アリヌベシト、更ニ自己ヲ容シ玉ハテ、マスマス修心練行アリ。</p>	<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アルコト前後六年、大藏ヲ見玉フ事二遍、十三ヨリ十八年ニ到ト聞エケル。曾テ濟家ノ宗旨ヲ悟リ玉フト雖ドモ、深自顧リ見レバ、未ダ滲漏ノ無ニ非ズ。猶悟ル可キ旨在ント。更ニ自己ヲ容レ玉ハデ、増々修心練行アリ。</p>	<p>建仁寺ニ留錫シ玉フ前後六年、大藏ヲ見玉フ二返。十三歳ヨリ十八歳ニ到ルト聞ヘケリ。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉ト雖モ、不覺自顧ハ、未タ滲漏ノ無キニアラズ。猶ヲ悟ルベキ旨アラン。更ニ自己ヲ容シ玉ワデ、マス／＼修心練行アリ。</p>
<p>一夜寂々トノ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ声アリ。告テ曰ク、樂哉定坐、至哉純心。道ハ夫レ極リ無シ。設イ到ルモ猶有ル在リ。務乎君勿レ怠ト。希玄仰テ問イ玉ハク、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスゾヤ。神答曰、我ハ元ト常世神、為ニ迹ヲ垂ルト言テ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食シ、奇哉常世ノ神トハ所謂國常立</p>	<p>一夜寂々トシテ定坐純心ナラセケル。虚空ニ超アリ。告テ曰ク、樂哉定坐、至哉純心ノ道ハ、夫レ極リナシ。設ヒ到ル者モ尚ヲモアルアリ。務ヨヤ君勿怠。希玄仰テ問言ク、如何ナル神仙ニテ如此ハ示現シ玉フソ。神答テ、我ハ元トヨリ神為ニ迹ヲ垂ル、トノ玉ヒテ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食、奇哉常世ノ神ト</p>	<p>一夜寂々トシテ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ聲有リ。告テ曰ク、樂哉定坐、至乎純心。道ハ夫レ極リ無シ。設ヒ到モ猶有ル在リ。務ヨヤ君勿レ怠ト。希玄仰テ問ヒ玉ハク、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスヤ。神答曰、我ハ元ト常世ノ神、為ニ迹ヲ垂ルトノ玉イテ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食シ、奇哉、常世ノ神トハ</p>	<p>一夜寂々トノ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ声在。告テ曰ク、樂哉定坐、至哉純心。道ハ夫レ極リナシ。設ヒ到ルモ尚天ノ在アリ。務乎君勿レ怠ト、希玄仰テ問玉フ、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスゾ。神答テ曰ク、我ハ元トコヨノ神、為法ニ迹ヲ垂ルトノ玉ヒテ、重テ御音マシマサザリキ。希玄神護ヲ聞食シ、奇哉常世</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>尊、三輪ノ明神是ナリ。本ハ古佛ニテマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ皈リ玉ハデ、護法利人シ玉フト、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙頻ニテ三輪ノ方ヲ礼拜シ玉ヘリ。然シテ尚ヲ有リ在ルトノ神ノ教エ争カ怠ルヘキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト云トモ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障重ク道心ノ祈少ニシテ利欲ノミ是ヲ祈ル。己ニ水ヲ濁リナハ、神明ノ影何ヨリ移ル可シ。信心清淨ナリシカバ、祈ラジトテモ神ヤ護ラセケルトカヤ。是ヲ思フニ可慎トモナリ。</p>	<p>ハ、イハユル國常立ノ尊三輪明神是レナリ。本ハ古佛ニマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂、未タ本覺ニ皈給テ護法安人シ玉フト、感歎アサカラズ、隨喜ノ涙頻リニテ、三輪ヲ禮拜シ玉フ。然シテ尚ヲアルアリトノ神ノ教ヲ争カ怠タルベキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ト云ヒ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障重ク道心ノ祈リ少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何レヨリ移リシ玉ハヌ。信心清淨ナラマシカバ、神トテ神ハ護セケル者ナリ。</p>	<p>イハユル國常立尊、三輪ノ明神也。本ハ古佛ニテマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ歸リ玉ハデ、護法利人シ玉フトテ、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙ニテ三輪ヲ禮拜シ玉エリ。然テ尚ヲ有リ在ルトノ神ノ教争デカ怠ルキヤトテ、彌々細行深切也。嗚呼末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト雖モ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障重ク道心キノ祈少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何ヨリ移ラン。信心清淨ナリシカバ、祈ラジトテモ神ヤ護セケルトカヤ。</p>	<p>ノトワイユル國常立ノ尊、三輪ノ明神是ナリ。本地ワ古佛ニマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ皈リ玉ワテ、護法利人シ玉フト、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙頻ニテ三輪ヲ礼拜シ玉ヘリ。然ノ尚ヲ有ル在リトノ神ノ教、争カ怠ルヘキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト雖モ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障重ク道心ノ祈少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何レヨリ移シ玉ハヌ。信心清淨ナラシカバ、祈ラジトテモ神ヲ護ラセ玉フ也。</p>
<p>○貞応元年 疑滞を抱く 三井寺公胤に 参問</p>	<p>六、渡唐ノ事附旅行而解毒圓之 事</p>	<p>六 師渡唐之事 旅行解毒圓之事</p>	<p>六、師渡唐ノ事 旅行解毒圓ノ得玉フ事</p>
<p>維時希玄御齡イ廿三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉エトモ、未タ決定セズ。遂ニ三井寺ニ到テ公胤僧正</p>	<p>時ニ希玄御齡二十三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉ヘヒ、未タ決セス。遂ニ三井寺ニ至リ公胤僧正ニ問玉フ。</p>	<p>維時希玄御齡廿三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉ヘドモ、未タ決定セズ。遂ニ三井寺ニ到テ公胤僧正ニ</p>	<p>于時希玄御齡二十三歳、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方名納ニ質シ玉ヘヒ、未タ決セズ。遂ニ三井寺ニ至リ公胤僧正ニ</p>

渡唐の準備
高充の随伴決
定

<p>二問ヒ玉フ。僧正答テ仰セケルハ、此ハは大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後、其微旨ヲ得ル者鮮シ。吾聞ク宋ノ国ニ佛心印ノ傳ルノ正宗有リト。貴僧彼ニ往テ之ヲ研究セラレバ可也トアレバ、希玄大ニ喜悅マシマシテ、僧正ナレバコソ如是ハ御指南アリケルト。乃チ三井寺ヲ下リ建仁ニ往キ、古ノ趣ヲ佛樹エ仰セラレケレバ、佛樹讚歎シテ、善哉ヤ大夫。已ニ今日ノ事ヲ知ルト云氏、悟后ノ精進尚奇也。疾ク太宋ニ到テ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良方且ツ群類ノ蔭涼ト作ントナリ。</p>	<p>是モ一家ノ僧正答テ曰、仰テレケルハ、是レ大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後チ、其ノ微旨ヲ得ル者鮮ナシ。吾聞宋國ニ佛心印ヲ傳ルノ正宗アリ。貴僧彼ニ往テ之研究セバ可也トアレハ、希玄大ニ喜悅マシマシテ、僧正ナレバコソ如此ハ御指南アリケルトテ、乃チ三井寺ヲ下リ建仁寺ニ往キ、右ノ赴ク佛樹ヘ仰セラレケルニゾ、佛樹讚歎シテ善哉大丈夫、已ニ今日ノ事ヲ知ルトイエ氏、悟后ノ精進尚奇ナリ。トク大宋ニ到リテ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且タ群數ノ蔭涼ト作ント。</p>	<p>問玉フ。僧正答テ仰ケルハ、此ハは大覺世尊後融ノ旨也。最澄コレヲ受テ後、其微旨得ル者鮮。吾聞宋ノ國ニ佛心印ヲ傳ル正宗有リ。貴僧彼ニ往テ是ヲ研究セラレバ可也ト有レバ、希玄大ニ喜悅増シマシテ、僧正ナレバコソ如此指南ハ有リケルト。則チ三井ヲ下リ建仁ニ往キ、右ノ趣キ佛樹エ仰ラレケレバ、佛樹讚歎シテ、善哉大丈夫。已ニ今日ノ事ヲ知ト雖、悟后ノ精進尚奇也。疾太宋ニ到テ廣ク名僧ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且羣類ノ蔭涼ト作ト也。</p>	<p>問玉フ。僧正答テ仰セラレケルワ、是ハ是レ大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後、其微旨得ル者鮮。吾聞宋國ニ佛心印ヲ傳ルノ正宗アリ。貴僧彼ニ往テ是ヲ研究セラレヨカシトアレバ、希玄大ニ喜悅マシシテ、僧正ナレバコソ、如此ハ御指南アリケルトテ、乃チ三井ヲ下リ、建仁ニ往キ、右ノ赴ク佛樹ヘ仰セラレケレバ、佛樹讚歎ノ善哉大丈夫。已ニ今日ノ事ヲ知トイヘ氏、悟后ノ精進尚奇也。疾大宋ニ到リテ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且群類ノ蔭涼ト作ント。</p>
<p>希玄遂ニ辞メ、渡唐ノ用意アリケルガ、先ツ父通親公エ御暇乞遊シケレバ、通親別レヲ悲ミ仰セケルハ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風ノ音信ヲ欠時ハ、父カ意易カラズ。不審物ヲ思シニ、遠キ別レヲ聞ヤ。此齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニ遙ニ立行ハ、相遇日ヤ優華ノ年ヲ待ザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ハ待ベシ氏、学道ノ為ナレバ願意ヲ果シ</p>	<p>希玄遂ニ拜辞メ、渡唐ノ用意ナサレケル。先父上ヘ御暇請ヲ遊ケレバ、通親別ヲ悲仰セケルハ、御身如今目下遠ラテアルスラ少カニ風音ヲ吹ク時ハ、父カ心ハ安カラズ。不審物ヲ思シニ、遠キ別ヲ聞ヤ。此ノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異國ニ立イナバ、相値日ヤ優曇り花ノ年ヲ待タザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ハ待レ共、学佛道ノ為メナレバ願意ヲ果</p>	<p>希玄遂ニ拜辞シテ、渡唐ノ用意有リケルガ、先父通親公エ御暇乞遊シケレバ、通親別レヲ悲ミ仰ケルハ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風ノ音信ヲ缺時ハ、父ガ意ハ安カラズ。不審物ヲ思ヘシニ、遠キ別レヲ聞ヤ、コノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニ遙カタチイナバ、相遇時ヤ優曇華ノ年ヲ待ザル命也。吾没跡ハ免モ角モ留メ度ハ侍レドモ、學佛道ノ爲成バ願意ヲ</p>	<p>希玄遂ニ拜辞メ、渡唐ノ用意ナサレケル。先御父通親公ヘ御暇乞遊バシケレバ、通親別ヲ悲ミ仰ケルワ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風音ヲ欠則ハ、父カ意安カラズ。不審初ヲ思ヒシニ、遠キ別レヲ聞ヤ、コノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニタチイナバ、相値日ヤ優曇華ノ年ヲ待ザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ヲ待レ氏、学佛道ノ為ナレバ、願意ヲ果シ語</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>申サレヨ。偕テ萬里波濤ノ行脚ニハ、幾ク海ヲ越エ、山ヲ過テ、危キ有為ノ旅路ナリ。孤行旅ハヲホツカ無シ。高充宜ク伴ヲ擇ヘト仰ケル。高充承リ謹言シ上ケルハ、御意畏リ承ル。最モ御譜代ノ侍共、各々御伴ヲ願ベシ。然レ臣仰キ冀クハ、此高充ニ仰付ラレハ有難シト申上ルニ、花房右近光吉、名越市ノ正張次、十何右衛門利明等、其外智勇覺エアル諸士、我モ我モ口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競シ願ケル。時ニ、通親心ニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無ラマシトハ不覺也。然レバ侍共何レモ劣又強力ナリト云臣、就中高充コソト思召仰セラレケルハ、各々忠志ヲ以テ願ル、旨、神妙ノ至リナリ。然ラバ往モ留モ忠義ハトテモ同事。高充ハ往ヘシ。光吉、張次ハ留テ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家取ヨト仰セラレバ、何レモ御意ニ任セケル。希玄由ヲ聞食シ、三界ヲ家トメ、到處家ナレ</p>	<p>申サレヨ。偕テ万里ノ行脚ニハ、幾ク海ヲ越、山ヲ過テ、危峻ノ旅路ナレバ、孤行ノ旅ハ覺束ナシ。高充宜ク伴ヲ擇フベシト仰セアル。高充承リ謹言ケルハ、御意ハ畏リ奉リ、最モ御譜代ノ侍共、各御伴ヲ願フベシト云ヘドモ、仰願ハ、コノ高充ニ仰セ付ケラレバアリガタシト申上ル処ニ、花房右近光吉、名越市ノ正張次、十河左衛門利明等、其ノ表智勇ノ覺ヘアル諸士、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競アラソイケル。時ニ、通忠コ、ロニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シガタシ。山賊海賊龍虎ノワザハイモナカラマジトハ不覺ナリ。然レバ侍共何レモ劣ラヌ強者ナリト雖モ、就中高充コソハト思食仰セケルハ、各々忠志ヲ以テ願イケル旨、神妙ノ至リナリ。然レバ往モ留ルモ忠義ハ同ジ。高充ハ往クベシ。光吉ト張次ハ留リテ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ我家ヲ取ヨト仰セラレバ、何レモ御意ニ任セケ</p>	<p>果シ申サレヨ。偕テ萬里波濤ノ行脚ニハ、幾バクカ海ヲ越ヘ、山ヲ越エ、危キ有為ノ旅路也。孤行ノ旅ハオボツカナシ。高充宜ク伴ヲ擇ベト仰ケル。高充承リ謹言申上ケルハ、御意畏リ奉ル。最モ御譜代ノ侍ドモ、各々御供ヲ願フベシ。然レドモ仰ギネガハクバ、此高充ニ仰セ付レバ有難シト申上ル處ニ、花房右近光吉、名越市正張次、十河右衛門利明等、其外智勇兼備ノ士ドモ、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競ヒ願ヒケル。時ニ、通親心ニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無カラマジトハ不覺ナリ。然バ侍共何レモ劣ラヌ強者タリトイヘドモ、就中高充コソト思食仰セラレケルハ、各々忠志ヲ以テ願ル旨、神妙ノ至也。然ラバ往モ留モ忠義ハ以テ同事也。高充ハ往クベシ。光吉、張次ハ留テ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家ヲ收メヨト仰ケレバ、何レモ御意ニ任セケリ。希玄由ヲ聞食シ、</p>	<p>サレヨ。偕又万里ノ行脚ニハ、幾カ海ヲ越ヘ、山ヲ過テ、危峻ノ旅路ナリケレバ、孤行ノ旅ヲホツカナシ。高充宜ク伴ヲ撰ヘト仰アル。高充承リ謹言上ケシワ、御意畏リ奉ル。最モ御譜代ノ侍共、各々御伴ヲ願ベシ。サレ臣仰願ワ、此高充ニ仰付ラレバ、難有ト申上ル処ニ、花房右近光吉、名越市ノ正張次、十河左衛門利明等、其表智勇ヲボヘアル諸士、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競ヒアゲツラフ。時ニ、通親心ニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無ラマシトハ不覺ナリ。然レハ侍共何レモ劣ラヌ強者タリト雖モ、就中高充コトト御思召仰ケルワ、各々忠志ヲ以テ願ル、旨、神妙也。然バ往モ留モ忠義ハ以テ同シ。高充ハ往ベシ。光吉ト張次ハ留リテ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家ヲ收ヨト仰アレバ、何レモ御意ニ任セケリ。希玄此由ヲ聞食、僧ワ三界ヲ家トス。到ル所家ナレバ、</p>

貞心二年
渡唐（入宋）

<p>バ、足下何ヲカ畏ルベキ。万一劫賊悪獸ノ難アラバ、亦好宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶ヲ借ントテ、屢々イドミ給フ伝氏、父命親情拒ミ難キヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏スレバ、御門叡聞マシマシテ、好シ是レ名師ハ国家ノ寶、急キ彼ニ渡テ大法傳エ、速ニ帰朝ノ朕葦原ノヨサシナレトノ宣命有アリ。通親有難トテ御門ヲ退出シ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>リ。希玄由ヲ聞食、僧ハ三界ヲ家トス。到处家ナレバ、足下何ニヨカ畏ルベキ。万一劫賊悪獸ノ難アラバ、又ヨシ宿ノ債ヲ償ン。ソ。伴侶ヲ借ラントテ、數々井ナミ給フソト云ヘドモ、父命親情拒ガタク、遂ニ伴士ヲ受ケ玉フ。通親御門ヘ奏達アルニ、叡聞マシマシテ、正好シ。是レ名師ハ國ノ寶、急キ彼ニ渡リ大法ヲ傳ヘ、迷情ヲ救ン為メ、速ニ皈朝シテ朕葦原ニヨホシナレトノ宣命アリ。通忠ハアリガタシトテ御門ヲヌカツキシ退リテ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>三界ヲ家トス。到处家ナレバ、某シ何ヲカ畏ル可ケン。萬一惡賊惡獸ノアラバ、亦好宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶借サントテ、數々イナミ給フト雖モ、父命親情拒ミ難キヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏達アル。御門叡聞マシマシテ、好事成乎。名師ハ是國家ノ寶、急ギ彼ニ渡テ大法ヲ傳エ、速ニ歸朝シテ朕葦原ノヨサシナレトノ宣命有リ。通親有難シトテ御門ヲ遙ニ退出シ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>足下何ヲカ畏ルベキ。万一却賊悪獸ノ難アラバ、又ヨシ宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶ヲ借ントテ、數々井ナミ給ト雖氏、父命ノ親情拒カタクヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏達アル。御門叡聞マシマシテ好。是名明ワ國ノ宝ヲ、急キ彼ニ渡テ大法ヲ傳ヘ、速ニ皈朝シテ朕葦原ニヨサシナレトノ宣命アリケレバ、通忠有難シトテ、御門ヲヌカツキシ退テ、師ノ渡唐ヲ送玉フ。</p>	<p>同二年春二月二日立玉フ。御年廿四、高充一人御伴ニテ高船ニ隨ヒ玉フ。高充ハ様ヲ奴僕ノ形チニ替テ麤布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或説ニ明全和尚モ師ト共ニ入宋同船ト云エルハ據アルニヤ。舶大洋ニ浮ミ風ニ任セテ行。船ノ早ヤ古郷ヲ連々ト山モ隠ル、ウナノニハ、浪ニタワレテ遊フ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空、イトサミシケニ濱千鳥、チンタタル声ノ中、頻ニ物ヲ思ホヘテ、遠方見レバ雲ノ</p>	<p>同ジク二年癸未ノ春ル二月二日、師ノ御年二十四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨ヒ玉フ。高充ハサマヲカヘ奴僕ノ形ニテ麤布ノ組衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶ビタリ。或ハ説ニ明全和尚モ師ト共ニ入宋同船トイヘルハ抛アルニヤ。舶大洋ニ泛風ニ任セテ行ク。船ノ早ヤ古郷ノ追々ト山モカクル、ウナノニハ、浪ニタハムレン遊フ鴨モ、臚、月夜ノ沖ノ空、井トサミシゲニ濱チドリ、チンタ声ノ中、頻リニ物</p>	<p>同二年ノ春二月二日立玉フ、御歳廿四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨ヒ玉フ。高充ハ様ヲ奴僕ノ形ニ替テ麤布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或説ニ明全和尚モ師トトモニ入宋同船ト云エルハ據アルニヤ。舶大洋ニ浮ミ風ニ任セテ行ク。船ノ早古郷ヲ追々ト山モ隠ルルウナノニハ、浪ニタハレテ遊ブ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空、イトサミシゲニ濱千鳥、チンタタル聲ノ中、頻ニ物ヲ思ホヘテ、遠方見レ</p>	<p>同二年癸未ノ春二月二日、師ノ御歳二十四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨玉フ。高充ワ様ヲヤツコノ形ニカヘ廉布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或ル説ニ明全和尚モ師ト共ニ入宋同船ト云ニワ、據アルニヤ。舶大洋ニ浮風ニ任テ行。船ニ早故郷ノ越ト山モ隠ル、ウナノニハ、浪ニタワレテ遊ブ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空ヲ、イトサビシゲニ濱千鳥、チンタタル声ノ中、頻ニ物ヲモホエテヲチ方</p>
---	---	--	--	--	---	--	---

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>色、立カトスレバ消易キ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リナリ。近方見レバ此是葦ノ一村ニ、ワカ宿ニ樂ム人ノ釣舟ヲ早コキ出ス歌ノ声、スサキニ休ムカリカ子ノ、身モ風流ヤ面白ト語り過レバ、程モ無ク唐土日本ノ潮堺イ竺良カ沖ニ付ケレバ、惡風俄ニ起易テ、船霧海黒鳥ニ付。</p>	<p>ヲホヘテ、遠チ方見レバ雲ノ色、タツカトスレバ消ヘヤスキ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リナリ。コチカタ見レバ是レヤ此ノ葦一ムラ、我方宿ニ樂シム人ノ釣り船ヲヤコギダス歌ノ声、スサキニヤスム雁身モ、風流ヤナト語りテ往ケハ、ホドナク唐ト日本ノ潮堺イ竺良ガ沖着ケレバ、惡風俄ニ起易リテ、船霧海黒鳥ニコソ付ニケリ。</p>	<p>バ雲ノ色、立ツカトスレバ消エ易キ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リ也。近方ミレバ此レ是ノ葦ノ一村ニ、ワカ宿ニ樂ム人ノ釣舟ヲ早コギ出ス歌ノ聲、スサキニ休ムカリガネノ身モ、風流ヤ面白ト語り過レバ、程モナク唐ト日本ト潮界竺良ガ沖ニ付キケレバ、惡風俄ニ起チ易テ、船霧海ノ黒鳥ニ付ク。</p>	<p>見レバ、色立カトスレバ消ヤスキ、人ヲモ身ヲモ、ヲモヒヤル、海士ガ磯焼煙ナリ。コチ方ミレバ是ヤ此ノ葦ノ一村、我宿ニ樂ム人ノツリ舟ヲコギ出ス歌ノ声、スサミ休ムカリ身モ、風流ヤナト語りテ往バ、ホドモナク唐ト日本ノ潮堺竺良ガ沖キニ付ケレバ、惡風俄ニ起易テ、船霧海ノ黒鳥ニ付キ。</p>
<p>偕テ此嶋ノ難義ニハ、惡龍澤ニ栖成テ、毒氣ニ物ヲ殺ニヤ。人獸皆テ到ラズ。今倚ル船ノ人音ニ惡龍怒リヲナスヤラン。黒雲ホウト推覆イ、風雷天地ヲ轟シ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ、四体シ、マリ口寒、哀ナリケル有様也。人々濕養スヘキ方便ナク、苦ヲシキ子ノ摺枕、死スル計リニ見エシカト、師高充主従ノミ氣貌常ヲ不レ改。思フニ師ハ通力ノ助ケ有リ。高充ハ生得ノ剛キ逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多ノ人々ガ今</p>	<p>偕テ此嶋ノ難儀ニハ、惡竜澤ニ栖ミ毒氣ヲ吐テ死ス。故禽獸皆テ到ラス。今倚ル船ノ人音惡竜怒リヲナスヤラン。黒雲ボウト推覆、風雷天地ヲ轟カシ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ、四躰シ、マリクチコゴヘ、哀ナリ。人々ノ温養スベキ方便ナク、苦ヲシキ子ノ摺枕ヲ、死スル計リニ見エシカト、高充主従ノミ氣貌常改ス。思フニ師ハ道力ノ助ニヤアラン。高充ハ生得ノ剛氣逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多人々ガ今ヲ限リト見ヘ</p>	<p>偕テ此島ノ難義ニハ、惡龍サワニ栖ミ、毒氣ニ觸ルル時ハ必ズ死ス。故二人獸皆テ到ラズ。今倚ル船ノ音ニ惡龍怒リヲナスヤラン。黒雲ホフト推覆ヒ、風雷天地ヲ轟シ、雨亦雹凜ク、ケシカラヌ寒サ來テ、四體シジマリ口寒テ、哀也。人々濕養スベキ方便ナク、苦ヲシキネノ摺枕、死スル計リニ見ヘニケリ。師ト高充ハ主従ノミ氣貌常ヲ不レ改。思フニ師ハ道力ノ助ケ有リ。高充ハ生得ノ剛キ逸群ノ強者ナルニヤ。師數多ノ人人今</p>	<p>偕此嶋ノ難義ニワ、惡龍サワニ栖、毒氣物ヲ死人ニヤ、禽獸皆テ到ラズ。今倚ル船ノ人音ニ惡龍イカリヲナスヤラン。黒雲ボフト推覆イ風雷天地ヲ裏シ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ四体シマリ口コゴヘ、哀レナル人々ノ温養スベキ方便ナク、トマヲシキ子ノ摺枕、死スル計リニ見エシカト、高充主従ノミ氣貌常ヲ改ス。思フニ師ハ道力ノ助アリ。高充ハ生得ノ剛氣逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多ノ人々ガ今ヲ限リト見</p>

黒島到着
難儀あり

石清水神・飯成山神の出現

<p>ヲ限リト見エケレバ、大悲ノ情忍ヒ難ク、扶ハヤト思召、須更祈念マシマス処ニ、翁一人忽然トノ柴ヲ負イ来テ、火ヲ焼ハ、少女一人現シ、水ヲ求テ粥ヲ煎ル。翁葉ヲ取出シ、粥ト共ニ與レバ、人々はヲ服養シ、忽チ四體濕リ、疾イユレバ、日和マテ快シトテ、忻ヒケル。</p>	<p>ケレバ、大悲ノ情忍ガタク、扶バヤト思食、須臾祈念マシマシケル処ニ、翁ナ一人忽然トノ柴ヲ負来テ、火ヲ焼バ、少女一人現レテ、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁ナ藥リヲ取り出シ、粥ト共ニ與フレバ、人々はヲ服養シ、忽チ四躰温マリ疾イユレバ、日和マテ快ヨシト忻ヒニケリ。</p>	<p>ヲ限リト見エケレバ、大情ノ悲忍ビ難ク、扶ケバヤト思食、須臾祈念マシマス處ニ、翁一人忽然トシテ柴ヲ負来テ、火ヲ燒ケバ、少女一人現ジ玉ヒ、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁藥ヲ取り出シ、粥トトモニ與レバ、人人是ヲ服養シ、忽チ四體濕リ、疾イキユレバ、日和マデ快ク成リケリトテ、忻ケリ。</p>	<p>ヘケレバ、大悲ノ情忍カタク、扶バヤト思食、須臾祈念マシマシケル処ニ、翁一人忽然トノ柴ヲ負イ来テ火ヲ燒バ、少女一人現レ出、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁葉ヲ取出シ、粥ト共ニ與レバ、人々は服養シ忽チ四體温リ、疾イユレバ、日和マデ快ヨシトテ、忻ケリ。</p>
<p>師、翁及少女ニ問玉フ。二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ事、報謝シ難キ処ナリ。粥葉亦不思議ト宣ヘハ、翁答テ、吾レフ師ト同ジ郷、石清水ノ主神ナリ。師ノ慈念亦道心ヲ守護シ来ル。葉ハ是解毒圓、大神仙ノ方信心ニ服スレバ、必死スモ命ヲ延、萬病皆治スト。師ノ言ク、仰冀クハ此方ヲ授ケ玉エ。吾果ノ大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與エテ、外生死ノ病ヲ治シ、法葉ヲ施シテ、内泥涅ノ喜樂ヲ得セシメント。神聞食大哉至命。授ケ申サントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉エハ、少女卓立ノ云ケルハ、吾モ同ク師ノ古郷山代ノ飯成山姫神ナリ。師ノ學道ヲ常ニ</p>	<p>時ニ師、翁ナ及ヒ少人ニ問イ玉フ。二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フゾ。報謝シガタキ処ナリ。粥藥又タ不可思議トノ玉ヘハ、翁ナ答テ、吾ハ師ト同郷ト、石清水ノ主神ナリ。師ノ慈念又ク道心ヲ守護シキタル。藥ハ是解毒圓、大神仙ノ方信心ニ服スレハ、必ス死命ヲモ延フ。万病皆治スト。師ノ言ク、仰冀ハ授ケ玉ヘ。吾果メ大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與ヘテ、外生死ノ病治シ、法藥ヲ施シテ、内泥涅ノ喜樂ヲ得セシメン。神聞食テ大哉至哉。授ケマイラセントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉ヘバ、又タ少女神卓立シテ云ヘルハ、吾モ同ク師ノ古郷ノ山</p>	<p>師、翁及ビ少女ニ問玉フ、二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ。報謝シ難キ處也。粥藥亦不可思議トノ玉ヘバ、翁答テ、吾ハ師ト同ジ里、石清水ノ主神也。師ノ慈念又道心守護シ來ル。藥ハ是解毒圓、大神仙ノ方、信心ニ服スレバ、必死モ命ヲ延ブ、萬病此治スト。師言ク、仰冀ハ授ケ玉エ。吾果シテ大道ヲ極メナバ、普ク神藥ヲ與エテ、外生死ノ病ヲ治シ、法葉ヲ施シテハ、内泥ノ喜樂ヲ得サシメント。神聞食大哉至哉。授ケ申サントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉エバ、少女又卓立シテ云ク、吾モ同ジク師ノ古郷ノ山代ノ飯成山ノ姫神也。師之學道ヲ常ニ護ル行末</p>	<p>師、翁及少女ニ問テノ玉フワ、二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ。報謝シガタキ処ナリ。粥葉又不可思議トノ玉ヘバ、翁答テ曰、吾レハ師ト同郷石清水キ主神ナリ。師ノ慈念又道心ヲ守護シ来、葉ワ是解毒圓トテ、大神仙ノ方信心ニ服スレバ、必死モ命ヲ延フ。万病皆治スト。師ノ曰ク、仰願ヲ授玉ヘ。吾果大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與テ、外生死ノ病ヲ治シ、内法葉ヲ施ノ、泥涅ノ喜樂ヲ得セシメン。神聞食、大哉至哉。授ケマヒラセント、一卷ノ書ヲ附與シ玉フ。少女又卓立ノ云ヘルワ、吾モ同ク師ト同郷ノ山代ノ飯成山ノ姫神ナリ。師ノ學道ヲ常ニ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>護ル行末、先ノヨサシ好シト言テ、二神同ク先ヲ放チ、飛テ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ始船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ殆キヲ免レシハ、偏ニ師ノ道德ノ至ニ依ル。師ハ肉身ノ大士ナリ。然ラズンバ争カ神降ノ奇特ヲ拜ン。有難キ次第也トテ、感涙袖ヲ湿シケリ。</p>	<p>代ノ食成山ノ姫神ナリ。師ノ学道ヲ常ニ守護ス行末、先キヨク守ント言イアテニ、神同ク光リヲ放テ、飛ンテ雲井ニ隠レサセ玉フ。時キニ高充ヲ初メ船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ殆ヲ免レシハ、偏ニノ道德ノ至リニヨル。師ハ肉身ノ菩薩ナリ。然カラズンバ争デカ神降ノ奇特ヲ拜ミ、有リガタシ貴也トテ、感涙袖ヲ湿ニケリ。</p>	<p>エ、先ノヨサシヨシト言テ、二神同ク光ヲ放チ、飛デ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ始メ船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ危キヲ免レシハ、偏ニ師ノ道德ノ至リニ依ル。師ハ肉身ノ大士也。然ズンバ争カ神降ノ奇特ヲ拜マン。難有貴也トテ、感涙袖ヲ濕シケリ。</p>	<p>守ル行ク末、サキクヨザシヨシト言フテ、二神同ク光ヲ放チ、飛テ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ初メ船中ノ人々未曾有ノコトヲ拜ミ、必死ノ危ヲ免レシワ、師ノ道德ノ至ナリ。然レバ師ヲ肉身ノ大士ナリ。然ラバ神降ノ奇特ヲ拜ン。難有貴キ氏云テ、感涙袖ヲ湿シニケリ。</p>
<p>○嘉定十六年 太白山(天童山)に上る 山賤(童子)の先導</p> <p>七、師大白星ニ値給事附戒臘公事ノ事</p> <p>然而帆ヲ順風ニ打任セ行ハ、程ナク明州ノ堺ニ着給フ。及太元ノ嘉定十六年夏四月、太白ニ登リ給シカ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘処ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ト頼ム夜ノ、語リ伴ナリ人モカナ。石ノ枕ニ苔席、イト、サエ行ク夜半ノ冷キ露、コモル澤辺ノ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寝ラレハコソ安カラヌ、蛇尾シケレト早鹿ノ、友喚声ノア</p>	<p>七ニハ師太白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然ジテ帆ヲ順風ニ打任テ行ハ、ホドナク明州ノ堺ニ着給フ。乃太白元ノ嘉定十六年ノ夏四月、太白ニ登リ玉ヒシガ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘所ノ山路ニ行暮レテ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ジト頼夜ノ談リ伴フ人モガナ、石ノ枕ニ苔席、イト、サヘ夜半ノ冷シク露、コモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寝ラレハコソ安スカラメ、蛇尾シケレトテ早鹿ノ友喚フ</p>	<p>七 師大白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然而帆ヲ順風ニ打任セ行ケバ、程無ク明州ノ堺ニ著キ給フ。則太元ノ嘉定十六年夏四月、大白ニ上リ玉エシガ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘所ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ト頼ム夜ノ、語リ伴フ人モガナ、石ノ枕ニ苔席口、イトドサエユク夜半ノ冷キ露、コモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寐ラレネバ社安カラネ、蛇尾シケレトモ早鹿ノ、友喚</p>	<p>七、師太白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然ノ帆ヲ順風ニ打任セ行バ、ホドナク明州ノ堺ニ着給フ。乃チ太元嘉定十六年ノ夏四月、太白ニ登リ玉イシガ、誤テ本道ヲ踏差ヒ、餘所ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主トタノム夜ノ、談リ伴人モナク、石ノ枕ニ苔席、イト、サヘ夜半ノス、シキニ露、ゴモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風ノ身ニシミテ、寝ラレバコソ安カラメ、蛇尾ケレトテ早鹿ノ、友</p>

太白山の由来

<p>ワレニヤ。寝物語リモ短夜ノ、早ヤ明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ、斧打カツキ見エケルヲ、高充喜ヒ立寄テ、太白山トハ何地ナリ。本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰様ハ、見ルニ日本ノ人ナルカ、太白エ遍歴トハ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ樵ハ遅カラズ。去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往ハ長安ノ廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>	<p>声ノアワレナド、寝物語リモ短夜ノ、早ヤ明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ、斧打カツキ見ヘニケル。高充喜ヒ立寄テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰ヤウハ、見ルニ日本ノ人ナルガ、太白ノ遍歴修證ノ為カ頼シヤ、賤ガ木コリハ遅カラズ、去來道チシルベ申サント、サキニ立テ誘引ス。纒ニ行ケバ長安ノ廣キ驛路ニ出テニケリ。</p>	<p>聲ノアハレニヤ、寐物語リモ短夜ノ、早明方ニ也ケレバ、四十字餘ノ山賤ガ、斧打カツキ見エケルヲ、高充喜ヒ立倚テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ云様ハ、見ニ日本ノ人ナルカ、太白エ遍歴トハ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ樵リハ遅カラズ、去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往バ長安ノ、廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>	<p>喚声ノアワレナド、寝物語リモ短夜ノ、早明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ斧打カツキ見ヘケルヲ、高充喜ヒ立倚テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰様ワ、見ニ日本ノ人ナルガ、太白ヘノ遍歴ワ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ木コリワ遅カラズ、去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往バ長安ノ、廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>
<p>山賤又指シテ、早太白ハ那方ナリ。夫レ太白ト申セシハ、昔シ天ノ太白カ童子ト為テ降り、此山ニ住ケル故、大白山トモ亦天童山ト名付タリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守神ナト、語ル間ニ、御山ハ此ソ此景德モ見ユルナリ。其太白トハ吾ナルカ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メテ、コソカク顯レテ導引シテマイラスル。行末々モ守ント、忽チ忽天童ノ形ト成リシカ、跡ヲ潜シテ見エザリケリ。師奇特ニ思召、吾ガ得道ノ先兆トテ、御胎ハ限り無し。</p>	<p>山賤又指サシテ早ヤ太白ハ那方ナリ。夫レ太白ト申ハ、昔シ天ノ太白ガ童子ト成テ降、此ノ山ニ住ケル故、太白山トモ天童山ト名ケタリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守ノ神ナト、語ル間ニ、御山ハ景德寺ナリ。其ノ太白ハ吾レナルガ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メデ、コソカク顯レテ道引キマイラスル。行末々モ守ラントテ、忽チ天童ノ形ヲ現シテ、跡ヲ潜シテ見ヘサリケリ。師奇特ノ思ヲ成シ、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡カギリナシ。</p>	<p>山賤又指シテ、早ヤ太白ハ那方也。夫レ太白ト申セシハ、昔シ天ノ太白ガ童子ト為テ降り、此山ニ住ミケル故、太白山トモ又天童山トモ名付タリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守護神也ケリト語ル間ニ、御山ハ是ゾ此ノ景德寺モ見ル也。其ノ太白トハ吾ナルカ、上人ノ学道世ニ妙成ニ、メデテコソカク顯テ導引シマイラスル。行末々モ守ント、忽チ天童ノ形ト成リシガ、跡ヲ潜シテ見エザリケリ。師奇特ニ思食、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡限リナシ。</p>	<p>山賤マタ指テ、早太白ワアナタナリ。夫太白ト申セシワ、昔天ノ太白星童子ト成テ天降り、此山ニ住ケル由、太白山トモ又ワ天童山トモ名ケタリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守ノ神ナド、語ル間ニ、御山ワ是ゾ、此ノ景德寺モ見ルナリ。其ノ太白トワ吾ナルガ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メデ、コソカク顯エテ道引マヒラスル。行末々モ守トテ、忽チ天童ノ形トナリシガ、跡ヲ潜シテ見ヘザリケリ。師奇特ニ思食、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡カギリナシ。</p>

太白山掛錫
住持無際了派

〔戒臘公事〕
〔新到列位〕

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>已ニ太白ニ至テ掛錫アリ。貶ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際和尚、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白ニ登リテ掛アル。時ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白ニ至テ掛錫有ル。吃ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際禪師、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白至テ掛錫アル。吃ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際降師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>
<p>然レモ外国ノ人ナルヲ以テ新戒ノ位ニ列ス。師云、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルニ斯レニ縁ズト云フ無シ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ、先戒ノ者ハ前ニ在テ坐シ、後受戒ノ者ハ皆是次第ニ坐スト説リ。亦法華主ニハ今此三界ハ皆是レ我カ力有ナリ。其ノ中ノ衆生悉ク是レ吾カ子ナリト説リ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且ツ此土他土ヲ論ンヤトテ、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ謂ラク、昔シ四百十八年ノ前、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ兩人結制ニ預リキ。則チ新戒ニ列子シカトモ、從テ諍ス。今汝獨リ何ゾ然ルヤト有ケレバ、衆儀紛然トノ果ス処ナシ。</p>	<p>然レ共外国ノ人ナルヲ以テ新戒ノ位ニ列ヌ。師曰ク、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルニ斯レニ縁ズト曰コト無シ。サレハヨリ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ハス、先受戒ノ者ハ次第ニシテ坐スト説ケリ。又ク法華經ニハ、今此三界ハ皆是我有ナリ。其ノ中ノ衆生悉是吾ガ子ナリト説キ玉エリ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且此土他土ヲ論センヤト、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ云エラク、昔シ四百十八年ノ前キ、吾方國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ二人來テ結制ニ預リ、乃チ新戒ニ列子シガ共、從テ諍ハス。汝今獨リ何ソシカルヤト有リケレバ、衆議紛然トノ果ス。</p>	<p>然ドモ外國ノ人成ヲ以テ新戒ノ位ニ列ス。師曰、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳也。其長幼ヲ序スルニ斯ニ縁ズト云事ナシ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ、先戒ノ者ハ前ニ在テ坐シ、後受戒ノ者ハ皆是次第ニシテ坐スト説リ。亦法華經ニハ今此三界ハ皆是我有也。其中ノ衆生悉ク吾子也ト説ケリ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且ツ此土他土ヲ論センヤトテ、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ謂ク、昔シ四百十八年ノ前キ、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ兩人結制ニ預リキ。則チ新戒ニ列ネシカドモ、從テ諍ス。今汝獨リ何ゾシカルヤト有ケレバ、衆議紛然トシテ果ス處ナシ。</p>	<p>然レトモ外國ノ人ナルヲ以テ、新戒ノ位ニ列ヌ。師曰ク、夫夏ノ臘ワ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルヲ斯レニ縁ラズト云フナシ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ。先受戒ノ者ワ前ニ在テ坐シ、後受戒ワ次第ニシテ坐スト説ケリ。又法華經ニワ、今此三界ワ皆是我有ナリ。其中ノ衆生悉ク是吾子ナリト説ケリ。豈貴賤老少ヲ擇ンヤ。且此土他土ヲ論センヤト。證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ曰ヘラク、昔シ四百十八年ノ前、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、汝國空海最澄ノ二人來テ、結制ニ預リキ。乃チ新戒ニ列子シカモ、從テ諍ハズ。今汝獨リ何ゾシカルヤト有ケレバ、衆議紛然トシテ果ス所ナシ。</p>

悪僧四人の企
み
賀明侍者の親
切

<p>掌簿判官出現 時ニ明侍者ハ其性朴直ニシテ、禪律並ヒ無キ、道心親キ人ナルガ、師ノ法器ヲ重敬シ、語ルニ厭ヌ法ノ道、兼テ日本ノ珍シキ神事人事ヲ聞ントテ、夜坐ノ開靜已ニ過キ、銷香火燭ノ鈴ノ後、師ノ宿寮ニ忍</p>	<p>剩エ會中ニ鎮頭、南海、故笞、北竜トテ四人ノ悪僧在リ。八百余輩ノ徒黨ヲ組テ議リケルハ、日本ノ沙弥希玄コソ身ノ程知ラヌ奢物、サスガ大國ノ名師諸山ノ大徳ヲモ不レ畏、蛙ノ口ヲ開テ梵網法花ヲ引来リ、鼻孔ヲ揚ル事イト悪キ曲セ者ナリ。如何ハセント云ケル中ニ、鎮頭ガ云様ハ、賀明侍者此頃見ルニ、希玄ト友トシ好ク、夜々且過寮ニ往通イ、何ヤラン私語不審シ、吾等トハ疎遠ニシテ、他國ノ沙弥ト親キコト、定テ吾等ヲ誹謗スルト覺エタリ。キヤツ憎キワザナレバ、今夜吾一人路傍ニ待伏シテ、頭拈切テ捨テ、其後希玄目ヲモシマワント云ハ、餘ノ諸々ノ悪僧共、適レ可ト同心ス。邪ニ依テ悪ヲ逐、ヲソロシキ者共ナリ。</p>	<p>剩エ會中ニ鎮頭、南海、胡舌、北竜トテ、四人ノ悪僧アリ。八百余輩ト徒黨ヲ組ミテ議ケルハ、日本ノ沙彌希玄コソ身ノ程知ラヌ奢リ者、サスガ大國ノ名師諸山大徳ヲモ不レ畏、蛙ノ口ヲ開テ梵網法花ヲ引キ来リ、鼻孔ヲ揚ル事專ト曲者ナリ。如何ハセント云ケル中ニ、鎮頭ガ云ヤウハ、賀明侍者ハ此項見ルニ、希玄ト友イ好ク、夜々且過寮ニ往キ通イ、何ニヤラン私語不審、吾等トハ疎縁ニシテ、他ノ沙彌ト親シキ事、定テ吾等ヲ誹謗スルト覺タリ。奴憎ワザナレバ、今夜吾一人路傍ニ待伏シテ、頭拈切テ捨テ、其後希玄ヲシマハント云エバ、悪僧共、聞テ適レヨシト同心シテ、邪ニ依テ悪ヲ逐、ヲソロシキ者共ナリ。</p>	<p>剩エ會中ニ鎮頭、南海、胡舌、北竜トテ、四人ノ悪僧在リ。八百餘輩ノ徒黨ヲ組テ計リケルハ、日本ノ沙彌希玄コソ身ノ程知ラヌ奢物、サスガ大國ノ名師諸山之大徳ヲ不レ畏、蛙ノ口ヲ開テ梵網法華ヲ引キ来リ、鼻孔ヲ揚ル事イト悪キ曲者也。如何ハセント云ケル中ニ、鎮頭ガ云様ハ、賀明侍者此頃見ルニ、希玄ト友トシテ好ク、夜夜且過寮ニ往キ通イ、何ニヤラン私語不審、吾等トハ疎遠ニシテ、他ノ沙彌ト新キ事、定テ吾等ヲ誹謗スルト覺エタリ。キヤツモ憎キワザナレバ、今夜吾一人路傍ニ待伏セシ、頭拈切テ捨テ、其後希玄目ヲシマワント云エバ、餘ノ諸々ノ悪僧共、是ヲ聞テ適レヨシト同心ス。邪ニ依テ悪ヲ逐、ヲソロシキ者共也。</p>	<p>剩サヘ會中ニ鎮頭、南海、胡舌、北龍トテ四人ノ悪僧アリ。八百余輩ト徒黨ヲ組テ議ケルハ、日本ノ少沙弥希玄コソ身ノ程知ラヌ奢物、サスガ大國ノ名師諸山大徳ヲモ不レ畏、蛙ノ口ヲ開テ梵網法華ヲ引来リ、鼻孔ヲ揚ルコトイト悪キ曲者也。如何ワセント云ケル処ニ、鎮頭ガ云様ワ、賀明侍者、此頃見ニ、希玄ト友トシ好ク、夜々且過寮ニ往通、何ヤラン私語不審、吾等トワ疎遠ニシテ、他ノ沙弥ト親キコト、定テ吾等ヲ誹謗スルト覺ヘタリ。キヤツ憎キワザナレバ、今夜吾一人路傍ニ待伏シテ、頸拈切テ捨ン。其后希玄目ヲシマワント云ヘバ、余ノ諸ノ悪僧トモ、聞テ適レ可ト同心ス。邪ニ依テ悪ヲ逐ブ、ヲソロシキ者共ナリ。</p>
---	--	--	--	---

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>行處ヲ、鎮頭傍ヨリ突ト出テ、侍者ヲ拈ンデトウト投、汝ハ是破和合ノ僧、何ゾ小國ノ沙彌ト昵近ニシテ、大國ノ大徳ヲ輕忽ス。思知セントテ押ヘテ頸ヲ拈切ントセシ処エ、身ノ尺一丈計リナル甲冑ヲ着ケル人、忽然ト見レバ、鎮ガ頭ヲ拈拈ミ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺サントヤ。汝ハ五逆ノ無間罪、賞罰見ヨト伝俣ニ、千尋餘ル谷底エ飛礫ノ如クナゲラレテ、微庄ト作りテ失タリケリ。</p>	<p>師ノ宿寮ニ忍ビ行ク処ニ、鎮頭傍ヲヨリ突ト出テ、侍者ヲ拈デドウト投、汝ハ是レ和合僧ヲ破リ、何ソ小國ノ沙彌ト昵近シテ、大國ノ大徳ヲ輕忽ス。思ヒシラセントテ押テ頸ヲ切ラントセシ処ニ、身ノ長ケ一丈計ノ甲冑着タル人、忽然トノ現レ、鎮頭拈拈ンテ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ハ五逆無間ノ罪ミ、賞罰見ヨト曰俣ニ、千丈ニ餘ル谷底ヘ飛礫ノ如クナゲウタル。微塵ト作テ失ニケル。</p>	<p>忍ビ行ク處ヲ、鎮頭傍ヨリ突ト出デ、侍者ヲ拈デドウト投、汝ハ是破和合ノ僧、何ゾ小國ノ沙彌ト昵ニシテ、大國ノ大徳ヲ輕忽スヤ。思シラセントテ押ヘテ頸拈切ントセシ處エ、身ノ尺一丈計リナル甲冑ヲ著ケル人、忽然トアラハレテ、鎮ガ頭ヲ拈拈ミ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ハ五逆ノ無間ノ罪、賞罰見ヨト云儘ニ、千尋ニ餘ル谷底ヘ飛礫ノ如クナゲラレテ、微塵トナリテ失タリケリ。</p>	<p>ノ宿寮ニ忍行処ニ、鎮頭傍ヨリヲドリ出テ、侍者ヲ拈テドウト投、汝ワ是破和合僧、何ゾ小國ノ沙彌ト昵懇シテ、太國ノ大徳ヲ輕忽スル。汝思イシラセントテ、押テ首ヲ拈切ラントセシ処ヘ、身ノ長一丈計ナル甲冑着タル人、忽然トノ見レ出、鎮頭ヲ拈拈ミ、汝ラコソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ワ五逆無間ノ罪賞罰見ヨト云フ俣ニ、千尋ニ餘ル谷ニ底ヘ飛礫ノ如クナゲウタル、微塵ト作テ失セタリケル。</p>
<p>時ニ明侍者辛キ命ヲ拾ヒ得テ、異人ニ向云、如何ナル御方ニテ我ヲ助ケ玉フゾ。異人ノ云エラク、吾ハ是此山ノ護法神、名ハ掌簿伝者ナリ。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。賀明ノ心善ニ、法ヲ荷負スルカラアリ。玄公ハ至人ナリ。務那懈タルヲ莫レト云テ、忽チ蹤ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、増々精進勇猛ニシテ、遂ニ此事發明シ、永ク出世ヲ棄却</p>	<p>中ニ侍者辛キ命ヲ得テ、異人ニ問テ曰ク、如何ナル御方ニテ我レヲ扶ケ玉フゾ。異人ノ曰ヘラク、吾レハ是レ此ノ山護法神、名掌簿ト曰者ナリ。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰スル。明ノ心口善ニシテ大法荷負スルノカラアリ。玄公ハ至人ナリ。務ヨヤ懈タルゾト曰ツテ、忽チ跡ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、マシテ精進勇猛シテ、遂ニ此ノ事ヲ發明シ、永ク</p>	<p>時ニ辛キ命ヲ拾得タリト、明侍者異人ニ問テ曰、如何ナル御方ニテ我ヲ助ケ玉フゾ。異人ノ云エラク、吾ハ是レ此山ノ護法神、名ハ掌簿ト云者也。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。明ノ心善ニシテ法ヲ荷負スル力有リ。玄公ハ至人ナリ。務耶ヤ懈タル事莫レトテ、忽チ蹤ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、増々精進勇猛ニシ、遂ニ此事ヲ發明シ、永ク出世ヲ棄卻シ</p>	<p>時ニ賀明辛キ命ヲ拾ヒ得テ、異人ニ問テ云ク、如何ナル御方ニテ我ヲ扶ケ玉フゾ。異人答テ云ヘラク、吾ワ是此山ノ守護神、名ワ掌簿ト云。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。賀明汝心善法ヲ荷負スル力アリ。希玄ワ至人ナリ。務耶懈ソト云テ、忽チニ跡ヲ潛セリ。侍者愈々感嘆シ玉イテ、イヨク精進勇猛ニテ、遂ニ此ノ事ヲ發明シ、永ク出世ヲ棄却</p>

実道の至人賀明

悪僧の思念

<p>シテ、古人ノ跡ヲ学ヒ、深山ノ奥ニ柴庵ヲ結ヒ、影ヲモ移サテ果サレケリ。是実道ノ至人、参学ノ棟梁ナル皆人カクアリナバ、天神ノ擁護ナト力無ラサラン。慎ムヘキ事トモナリ。</p>	<p>永平開山禪師行狀傳聞記卷之上終</p>	<p>出世ヲ棄却シテ、太梅禪師ノ跡ヲ学ビ、深山ノ奥柴ノ菴ニ影ヲモ移サテ杲ラレケルト也</p>	<p>勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚之行狀傳聞記下</p>
<p>八、悪僧共神天之罰ヲ蒙ル事 其時南海北竜等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズトテ、手分ニ成テ尋シガ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナワセケル。ト者占テ云ク、此僧高ヨリ深キニ身ヲ抛ウタレテ死ス。是荒フル神ノワザト見エ、亦人ノ業ト見エタリ。但シ屍子ハアレト千尋ノ底深ニ有リテ、得難ト云ケル。悪僧共聽テ有徳ノ衲子トシテ、我等ガ依怙タルニ、靈神争カ守ラスシテ、佳人ヲ失ヒケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、却テ善事トヤ思ケン。横ニ佛院神祇ヲ怨ミ非事、</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之下</p>	<p>八ニハ悪僧共神天之罰ヲ蒙ル事 其ノ時、南海胡舌北竜等ノ三人相傍テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズ。手分ニ作テ尋シガ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナハセケル。博士占テ曰ク、此ノ僧高キヨリ深キニ身ヲ抛レテ死ス。是レ暴破神ノワサトモ見エ、亦人ノワザトモ見ヘタリ。但シ屍ハ有リト千尋ノ底深キニ在、得ガタシトゾ云ケリ。悪僧共聽テ哀哉、有徳ノ衲子トシテ我等ガ依怙タルニ、靈神争カモラズシテ、佳人ヲ失ナイケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、返テ横ニ仏陀神祇</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之上終</p>
<p>テ、大梅ノ跡ヲ學ビ、深山ノ奥ニ柴庵ヲムスビ、影ヲモ移サデ果サレケリ。是レ實道ノ至人、參學ノ棟梁ナル物乎。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之上終</p>	<p>八 悪僧共神天之罪ヲ蒙ル事 其時、南海北龍等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズ。手分ニ成テ尋シカ共、見エザレバ、遂ニ博士ヲ喚占ナハセケル。ト者占テ曰、此僧高ヨリ深ニ身ヲ抛ウタレテ死ス。是荒ブル神ノワザトモ見ユル。亦ハ人ノ業トモ見エタリ。但シ屍ハ有レドモ千尋ノ底深キニ有リテ、難レ得ト云フ。悪僧共聞テ有徳ノ衲子トシテ我等ガ依怙タルニ、靈神争カ守ラズシテ、佳人ヲ失ヒケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、却テ善事トヤ思イケン。横ニ佛院神祇ヲ怨ミ悲</p>	<p>永平道元禪師之行狀傳聞記卷下</p>
<p>シテ、太梅ノ跡ヲ学ヒ、深山ノ奥ニ柴ノ菴ニ、影ヲモ移サデ果サレケルトナリ。</p>	<p>永平道元禪師之行狀傳聞記卷下</p>	<p>其時、南海北龍等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭カ行方知レズ。手分ニ作テ尋シカ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナワセケル。ト者占テ云ク、僧ニノ高キヨリ深キニ身ヲ抛レテ死ス。是荒キ神ノワザトモ見ヘ、亦ワ人業ト見ヘタリ。但シ屍ヲ有ト雖ト、千尋ノ底深キニ有テ、得難シトゾ云ケリ。悪僧共聽テ哀哉、有徳ノ衲子トシテ我ラカ依怙タルニ、靈神争カモラズシテ、佳人ヲ失ヒ玉フトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、カヘリミズ、横ニ佛陀神明ヲ怨</p>	<p>尾</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>野哉無道自尿臭ヲ知ラヌトハ、彼等カ事ナリ。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ヲ怨ミ悲シム事、野哉無道自尿ノ臭キ事ヲ知ラズトハ、彼等カ事トモナリ。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ム事、野哉無道自尿臭ヲ知ラヌトハ、彼等カ事也。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>ミ悲ムルコト、野哉無道ノ自尿臭コトヲ知ズトワ、彼等カ事ゾカシ。</p>
<p>爰ニ海龍兩人ガ云イケルハ、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ス、人ノ業トハ云中タリ。思ニ是ハ侍者ト希玄トカ仕業ト覚エタリ。何者鎮頭ガ路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺サントセシ處エ、希玄目ガ出合、二人ニテ千丈ガ嶽ヨリ放逐セラレテ、深谷ニ投ジテ死ヌナラン。嗟鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵セル者無リシニ、何トノ殺ナラヌ奴等ニ殺サレケリ。口惜ヤ、向ノ敵ヲ取ラテ安クヨクヘキヤ。聞ハ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リテ坐禪スト。先往テ彼ヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣ノ惡僧共三十余人ヲスグツテ、南海北竜胡管三人大將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。オロカナ天罰ヲ招キ難義ニ遇ン。</p>	<p>爰ニ海竜ガ云ク、博士ノ語ヲ按ズルニ、神ワザトハ心得ヘズ、人ノワザトハ云當タリ。思ニ是レハ侍者ト希玄トガ仕業ト覚エタリ。何者鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺ントセシ処ヘ、希玄目ガ出合セ、二人ニテ千丈ガ嶽エ放墜セリ。深谷ニ投ジテ死ヌナラヌ。嗟々鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵スル者ナカリシニ、何ニトテ敵ナラヌ奴等ニ殺サレケル。口惜シキ事カナ。敵ヲ取ラテ安ベキカ。聞ケバ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リ坐禪スト。往テ彼レヲ岩下ニ墜殺ント。其ノ後侍者ヲ殺ント相定、壯年血氣ノ惡僧トモ三十余人ヲスグツテ、南海北竜胡舌三人太將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。ヲロカナナルカナ又天罰ヲ招クベシ。</p>	<p>爰ニ海龍兩人ガ云イケルハ、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ズ、人ノ業トハ云中テタリ。思ニ是ハ侍者ト希玄トガ仕業ト覺タリ。何トナレバ鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺サントセシ處エ、希玄目ガ出合セ、二人ニテ千丈嶽ヨリ放墜セラレ、深谷ニ投ジテ死ヌナラン。嗟鎮頭ハ無雙ノ強力有テ敵セル者無リシニ、何トシテ數ナラヌ奴等ニ殺サレタルヤ、口惜シヤ、向ノ敵ヲ取テ安クオク可キヤ。聞バ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リテ坐禪スト。先往テ彼ヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣ノ惡僧共三十餘人ヲスグツテ、南海北龍胡舌三人大將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。オロカナナルカナ天罰ヲ招キ難ニ遇ン。</p>	<p>爰海龍二人カ云ク、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ズ、人ノ業カト云中レリ。思ニ是ワ侍者ト希玄トカ仕業ト覚ヘタリ。何者鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺ントセシ処ヘ、希玄目カ出合セ、二人シテ千丈カ嶽ヨリ放墜セラレ、深谷ニ投ジテ死スルナラン。嗟鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵スル者ナカリキニ、何トシテ數ナラヌ奴等ニ殺ケル、口惜キ事カナ。敵ヲ取イデ安ベキヤ。聞バ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リ坐禪スト云。先往テキヤツメヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣惡僧トモ三十余人ヲスグツテ、手合云合、南海北龍胡舌三太將ニテ、今夜子ノ刻ゾヨシトシ合セタリ。ヲロカナナルカナ亦天罰ヲ招クヘシ。</p>

高充の活躍

高充の忠義心

<p>先表カヤ時ニ高充ハ単過ニ独リ窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人モ知レズ、一兩人窓ノ外ヲ語り通りケルハ、傷シヤ日本ノ僧希玄コソ、今夜夜半ニ至テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラレント社イト悲キワザナリト。高充聞テ愕キ、窓ノ外見ルニ、人見エズ。是ハ神天ノ告玉フカ。若シ由断ノ師ヲ失イマイラセバ、吾独リ何ノ面白在テ本郷ニ還ンヤ。設イ吾身ヲ失フモ、師ノ寶命ヲ全ノ飯朝マシマサバ、實ニ僕力草下ノ本懐ト、思フ意ゾ頼母シケレ。</p>	<p>時ニ高充ハ旦過ニ孤窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人トモ知レズ、一兩人窓外ヲ語り通りゲクハ、傷シヤ日本ノ僧希玄、此夜夜中ニ到テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラレヌ社ソ取悲キワザナリト。高充聞キテ愕キ、窓外ヲ見ルニ、人見エズ。是レハ神天ノ告玉フカ。若油断シテ師ヲ失ヒ奉テ、吾レ獨リ何ノ面目アリテ本郷へ還ランヤ。設ヒ吾身ハ失ナウトモ、師ノ寶命ヲ全フシテ、飯朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母シキナリ。</p>	<p>先表ニヤ高充ハ旦過ニ獨リ窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人トモ知レズ、兩人窓外ヲ語り通りケルハ、傷マシヤ日本ノ僧希玄、今夜夜半ニ至テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜サレム社イト悲シヤワザナリト。高充聞テ驚キ、窗外見ルニ、人見エズ。是ハ神天ノ告玉フカ。若シ油断シテ師ヲ失ヒマイラセテハ、吾獨リ何ノ面目在テ本郷ニ還ンヤ。設イ吾身ハ失フトモ、師ノ寶命全フシテ、歸朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母シケレ。</p>	<p>時ニ高充ワ旦過寮ニ孤リ窓ニ對シテ徒然夕陽ニ、何人トモ知レズ。窓外ヲ通りツ、傷シヤ日本ノ僧希玄、此夜夜ノ中ニ到テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラル、ハズ社イト悲キワザナリト。高充聞テ大ニ愕キ、窓外ヲ見レバ、人ミエズ、是社神天ノ告玉フ処ナリ。若油断シテ師ヲ失ヒマイラセバ、吾獨何ノ面目ニ本郷ニ還ンヤ。設ヘ吾身ハ失ウモ、師ノ寶命全フシテ、飯朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母布キ。</p>
<p>高充時分ヲ考へ、則チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横エ、惡僧ニ先達テ峯ニ登リテ、師エ此ト訴エケル。師咲テ言ク、意ナリ高充殺サバ殺サルベシ。他ナ殺シゾ。身世元來限り有リ。死活明ムベシ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、亦定坐マシマセリ。高充心ニ咲メ云、至哉大丈夫、八風吹ヒ不動トワ我師ノ事ナルト、師ヲ覆護スルノ志弥々止テヤマザレス。師ヲ去ルコト七八丁、岩坂ニ一圍半計リナル松ノ屈</p>	<p>高充時分ヲ考へ、乃チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横へ、惡僧共ニ先達テ峰ニ登リテ、師ヘカクト訴ヘケル。師笑テ言ク、意ナリ高充殺サルベキ人ナ殺シゾ。身世限りアリ。死活明ムベシ。善惡總而宿ニ定ルゾトテ、又夕定坐マシマセバ、高充心ニ嘆メ至レル哉大丈夫、風吹トモ不動トハ我師ノ事ナリト。師ヲ覆護スルノ志シ弥々マス。師ヲ去ルコト七八町、岩城ノ嶮路ノ下ヲ見レバ、四五丈斗谷川</p>	<p>高充時分ヲ考エ、則チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横エ、惡僧共ニ前キ達テ峯ニ登リテ、師エ角ト訴ケル。師咲テ言ク、意也高充殺サバ殺サルベシ。人ナ殺シゾ。身世元來限り在リ。死活明ム可シ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、又定坐マシマセリ。高充心ニ嘆テ云、至哉大丈夫、八風吹ドモ不動トハ我師ノ事也ト。師ヲ覆護スルノ志シ彌々メテヤマザレバ、師ヲ去コト七八丁、巖坂ニ一圍半計リナル松ノ屈</p>	<p>高充時分ヲ考へ、乃チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横へ、惡僧共ニ前立テ峯ニ登リ、師ニ見ヘカクト訴ケル。師笑テ言ク、意ナリ高充殺サバ殺サルベシ。他ナ殺シメ。身世限りアリ。死活明ムベシ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、亦定坐マシマセリ。高充心ニ嘆スラク、至哉大丈夫、八風吹トヒ不動トワ、我師ノ御事力ナト、師ヲ覆護スルノ志シイヨク切ナリ。師ヲサル事七八町、岩坂ノ嶮路ノ下ヲ見レ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>曲ト横ニナリ出、嶮路ヲ覆テ有リケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ヒ、松ヲ取テ推シタワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト俟ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見、狹路ニアルハ何者ゾ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕ナリ。聞ケハ実ニ悪僧等、吾師ヲ害セン為中峯エ登ト聞ク故ニ、爰ニ防ク。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソワ修スヘケレ。不善事ヲ何事ゾ。夜更ニ爰ニ来レルハ、悪僧達ト覺エタレ。通サジト訝カレバ、南海聞テ打晒イ、イワレヌ僕ガ口ヲテカナ、利アレバ行ズ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルヘケンヤ。先ツ汝ヲモ退スマシ。胡管掛レ伝ケレバ、高充手ヲ懷ロニ云、珍シキ菩薩戒。吾ハ無戒ノ者ナレバ、僧ニ敵スルノ心無シ。身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究ヤ南海ト北竜胡管三人ガ、唯倒レ木ト心得テ、ノサノサト踏著ケ踏著ケ高充ヲ抓拈テ巖下ニ墜殺セントセシ処ヲ、高充ソツト身ヲ引ハ、三人ノ</p>	<p>ノ水深ク見ヘケリ。岩坂ニ一圍半計リナル松ノ屈曲ト、横ニ成出テ、嶮路ヲ覆テアルケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ビ、松ヲ取テ推シタワメ、腰ヲ打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シ待ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見テ、狹路ニアルハ何者ゾヤ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕ナリ。聞ケバ實乎悪僧達、吾師ヲ害セン為メ、中峯ヘ登ルト故ニ、爰ニ防ク。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベキニ、不善事何ニ事ゾ。夜深テ来ルハ悪僧達ト覺タリ。コ、通サジト訝レバ、南海聞テ打晒イ、イハレヌ僕ガ口チ立哉、利アレバ行ズ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルベケンヤ。先ズ汝ヲ退スマシ。胡舌掛レト云ケレバ、高充手ヲ懷ニシテ曰ク、珍布菩薩戒、吾レハ無戒俗ナレバ、僧ニ敵スル心ナシ。身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究メヤ南海北竜胡舌三人ガ、此ノ松ヲ唯倒レ木ト心得ヘテ、ノサノサト踏著々々高充ヲ</p>	<p>曲ト横ニ成リ出デ、嶮路ヲ覆テ有リケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ビ、松ヲ取テ推シタワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト待ケル處ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見テ、狹路ニアルハ何者ゾ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕也。聞ハ實トヤ悪僧共、吾師ヲ害セン爲、中峯エ登ト聞ク故ニ、爰ニ吾ヲ待居タリ。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベケレ。不善事ハ何事ゾ。夜深ケテ爰ニ来レルハ、悪僧達ト覺エタリ。通サジト社訝カレバ、南海聞テ打笑イ、キワレヌ僕ガ口ヲテ乎。利アレバ行ヌ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルベケンヤ。先汝ヲ退スマジ。胡舌掛レト云ケレバ、高充手ヲ懷ニシテ云、珍シキ菩薩戒、吾ハ無戒ノ俗ナレド、僧ニ敵スル心ナシ。身ヲ方々ニ任ズルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究ヤ南海ト、北龍、胡舌三人ガ、此松ヲ唯倒木ト心得テ、ノサノサト踏ミ付ケケ、高充ヲ抓拈テ巖下ニ墜落サントセシ處</p>	<p>バ、四五十丈ノ深谷、タニ川水深ク見ヘケリ。亦岩坂ニ一圍半計ナル松ノ屈曲ト、横ニ成出嶮路ヲ覆テ有ケルヲ、高充見テ是適レ好ト獨笑。松ヲ取テ推タワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト待ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキヨジ登リ、高充ヲキツト見テ、狹路ニアルワ何者ゾ。高充答テ、吾ヲ日本ノ僕ナリ。聞バ實乎悪僧タチ、吾師ヲ害セン為、中峯ヘ登ルト聞故ニ、爰ニ防ク。僧ヲ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベキニ、不善事ワ何コトゾ。夜深テ爰ニ来レルワ、悪僧等ト覺タリ。透サジト訝レバ、南海聞テ打晒ヒ、井ワレヌ僕ガ口立カナ。利有レバ行ズ菩薩戒、汝俗体ノシルベケンヤ。先汝ヲ退スマジ。胡舌カ、レト云ケレバ、高充手ヲフトコロニシテ曰、珍布キ菩薩戒、吾ワ無戒ノ俗ナレド、僧ニ敵スルナシ、身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ窮ヤ南海ト北龍胡舌三人ガ、此ノ松唯倒木ト心得テ、ノサノサト踏</p>

高充の独語

悪僧天罰を蒙
むる

<p>悪僧共松ニクワツトハ子揚ラレ、梢ヲ捉ル間モナク、岩下ニトウト墜落シ、流レケワシキ谷川ノ底ノミクズト成リニケリ。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇リ、山鳴、亦谷響、光リ物処々飛ヒ、其気色寒ク、残ル悪僧共コハケシカラヌ。畏ロシヤ是山神ノ尤ナリトテ、振イヲノ、キ逃ケルカ、暗夜ノ山路見エ難ク、岩下ニ轉墜スルモ有リ。或ハ此ニ逃ハツシ、坂路ニ絶エ入ルモアリ。恙カナク山下ニ走セ付タルワ、漸ク四五箇計ト聞エケリ。</p>	<p>于時高充独リ語ニ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此受ク。吾ヲ怨ルモ莫レト云テ、師ニ善惡ヲ奏シ、御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念トシ律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息シ玉エリ。</p>
<p>抓搦ンセシ処ヲ、高充ソツト身ヲ引ハ、三人ノ悪僧共松ニクハツトハ子アゲラレ、梢ヲ捉間ナク、岩下ニドウト墜落シ、流レケハシキ谷川ノ底ノミクズト成リニケル。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇、山鳴、又タ谷響、光物ニテ、其ノ氣色寒ク、残ル悪僧共コハケシカラズ、畏シヤ是レ山神ノ尤ナリトテ、振イヲノ、キ逃ケルガ、暗夜ノ山路見エカ子テ、岩下ニ轉墜スルモアリ。或ハ此ニ逃ゲハツミ、坂路ニ絶入スルモアリ。恙ナク山下ニ走ツキタルハ、四五箇計リト見エニケリ。</p>	<p>時ニ高充獨語ニハ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ受ル事、我ヲ怨ル事勿レト云リ。師恙ナク、高充伴ニテ、京師傍ニ覺念ト云エル律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息マシマスナリ。</p>
<p>ヲ、高充ソツト身ヲ引バ、三人ノ悪僧共松ニクワツトハネアゲラレ、梢捉ウル間モ無ク、巖下ニドウト墜落シ、流レキビシキ谷川ノ底ノミクヅト成ニケリ。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇リ、山鳴リ、又谷響キ、光リ物ノ處々ニ飛ビ、其氣色冷シク、殘ル悪僧共是ハケシカラヌ。恐シヤ是山神ノ咎也トテ、振イオノノキ逃ケルガ、暗夜ノ山路見ヘ難ク、巖下ニ轉墜スルモ在リ。或ハココニ逃ハツミ、坂路ニ絶エ入ル者モ有リ。恙ガナク山下ニニゲ付キタルハ、四五箇計ト聞エケリ。</p>	<p>時ニ高充獨語ニ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノハチカクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此受ク。我ヲ恐ル事莫レト云テ、師ニ善惡ヲ奏シ、御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念ト云シ律僧ノ艸庵ニ到テ、暫ク休息シ玉ヘリ。</p>
<p>着々高充ヤラジト抓搦、岩下ヘ墜殺セントセシ所ヲ、高充ソツト身ヲ引バ、三人ノ悪僧共、松ニクワトハ子アケラレ、梢ヲ捉間モナク、岩谷深墜落シ、流ケワシキ谷川ノ底ノミクズト成ニケル。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇山鳴谷響ク電光ソマロニテ、其氣色ズサマシ、殘ル悪僧共コワケシカラヌ。畏シヤ是山神ノ咎ナリトテ、フルイヲノ、キ逃ケルガ、暗夜ノ山路見ヘサレバ、岩下ニ轉墜スルモアリ。トシヲイアワテ大クズレ、或ワ此ニ逃ハツミ、坂路ニ絶入スルモアリ。アワレニモ亦シヤフシナリ。恙ナク山下ニ走着タルワ、四五箇計ト聞ヘケル。</p>	<p>于時高充獨リ語、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此ウク。我ヲ怨ルコトナカレト云ヘリ。師恙ナク、高充御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念ト云シ律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息マシマシケリ。</p>

「上表」

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>九、師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル 事並ニ亡靈救玉フ事</p> <p>此ノ律僧、師ノ凡相ナラス路體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限り無く、慇懃ニ恭慕シ饗應シ奉ル。于茲於テ、表ヲ上帝ニ来シテ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九ニハ師戒臘ヲ質了如淨禪師ニ依リ玉フ事并ニ亡靈ヲ救玉フ</p> <p>此ノ覺念律僧、師ノ凡相ナラズ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限りナク、慇懃ニ敬慕シ饗應シ奉ル。師コ、ニツイテ表ヲ上帝ニ奉リ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九 師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル 事并亡靈救玉フ事</p> <p>此律僧、師ノ凡相ナラヌ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限りナク、慇懃ニ恭慕シ饗應シ奉ル。師于茲於テ、表ヲ上帝ニ奉ジテ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九、師臘ヲ質了テ如淨ニ依セ玉フ并亡靈ヲ救玉事</p> <p>此律僧ワ、師凡相ナラズ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡カギリナク、慇懃ニ敬慕シ饗應シ奉ル。師于茲ヲヒテ、表ヲ上帝ニ奉シテ、具ニ奏達セリ。</p>
<p>戒臘遵守の勅 裁下る</p> <p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧ノ言處、仏制ヲ曲ケズ。宋土ノ釈氏何ゾ非例ヲ不改シテ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスルカ。殊ニ天童欽山寺等ハ天下ノ選仏場トシテ、正邪ヲ定ルノ本ナリ。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位具セシム可シ。亦會裏ノ愚僧共、和國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ト風ニ聞エアリ。是亦獅子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯セバ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。倫言四海ニ響テ、景德ハ云ニ不レ及、天ノ叢下一時ニ不法ヲ改メテ、僧臘速ニ正クナリ、茲ヨリ師ノ英声雄名宋土ニ蕩々タル事ヲ得</p>	<p>上帝乃叡感不淺。遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧ノ所レ言、佛制ヲ曲ス、宋土ノ釋氏何ソ悲例ヲ不改メ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスル歟。殊ニ天童欽山等ハ天下ノ選佛場トシテ、邪正ヲ定ルノ本ナリ。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。又會裏ノ愚僧共、倭國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ルト風ニ聞ヘ在リ。是又獅子身中ノ蟲レハ亦タ獅子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯セバ刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。論言四海ニ響テ、景德寺ハ云ニ及バス、天下ニテノ叢林一時ニ不法ヲ改テ、僧臘速ニ正クナリ、又是ヨリ師声名宋土ニ</p>	<p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧言處、佛制曲ケズ、宋土ノ釋氏何ゾ非例ヲ不改シテ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスルカ。殊ニ天童徑山等ハ天下選佛場トシテ、正邪ヲ定ムルノ本也。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。亦會裏ノ愚僧共、倭國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ルト風ニ聞ヘ在リ。是又獅子身中ノ蟲也。重テ彼ヲ毀犯セバ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命也。倫言四海ニ響キテ、景德ハ云ニ不レ及、天下ノ叢下一時ニ不法ヲ改テ、僧臘速ニ正ク成リ、是ヨリ師ノ雄名宋土ニ蕩々タルコトヲエタリ。</p>	<p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧所レ言佛制ヲ曲ズ、宋土ノ釈氏何ゾ非例ヲ不改シテ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスル歟。殊ニ天童欽山寺ハ天下ノ選佛場トシテ、正邪ヲ定ルノ本也。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。亦裏ノ愚僧共、倭僧ヲ誹毀シ、或ワ掠奪ルト風相聞ヘアリ。是又師子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯ノ輩ワ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。論言四海ニ響テ、景德ワ云ニ不レ及、天下叢林一時ニ不法ヲ改メテ、僧臘速ニ正クナリ、又茲ヨリ師ノ声名宋土ニ蕩々タルコトヲ得タリ。</p>

諸方参学（徑山・小翠巖等）	幾クナラサルニ、徑山ニ詣テ琰浙翁ヲ礼シ、天台ノ小翠巖ニ登テ卓公ニ見エ、尚ヲ惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸耆老ニ參テ、問答機縁ニ至ル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者無リキ。	タリ。	幾バクナラザルニ、徑山ニ詣シテ琰浙翁ヲ禮シ、天台ノ少翠巖ニ登テ卓公ニ見ヘ、尚惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸大老ニ參ジテ、問答機縁ニイタル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其ノ鋒キニ當ル社ナカリキ。	蕩々タリ。	幾バクナラザルニ、徑山ニ到テ浙翁ヲ禮シ、天台ノ小翠巖ニ到リ、尚ヲ惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸耆老ニ參テ、問答機縁ニ至ル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者ナカリキ。	幾ナラザルニ、徑山ニ詣テ琰浙翁ヲ禮シ、天台ノ小翠巖ニ登リ、卓公ニ見ヘ、尚惟一、宗月、*○月堂、無象等ノ諸大老參ジテ、問答機縁ニイタル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者ナカリキ。 *○印、上欄に「落字下見不知」とある。
老礎、如浄への参問を指示	サルニ因テ宋土扶桑、吾ニ勝レル者ナシト、大我謾ヲ発シ既ニ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云者アリ。師ニ語テ曰、子既ニ叢林ニ遍參シ、普ク名宿ニ參セル。然レハ天下第一ノ宗匠ハ、唯如浄一人ノミゾ。子往テ見エハ、正ニ処得アラント。	是ニ於テ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云ウモノアリ。師ニ語テ曰ク、子スデニ叢社ニ遍遊シテ、普ク名宿ニ參セリ。然レハ天下第一ノ宗匠ハ只タ如浄禪師一人ノミゾ。子往テ彼ニ見ヘハ、所得アラント。	是ニ於テ歸朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云者有リ。師ニ語テ曰、汝既ニ叢林ニ遍遊シテ、普ク名宿ニ參セルト雖モ、天下第一ノ宗匠ハ唯如浄一人ノミゾ、汝往テ彼ニ見エバ、所得在ント。	是ニ於テ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云フ者アリ。師ニ語テ云ク、子スデニ叢社ニ遍遊シテ、普ク名宿ニ參セリ。然レハ天下第一ノ宗匠ハ、只如浄一人ノミゾ。往テ彼ニ見ヘバ、所得アラント。		
○嘉定十七年如浄と初相見「身心脱落」師資相承	時ニ寧宗皇帝、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔シテ天童山ニ住セシム。師教ニ隨テ、疾ク錫ヲ振テ行テ、浄公ニ依レリ。是則嘉定十七年、師ノ御年二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニ當ル。浄公、師ヲ見テ、大ニ懼ヒ、甚タ是ヲ器量アル。時ニ丹知客怪ンテ是ヲ	時ニ寧宗、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔リシテ天童山ニ住セシム。師モ錫ヲ振テ往テ、浄公ニ依レリ。是レ嘉定十七年、師ノ御年二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニ當ル。浄公師ヲ一見シテ、大ニ歡ヒ、甚タ是ヲ器重アル。時ニ丹知客モ怪ンテ之ヲ問。浄公ノ	時ニ寧宗、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔シテ天童山ニ住セシム。師錫ヲ振テ行テ、浄公ニ依レリ。是嘉定十七年、師ノ御歳二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニ當ル。浄公師ヲ一見シテ、大ニ懼甚ダ是ヲ器重アル。時ニ、丹知客怪デ是ヲ問。浄公云ク、前夜洞山ノ	時ニ寧宗、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔シテ天童山ニ住セシム。師錫ヲ振テ行テ浄公ニ依レリ。是嘉定十七年、師ノ御歳二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニアタル。浄公師ヲ一見シメ、大ニ懼。甚タ是ヲ器重アリ。時ニ丹知客怪テ之ヲ問フ。浄公曰ク、		

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
<p>問。浄云云ク、前後洞山ノ悟本大師此ニ来ルト夢見タリ。此子恐ハ是洞山ノ後身ナルヘシ。向後正ニ大ニ吾宗ヲ弘ムベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ニ忘レ精行純一無雜ナリ。或時浄禪師、衆僧ノ坐睡ヲ責テ云ク、參禪ハ須ク身心脱落ナルヘシ。只管打睡ノ什麼ノ爲ス。師於レ此豁然トノ大悟アリ。猶服勤マシマス。四年ノ内、日々ニ智證ヲ増シ、尽ク其ノ蘊ヲ得タマエリ。</p> <p>○宝慶二年 太白山遊覽</p> <p>其後理宗ノ宝慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ四ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々ト龍テ松樹鬱密タリ。東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受常ニ暖ニシテ、青苔柔カニ坐褥ニ觸ルカ如ク、亦平堤タル清池アリ。鏡ノ如ク冷水甘美ニシテ、阿法師ガ車軸ノ水ニ似タリ。好景塵ノ世ヲ隔テ、サナカラ仙境カト怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ヘ忞皈ル事ヲ忘レ</p>	<p>曰ク、前夜洞山ノ悟本大師此ニ来タリ玉フト夢見タリ。此ノ子恐クハ是レ洞山ノ後身ナルベシ。向後マサニ大ニ吾宗ヲ弘ムベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ニワスレ、精行純一無雜ナリ。或時浄公衆僧ノ坐睡ヲ責テ曰ク、參禪ハ須ク身心脱落スベシ。只管打睡シテ什麼ノ爲メゾ。師於レ是豁然トノ大悟アリ。猶服勤マス。四歳ノ中、日日ニ智證ヲ増シ、盡ク其ノ蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其ノ後チ理宗ノ宝慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々トノ聳テ松樹鬱密タリ。東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受ケ常ニ暖カニシテ、青苔柔ニ坐褥ニ觸ガ如シ。清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似リ。好景塵世ヲ隔テ、サナガラ仙境カト怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ベドモ皈ル事ヲ忘</p>	<p>悟本大師此ニ来ルト夢見タリ。此子恐クハ洞山ノ後身成ルベシ。尙後正ニ大ニ吾宗ヲ弘ベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ニ忘レ、精行純一無雜也。或時浄禪師衆僧ノ坐睡ヲ責テ云、參禪ハ須ク身心脱落ナルベシ。只管打睡シテ什麼ノ爲ゾ。師於レ此豁然トシテ大悟アリ。ナラ服勤マシマス。四歳ノ中、日ニ智證ヲ増シ、盡ク其蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其後理宗ノ寶慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々ト聳テ松樹鬱密タリ、東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受ケ常ニ暖ニシテ、青苔柔カニ坐褥ニ觸ルガ如ク、清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似タリ。好景塵ノ世ヲ隔テ、サナガラ仙境カトゾ怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ベドモ歸ル事ヲ忘</p>	<p>前後ニ洞山ノ悟本大師、此ニ来リ玉フト夢見タリ。此ノ子恐クワ是レ洞山ノ後身ナルベシ。向後マサニ大ニ吾ガ宗ヲ弘ムベシト原合シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ワスレ、精行純一無雜ナリ。或時浄公衆僧ノ坐睡ヲ責テ曰、參禪ハ須ク身心脱落ナルベシ。只管打睡シテ什麼ノ爲ゾト。師於レ是豁然トシテ大悟アリ。猶服勤マス。四歳ノ中、日々ニ智證ヲ増シ、尽ク其ノ蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其ノ后、理宗ノ寶慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々トノ聳テ、暖カニシテ、青苔柔ニ坐褥ニ觸ル、ガ如ク、清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似タリ。好景塵世ヲ隔テ、サナガラ仙境カトゾ怪シマレケル。</p> <p>師スデニ夕陽ニ及ヒ忞皈ルコトヲ忘</p>

亡婦昇天（成仏）

<p>玉イ、遂ニ通夜苔ニ坐、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ静ニ、更ニ葉ヲ吹風モナク、心ヲ澄シ、寂々トシテ御座アル処ニ、二十余ノ婦人独リ忽然トノ見レ、其間息サモ苦シゲ二見エテ、師ニ近キ手ヲ合テイト幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠カラズノ住ケル李氏ガ婦ニテ有ケルカ、性トノ貪リ猶ヤフサカニ奴婢小婦ヲ憐レマス、日々ニ打罵罵シ、空ク駆使シテ、剩ヘ衣食ヲハキ、寒暑ニ恵ミ減リ、好天カ善事ヲ障拒、遂ニ三宝ニ皈投セズ。只貪リタクワエテ、千代ノ榮花ヲ計ル処ニ、天然ヲ終スノ五日以前ニ早ク死ス。今獄卒ノ手ニ懸リ、鉄湯銅炎ノ責メ、嗚呼如何カセン。上人利益ヲ賜トテ、忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯ビテ静ニ、更ニ葉ヲ吹風モナク、心ヲスマシ寂々トシテ御坐トコロニ、二十年餘リノ婦人獨忽然トノ現レ、其アエグ息サモ苦シゲニ見ヘテ、師ニ近キ手ヲ合セ取幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠カラテ住ケル李氏ノ婦ニテアリケルカ、性トシテ貪テ、猶ヤフサカニ奴婢小婢ヲ憐ス、日ニ打罵シ、空ク駆使テ、剩エ衣食ヲハブキ、寒暑ニ恵ヲ欠キ、好夫ガ善事ヲ障ヘ拒テ、遂ニ三宝ニ皈投セズ。只貪リタクハヘテ、千代ノ榮花ヲ計ルニ、天然ヲ終ヘズシテ五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ係、鉄湯銅炎ノ責、嗚如何セン。上人利益ヲ賜トテ、又タ忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ静ニ、更ニ葉ヲ吹風無ク、心ヲ清シ、寂々トシテ御坐處ニ、廿歳餘ノ婦人獨リ忽然トシテ見レ、其間苦ゲニ息ヲツキテ師ニ視エ、手ヲ合セテイト幽ナル聲ニテ、妾ハ元ト此山ノフモト遠カラズシテ住ミケル李氏ノ婦ニテ有ケルガ、性トシテ貪リ、猶ヤブサカニ奴婢小婦ヲ憐レマス、日ニ打罵シ、空シク駆使テ、剩エ衣食ヲバハギ、寒暑ニ恵ヲ缺ク。好夫ガ善事ヲ障拒デ、遂ニ三寶ニ歸投セズ、只貪リタクワエテ、千代ノ榮花ヲ計ル處ニ、天然ヲ終ラズシテ五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ掛リ、鐵湯銅炎ノ責メ、嗚呼如何。上人利益ヲ賜エトテ、忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ、靜ニ、更ニ葉ヲ吹ク風モナク、心ヲスマシ、寂々トシテ、御坐トコロニ、二十餘ノ婦人獨リ忽然トシテ見レ、其アヘグ息サモ苦シゲニ視テ、師ニ近ヅキ、手ヲ合、糸幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠フアラデ、住ケル李氏ノ婦ニテ有ケルガ、性トシテ貪テ、猶ヤブサカニ奴婢小婢ヲ憐マズ、日々ニ打罵シ、空ク駆使テ、剩、衣食ヲハブキ、寒暑ニモ不恵、好夫ガ善事ヲモ、障拒テ、遂ニ三宝ニ歸投セズ、只貪タクワエテ、千歳ノ榮花ヲ計トロニ、天然ヲ終ズシテ、五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ係リ、鐵湯銅炎ノ責、嗚呼如何セン。上人利益ヲ賜ヘトテ、又忽見ヘザレバ。</p>
<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲ汲ミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ジ來テ、師ヲ拜シ、吾ハ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲクミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦ジテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現シ來テ、師ヲ拜テ、吾ハ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈ニサシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲ汲ミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ジ來テ、師ヲ拜ミ、吾ハ前來ノ亡婦也。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲクミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ハレテ來ル。師ヲ拜ミテ、吾ハ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ、惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ル云シガ、俄ニ香風四方ニ薰シ、青白ノ雲東西ニ鬨キ、風雲ト諸共天女ハ去テ見エザリキ。是道人ノ処為トシテ、回向廣大ノ力、太多奇特ノ至ナリ。猶豫ヲ怪ム事莫レ。</p>	<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云イシガ、俄ニ香風四方ニ薰、青白ノ雲東西ニタナビキ、風雲ト諸共ニ天女ハ去テ見ヘサリケリ。是レ道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力ヲ太夕奇特ノ至リ。猶豫ヲ懷怪ム事勿レ。</p>	<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云イシガ、俄ニ香風四方ニ薰ジ、青白ノ雲東西ニ鬨キ、風雲ト諸共ニ天女ハ去テ見エザリキ。是道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力、太夕奇特ノ至也。猶豫ヲ懷キ怪ム事勿レ。</p>	<p>生ズ。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云シガ、俄ニ香風四方ニ薰シ、青白ノ雲東西ニタナビキ、風雲トモニ去リウセケリ。是道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力、太夕奇特ノ、猶豫ヲ懷キ怪ムコトナカレ。</p>
<p>○宝慶三年 「彈虎拄杖」</p> <p>十、虎齒痕之拄杖之事並皈朝之路惡黨二逢玉フ事</p>	<p>拾ニハ虎齒痕拄杖之事附皈朝之路惡黨二逢玉フ事</p>	<p>十 虎齒痕之拄杖之事并歸朝路之惡黨二逢玉フ事</p>	<p>十、虎齒痕ノ拄杖之事并歸朝ノ路ニ惡黨二逢玉フ事</p>
<p>時ハ宝慶三年ノ秋、師高充ヲ伴トシ江南西ノ路ヲ行玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮掛リ、更ニ往來ノ人モ無ケレバ、宿トラハヤトテ、高充アタリヲ尋子見シカレ、曾テ頼ルヘキ人家モナク、師仰セケル様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ。此方ニ宿レ。終夜月ニ嘯キ明スヘシ。アカヌ涼シキ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織蛩 鈴虫蜻蛉 轡虫、吾ヲ問樂シマレ、思ヒ邪ナキ処ニ、向方ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬ントテ飛來ルヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍シキ、吾ト力ヲ競トテ、大手ヲ開ケ待ケ</p>	<p>寶慶三年ノ秋、師高充ヲ御伴トシテ江西ノ路ヲ行キ玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮カタリ、更ニ往來ノ人無ケレバ、宿トラバヤトテ、高充ガアタリヲ尋見シカレ、曾テ頼ルベキ人家ナシ。師仰セラケル様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ、此方ニ宿リ、終夜月ニ嘯キ明スベシ。アカヌ涼シサ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織蛩 鈴虫蜻蛉 轡虫吾レヲ問カト樂シマル。思イ邪マナキ処、向方ノ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬ントテ飛來ルヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍ヤ、吾レト力ヲ競エトテ、大</p>	<p>時是寶慶三年ノ秋、高充ヲ伴トシ江南西ノ路ヲ行キ玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮掛リ、更ニ往來ノ人モ無ケレバ、宿トラバヤトテ、高充ガアタリヲ尋ネ見シカドモ、曾テ頼ムベキ人家ナシ。師仰ケル様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ、此方ニ宿レ、終夜月ニ嘯キ明スベシ。アカヌ涼キ秋風ノ、枕ニソヨグ草ノ間ニ、聚促織 蛩キ、鈴虫 蜻蛉、轡蟲、吾ヲ伺カト樂シマレ、思ヒ邪無キ處ニ、向方ノ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬マントテ飛ビ來ヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍布シ、吾ト力ヲ競ント</p>	<p>次ニ宝慶三年ノ秋、師高充ヲ伴トシテ江西ノ路ヲ行玉フ。廣々タル原野ニテ日已暮カ、リ、更ニ往來ノ人モ無レバ、宿トラバヤトテ、尋見レ曾テ頼ベキ人家ナシ。師仰セケルワ、草ノ裏コソ風流、此方ニ宿レ、終夜月ニ嘯キ明ベシ。アカヌ涼シキ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織、蛩々ス、鈴虫、蜻蛉、轡虫、吾ヲ問カト樂マレ、思ヒ邪マナキ処ニ、向方キ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲナラシ、師ヲ咬ントテ飛來ヲ、高充見テ虎トワ汝カ珍布シ、吾ト力ヲ競ヘトテ、大手ヲ開キ得ケルヲ、師</p>

ルヲ、師押テ余レ思フ処ノ有リ。
 汝彼ニ觸ル、事莫レト言フ処エ、
 虎馳掛テ咬ントセシガ、拄杖忽チ
 龍ト化ノ是ヲ防ク。少時闘シガハ、
 尋常ナラヌ龍ナレバ、虎争カ勝ル
 ヘギ、道ニ蹤ヲ潜メテニケ去リヌ。
 是道德ノ至リ、天地感動セシムル
 ノ妙処ナリ。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、
 虎齒痕ノ拄杖云。今ニ傳テ宝物タ
 リ。

手ヲ開キ待ケルヲ、師押ヘテ余思
 フ処アリ。彼ニ觸ル事勿レト言フ
 処ヘ、馳カ、ツテ咬ントセシカ
 バ、拄杖忽チ龍ト化シテ是ヲ防
 少時闘イシカハ、尋常ナラン龍ナ
 レバ、虎争カ勝ベキニ、遂ニ跡ヲ
 潜メテ去リヌ。是レ道德ノ至リニ
 テ、天地モ感動セシムル妙処ナ
 リ。此ノ拄杖ヲ倭ニ呼ンテ、虎齒
 痕ノ拄杖ト云フ。今ニ傳タヘテ宝
 物タリ。

テ、大手ヲ開ケ待ケルヲ、師押ヘ
 テ餘レ思フ處有リ。汝彼ニ觸ルル
 事勿レト言處エ、虎馳掛テ咬ント
 セシガ、拄杖忽チ龍ト化シテ是ヲ
 防グ。小時闘シカドモ、尋常ナラ
 ヌ龍ナレバ、虎争カ勝ルベキ、遂
 ニ蹤ヲ潜メ去リニケリ。是道德ノ
 至リ、天地ヲ感動セシムルノ妙處
 也。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、虎齒痕ノ
 拄杖ト云フ。今ニ傳テ寶物タリ。

押テ曰ク、余レ思処アリ。汝彼ニ
 觸レ勿ト言フ処エ、虎馳カ、ツテ
 咬ンセシカバ、拄杖忽チ龍ト化シ
 テ、是ヲ防ク。少時闘ヒシガハ、
 尋常ナラヌ龍ナレバ、虎争カ勝
 キヤ。遂ニ跡ヲ潜メ去リケル。是
 道德ノ至リ、天地ヲ感動セシムル
 ノ妙處ナリ。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、
 虎齒痕ト云フ。今永平ニ傳來ス。

韋將軍出現

扱テ又此未明ニ童子一人來テ云、
 師正ニ本國エ皈テ、法幢ヲ建立シ
 テ、直指ノ道ヲ唱フ可シ。久ク茲
 ニ留ル事莫レト。師言ク、汝は何
 人ゾ。童子答テ、我ハ是韋將軍ナ
 リ伝訖テ見エザリキ。

偕テ亦未明ノ項童子一人來テ曰
 ク、師正ニ本國ニ皈テ、法幢ヲ立
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久ク茲ニ
 留ルコト勿レト。師ノ曰ク、汝ハ
 是レ何人ゾ。童子答テ、我ハ是韋
 將軍ナリト、言訖テ見ヘザリキ。

扱テ又此未明ニ童子一人來テ曰、
 師正ニ本國エ歸テ、法幢ヲ建立シ
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久シク茲
 ニ留ル事莫レト。師言ク、汝ハ是
 何人ゾ。童子答テ、我ハ是韋將
 軍也ト。言イ訖テ見エザリキ。

偕亦此未明ニ童子一人來テ曰ク、
 師マサニ本國ニ皈テ、法幢ヲ立
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久ク茲ニ
 留ルレ莫ト。師曰ク、汝ワは何人
 ゴ。童子答テ、我ハ是韋將軍ナリト、
 言訖テ見ヘザリキ。

如淨と別離
附与物・垂誠

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白山ニ
 趨テ、皈郷ノ別ヲ伸玉フ。時ニ淨
 和尚附与スルニ、芙蓉ノ伽梨并自
 讚ノ頂相ヲ以テシテ曰、汝外國ノ
 人ナル故ニ、此衣ヲ授ク。傳法ノ
 信トスベシ。國ニ皈リテ法ヲ弘
 メ、衆生ヲ利益シ、國王大臣ニ近
 ク事無ク、城邑聚落ニ不レ住シテ深

師天神ノ告ニ任セテ、夕、チニ太
 白ニ走テ、皈郷ノ別ヲ伸ベ玉フ。
 時ニ淨公付與スルニ、芙蓉ノ伽梨
 并自贊ノ頂相ヲ以テシテ曰ク、汝
 ハ外國ノ人ナルガ故ニ、此ノ衣ヲ
 授ク。傳法ノ信トスベシ。國ニ皈
 テ法ヲ弘メ、衆生ヲ利益シ、國王
 大臣ニ近ク事勿レ。城邑聚落ニ住

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白山ニ
 趨テ、歸郷ノ別ヲ伸給フ。時ニ淨
 和尚附與スルニ、芙蓉ノ伽梨並ニ
 自贊ノ頂相ヲ以テシテ曰、汝外國
 ノ人ナルガ故ニ、此衣ヲ授ク。傳
 法ノ信トスベシ。國ニ歸テ法ヲ弘
 メ、衆生ヲ利益シ、國王大臣ニ近
 ク事無ク、城邑聚落ニ不レ住シテ

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白ニ趨
 テ、皈郷ノ別ヲ伸玉フ。時ニ淨和
 尚付與スルニ、芙蓉ノ伽利并自
 贊ノ頂相ヲ以テシテ曰ク、汝外國
 ノ人ナルガ故ニ、此衣ヲ授ク。傳
 法ノ信トスベシ。國ニ皈テ法ヲ
 弘、衆生利益シ、國王大臣ニ近ク
 コト莫レ。城邑聚落ニ不住シテ、

永平開山禪師之行狀傳聞記

山幽谷ニ居ルベシ。時機未レ稔。一箇ヲ接取シテ、吾ガ宗ヲ嗣續シテ、断絶セシムルヲ勿レトナリ。

永平開山道元和尚行狀傳聞記

セスシテ、深山幽谷ニ居ルベシ。時機未タ稔ナラス、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續アレ。断絶セシムルコト莫レトナリ。

永平開山元禪師行狀傳聞記

深山幽谷ニ居ルベシ。断絶セシムルコト勿レト也。又時機未レ稔、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續セシメト也。

永平開山道元禪師行狀傳聞記

深山幽谷ニ居住スベシ。時機イマダ念ナラス、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續アレ。断絶セシムルコト莫レトナリ。

〔二夜碧岩〕
白山明神加筆

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全体ヲ得玉フテ、是ヲ繕写有リケルニ、四更ニ到テ、其ノ全備シガタキヲ思召。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞、率ニ其功ヲ問玉フ。倭ニ謂ユル一夜碧岩トハ是ナリキ。今ニ傳テ尊信ス。師喜ヒ亦怪ンテ其姓名ヲ問玉エハ、神答エテ、我ハ乃チ日域男女ノ元神ナリト言イテ、即チ隠レマス。是マサシク白山明神ナルヲ知レリ。

此ノ日ニ暮レ方碧岩集ノ善本ヲ得玉フテ、是ヲ繕寫アリケル。師四更ニ至リ、其ノ全備シカタキ事ヲ思食。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞、卒ニ其ノ功ヲ問玉フ。師善、又タ怪ンテ其ノ姓名ヲ問ヒ玉ヘバ、神答テ、我レハ乃チ日域男女ノ元神ナリト言已テ、即隠レマス。是マサシク白山明神成ル事ヲ知レリ。

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全本ヲ得給フテ、是ヲ繕寫有リケリ。師四更ニ到テ其全備難キ事ヲ思食。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞イ、卒ニ其功ヲ問給フ。倭ニ謂ル一夜碧岩トハ是也。于レ今傳エテ尊信ス。師喜ビテ亦怪シミ、其姓名ヲ問玉ヘバ、神答テ、我ハ乃チ日域男女ノ元神也ト云テ、即チ隠レ玉ヘケリ。是正シク白山明神成事知レリ。

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全本ヲ得玉フ故、是ヲ繕寫アリケリ。師四更ニ到テ、其ノ全備シガタキコトヲ思念ス。時ニ白衣ノ神人來リテ助筆ヲ乞、卒ニ其ノ功ヲ問玉フ。倭ニ謂ユル一夜碧岩トハ是ナリ。于今流ヘテ尊信ス。師御喜ヒ亦怪ミテ、其姓名ヲ問玉フ。神答テ、我ワ是日域男女ノ元神也ト言已テ、即チ隠マス。是マサシク白山明神ナルコトヲ知レリ。

太白山辞去

然シテ師辞シテ太白ヲ出玉エバ、名残ガ諸友達、送テ麓ニ到リケル。是ヨリ別ル袖ノ外、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復此ノ國ヲ見ニ事有リヤ有ラマジ。別レテハ身ハ老易キ幻ノ命、短キ世ノ中ゾ。厭ヌ詠ノモ今シバシ、長キ驛路ノ門々ノ山河村野ノ

然シテ師辞シテ太白ヲ出テ玉ヘバ、名残ヲシカル諸友達、送リテ山下ニ到リケル。是ヨリ別ル袖ノ外、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復タ此ノ國ヲ見ンコトノアルヤアラシナ、別レテハ身ハ老イヤスシ幻シノ命、短キ世ノ中ゾ。厭ヌ詠モ今シバシ、長キ驛路

然テ師辭而太白ヲ出玉ヘバ、名残ヲシカル諸友タチ、送テ麓ニ到ケル。是ヨリワカレ、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復此國ヲ見ンコトノ有ヤアラマシ、別レテハ身ハ老易キ幻ノ命、短キ世ノ中ゾ、厭ヌ詠メモ今暫シ、長キ驛路ノ間々ノ山河村野ノ好景ヲ觀メ、

然ノ師辭而太白ヲ出玉フバ、名残ヲシカル諸友タチ、見送テ山下ニ到リケル。是レヨリ別レ、ミ袖ノ外高充ヲ御伴ニテ、漸々歩行マシマスガ、復此ノ國見ンコトノ、有ヤ有ラマジ、別テワ身ヲ老ヤスシ幻ノ人命、短キ世ノ中ノ、厭ヌ詠モ今シバシ、長キ驛路ノ間々ノ山河

明州津で悪僧と相遇
高充の活躍

<p>好景ヲ觀ジテ、口吟詠ノ幽カニ往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里程此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トラハヤト尋ルニ、民家四五家有ル中ニ、張氏カ屋ヲ宿トシテ一夜明サセ玉イケル。時ニ先年、師ノ怨敵ト成ケル、南海胡管等方同類共、アマタアリテ、于今鬱憤ヲ挾ミ、共ニ勅制ニ恐テ報ル事不能。時節ヲ伺フ処ニ、師ノ歸郷ヲ傳エ聞キ、時ヲ得タリト喜テ、已ニ似タル悪賊共ヲ率シ、僧俗四十余人ガ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考ヘ張子ガ門ヲ打破ル。張氏驚キ走り向エ、是ハ夜盗カ狼藉ヤ。吾カ身貧キ家ナレバ、劫テモ一物無シ。入ルコト勿レト云ケレバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿カス二人ノ客、我等カ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其爲ニ追テ是マテ来リタリ。寢処ヲ案内セヨト云。張氏カ兎角ト云ヲ問ニ、高充聽キ者ナレバ、早起アガリ、刀ヲ帶ヒ物ノ透間ニ指ノゾキ、トツクト様子ヲ察シタリ。何ニカ踟躕ニ及ヘキ、大戸ヲ</p>
<p>ノ間々ノ山河村野ノ好景ヲ觀テ、口吟吟ミ往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里ホト此ノ方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トシテ一夜ヲ明サセ玉イケル。時ニ先年、師ノ怨敵トナリタル南海胡舌等方同類共、アマタ有リケルカ。今ニ鬱憤ヲ挾ミ、共ニ勅制ニ恐テムクウ事アタハズ。時節ヲ伺フ攸ニ、師ノ皈朝ヲ承リ、時ヲ得タリト喜テ、己レニ似合タル悪俗共ヲ卒シ、僧俗二十四人ガ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考ヘ長氏ガ門ヲ擊破ル。長氏驚キ走向イ、是レハ夜盗ガ狼藉ヤ、吾身貧キ家ナレバ、劫テモ一物モナシ。入事勿レト云ケンバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿カス二人ノ客、我等ガ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其ノ爲ニ追テ是迄テ来リタリ。寢處ヲ按内セヨト云フ。長氏ガ兎角ト云ハン問ニ、高充聽トキ者ナレハ、早ヤ起アカリ刀ヲ帶ニ物ノ透間ニサシノゾキ、トクト様子ヲ察シテ、何ニカ踟躕ニ及フベキ、大戸ヲ活ト推開キ見レバ、即チ月ア</p>
<p>口吟詠シテ、遙ニ往キ玉フ。</p>	<p>早明州ノ津モ近ク、七八里程此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿ラバヤト尋ルニ、民家四五戸有ル中、張氏ガ屋ヲ宿トシテ一夜明サセ玉イケル。時ニ先年師ノ怨敵ト成ケル、南海胡舌等方同類共、數多在リテ、于今鬱憤ヲ挾サミ、共ニ勅制ニ恐レテ報ル事不能。時節ヲ伺フ處ニ、師ノ歸郷ヲ承リ、時ヲ得タリト喜デ、己レニ似タル悪俗共ヲ率シ、僧俗四十餘人ノ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考エ張氏ガ門打破ル。張氏驚キ走り向ヒ、是ハ夜盗カ狼藉ヤ。吾身貧シキ家ナレバ、カスメテモ一物ナシ。入ルコトナカレト云ケレバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿カス二人ノ客、我ラガ昔ノ怨敵也。誅取ン其爲ニ追テ是ヘ来リタリ。寢處ヲ案内セヨト云フ。張氏ガ兎角云ヌマニ、高充耳トキ者ナレバ、早起上リ、刀ヲ帶物ノ透間ニ指シノゾキ、トツクト様子ヲ察タリ。何カ踟躕ニ及フベキ、大戸ヲ豁ト</p>
<p>村野ノ好景ヲ觀テ、口吟往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里ホト此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トラバヤト尋ルニ、民家四五戸有中ニ、張氏ガ屋ヲ宿トシテ、一夜ヲ明サセ玉ヒケル。時ニ先年怨敵トナリケル、南海胡舌等方同類共、アマタ有テ、于今鬱憤ヲ挾メトモ、勅制ニ恐レテ報コト不能。時節ヲ伺フ攸ニ、皈郷ノ由ヲ承リ、時ヲ得タリト喜ヒ、已ニ似タル悪俗共ヲ率シ、僧俗四十人余ノエセ者共心ヲ合、子刻ヲアイツニ、長氏カ門ヲ擊破ル。長氏驚走向イ、是ハ夜盗カ狼藉ナリ。吾身貧キ家ナレバ、劫テモ一物ナシ。入コト勿レト云イケレバ、悪僧共答テ云ク、汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿假二人ノ客、我等ガ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其爲ニ、追テ是迄来タリ。寢處案内セヨト云フ。長氏ガ兎角ト云ワヌ問ニ、高充聽キ者ナレバ、夫レト聞ヨリ起アガリ、刀ヲ帶テ物ノ透ヨリ、指ノゾキ、トクト様子ヲサツシタリ。何カ踟</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>豁ト推シ開キ見レバ、即チ月照レリ、眠リ飽タリ長キ夜ノ慰ミ也ト、喜テ廣庭ニ走り出ルヲ、師袂ヲ引留メ荒キヲスナ高充ヨ、菩薩ノ慈悲欠クヘカラズ。人ナ壞リゾ。身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシトノタマエリ。ハヤリ立タル高充ガ、慈言ヲモ肯ス、品ニコソヨレ。吾カ師トテ見レバ、張氏カ屋作りスル柱梁等積テ有ケルヲ適レ得タリト云俣ニ、二丈計ノ大柱輕タシク提ケ出テ、何怨敵トヤ身ヲ知ラヌ、放逸無漸ク曲者共、日本ノ僕カ手ニ掛リ、閻魔ノ廳ニ附淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向エバ、惡儻共大イニ恐レ、是人間ノ業ナラズ。設イ萬騎モ及ストテ、皆散々ニ迷失セリ。高充大ニ打咲イ、懸リニ似セヌ臆病者ヤ。ニクル背ノ可咲。狗遂者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニトウトヲク。高充カ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト張氏ヲ始メ、口々ニ咲美セザル人ハ無シ。</p>	<p>カリ、眠リ飽タル長夜ノ慰ミナリト、喜ヒテ廣庭ニサシ走り出ルヲ、師袂ヲ拽留メアラキ事スナ高充ヨ。菩薩ノ慈善欠クベカラス。人ナ壞ルゾ。身命ヲモ彼ガ欲セバ、得スベシトノ玉ヘバ、ハヤリタツタル高充ガ、慈言ヲモ肯セス、品ニコソヨレ、吾師トテ見レバ長氏ガ屋造リスル柱ヲ梁積テアリ適レ得タリト云俣ニ、二丈ハカリノ大柱カル／＼ト提ケ、何ニ怨敵ヤト身ヲ知ラヌ放逸無漸ノ曲者トモ、日本ノ僕ガ手ニカ、リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向ヘバ、惡黨トモ大キニ恐レ、是レ人間ノ業ナラズ。設イ萬騎モ及バシトテ、皆散々ニ迷失タリ。高充大キニ打咲イ、懸リニ似セヌ臆病者、マクル背ノ可咲サヨ、狗遂フ者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニドウトヲ。高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト長氏ヲ始メ、口々ニ嘆美セザルハナカリケル。</p>	<p>推シ開キ見レバ、即チ月照リ、眠リ飽タリ長キ夜慰ミ也ト。喜テ廣庭ニハセ出デ、師袂ヲ引キ留メ荒キ事スナ高充ヨ、菩薩ノ慈悲ヲ缺ベカラズ。人ナ壞リゾ、身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシト言ヘド、ハヤリ立タル高充ガ、慈言ヲモ肯ハズ、品ニコソヨレ、吾師トテ見レバ張氏ガ屋作スル柱ヲ梁リ積テ有ル適レ得タリト云儘ニ、二丈計リノ大柱輕々布引提ゲテ、何怨敵トヤ身ヲ知ヌ放逸無漸ノ曲者共、日本ノ僕ガ手ニ掛リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向エバ、惡儻共大ニ恐レ、是人間ノ業ナラズ、設イ萬騎モ及バズトテ、皆散々ニ迷失セケリ。高充大キニ打笑ヒ、懸リニ似合ヌ臆病者、ニグル背ノ可咲。狗又遂者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニドウトヲク。高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト張氏ヲ始メ、口々ニ嘆美セザル人ハ無シ。</p>	<p>躋ニ及フベキ、大戸ヲ活ト推開キ、見レバ、時シモ月アガリ、眠飽タル長夜ノ慰ミ、喜ヒ切テ廣庭ニゾ走出ヲ、師袂ヲ拽留メ、荒キ事スナ高充ヨ、菩薩ノ慈善ヲ欠ベカラズ。人ナ壞リゾ身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシトノ玉ヘバ、ハヤリ立ツタル高充カ、慈言ヲモ肯ンゼズ、品ニコソ由、吾師トテ、長氏ガ屋作スル柱、梁積在ルヲ適レ得タリト。云俣ニ、二丈バカリノ大柱カル／＼ト提ケ、何怨敵ヨバワリトヤ、身ヲ知ヌ放逸無漸ノ曲者氏日本ノ僕ガ手ニカ、リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨト云俣ニ、縦横無塵ニ打テ向ヘバ、惡儻共、大キニ恐レ、是人間ノ業ナラズ。設ヒ千騎萬騎モ及バジトテ、皆散々ニ迷失タリ。高充大キニ打笑ヒ、懸リニ似セヌ臆病者、ニクル背ノ可咲サヨ。狗遂者トワ是ゾトテ、柱ヲ庭ニトウトヲク、高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト、長氏ヲ始メ口々ニ嘆美セズト云ナシ。</p>

解纜
招宝七郎出現

十一、龍天善神並一葉ノ觀音現
玉フ附師ノ御父母生天事

同ク冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒ノ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ。身ニシム風モ忍ハレス、忽チ神人顯レテ舟ニ駕ル。師云ク、汝ハ何レノ神ゾト有レバ、答テ、我ハ是龍天ナリ。支那ニ在テハ招宝七郎伝シ者也。師ノ祖印ヲ佩テ還ルヲ知り、師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆異不淺ノ、若然ハ少身ヲ現ジ玉エト有ケレバ、則チ三寸計ノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一ニハ龍天善神之事一葉ノ觀音現シ玉フ事
附師ノ御父母生天之事

同ク冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛フニ異ナラス。身ニシム風モ忍レズ。忽チ神人アラハレテ船ニ駕リ、師ノ曰ク、汝ハ何レノ神ナルゾトアレハ、答テ、我ハ是龍天ナリ。支那ニ在テハ招宝七郎ト云フ者ナリ。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ還ルコトヲ知ル。我師ニ隨テ正法ヲ護ラント仰セケル。師嘆異淺カラズ、若然ラバ小身ヲ現シ玉ヘト有リケレバ、乃チ三寸計リノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一 龍天善神并一葉觀音現ジ
玉フ事 附師御父母生天之事

同冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ、見ニシム風モ忍バレス、忽チ神人顯レテ舟ニ駕ル。師云、汝ハ何レノ神ゾト有レバ、答テ、我ハ是龍天也。支那ニ在テハ招寶七郎ト云イシ者也。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ歸ルヲ知り、師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆略不淺シテ、若シ然バ小身ヲ現ジ玉エトアリケレバ、則チ三寸計ノ白蛇ト也、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一、龍天善神并一葉觀音現玉
事 附師御父母生天ノ事

同冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ。身ニシム風モ忍バレス、忽チ神人アラワレテ船ニ駕ル。師云ク、汝何レノ神ゾトアレバ、答テ、我ワ是龍天ナリ。支那ニ在リテワ、招宝七郎ト云フ者ナリ。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ還ルコトヲ知ル。我レ師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆異不淺、若シ然ラバ小身ヲ現ジ玉ヘト有リケレバ、乃チ三寸計ノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

一葉觀音出現

然而船漸ク行ケバ、赤黒風俄ニ起リ、荒波怒リ鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急難ヲ哀ミテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹ノ難伝ニ至テ、風波共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮ヒ玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ禮

然シテゾ船漸ク行ケバ、又夕黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急ヲ哀シテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海ヨリ羅刹之難ト云處ニ到テ、波風共ニ恬如タリ。

師猶一心ニ誦シ玉フ。一分奉ヨリ多宝佛塔、無故意ニ至ル迄、觀音薩埵蓮花一葉ニ乗シテ海上ニ浮ヒ

然而船漸ク行ケバ、亦黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没トス。師此急難ヲ哀レミテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹之難ト云ニ到テ、風波共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮ヒ玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ禮

然シテ船漸ク行ケバ、又黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急ヲ哀ンテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹ノ難ト云ニ到テ、波風共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ、禮

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
<p>拜シ、未^レ卑^ニ乃^チ御形隠クレ玉フ。一船ノ人々難^レ遭ノ思ヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限り無し。</p>	<p>玉フ。其ノ妙相之端嚴ナル事、光彩天地ニ輝カセリ。師瞻仰禮拜シ玉フテ一船ノ人々難^レ遭ノ思ヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限りナシ。</p>	<p>拜シ、未^レ終^ニ乃^チ御形隠レ玉フ。一船ノ人々難^レ遭ノ思ヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限り無し。</p>	<p>拜、未^レ夕^ニ畢^ラザルニ、乃^チ御形隠レ玉フ。一船ノ人々難^レ遭ノ思ヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆カギリナシ。</p>
<p>○安貞元年 河尻着岸 〔觀音図贊〕 故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ケ、飛ガ如ニシテ肥後ノ國河尻ニ着玉フ。頃ハ則チ日本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月廿八日也。師未^レ夕^ニ旬日ヲ過ザルニ、自^ラ海上ニ現^レジ玉フ觀音ノ妙容ヲ圖シ、其ノ上ニ贊ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ニ今ニ我宗ニハ、祈禱ノ普門品ニ一分奉^ル時、合掌シテ昔年ヲ慕^シム。夫レヨリ順風ニ帆ヲアケテ、飛ガ如ニシテ乃チ肥後國河尻ニ着船アリ。此ハ乃チ本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月二十八日ナリ。師未^レ夕^ニ旬日ヲ過サルニ、海上ニ現^レシ玉フ觀音妙容ヲ圖シ、其上ニ贊ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其ノ像今ニ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ゲ、飛ガ如ニシテ肥後ノ國河尻ニ著玉フ。頃ハ則チ日本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月廿八日也。師未^レ夕^ニ旬日ヲ過ザルニ、自^ラ海上ニ現^レジ玉フ觀音ノ妙容ヲ圖シ、其上ニ贊ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ゲ、飛ガ如ニシテ肥後ノ州河尻ニ着船アル。頃ワ乃チ本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月二十八日ナリ。師未^レ夕^ニ旬日ヲ過^リ玉ワサルニ、自^ラ海上ニ現^レ玉フ觀音ノ容ヲ圖シ、其上ニ贊ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>
<p>河尻滞在五年 且又釈迦文佛之茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅檀、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶ヒ来リマス者也。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御座ス事五年也。</p>	<p>且亦釋迦文佛之茵褥ト、六祖大師ノ念珠鬱多羅僧安陀衣、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨禪師ノ語録等、皆ナ師帶^ヒ来リマシマス者也。今ニ傳テ永平寺之宝藏ニ在リ。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御マス事五年。</p>	<p>且又釋迦文佛ノ茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶^ヒ来リマス者也。今ニ到テ永平ノ庫藏ニ有リ。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御坐事五年也。</p>	<p>且亦釈迦文佛ノ茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶來リマス者ナリ。今ニ傳ヘテ永平ノ庫藏ニ有リ。師河尻ノ名ヲ埋^ミ、痕ヲ隠シテ御座コト五年。</p>

*上欄に「會ワ衣カ」とある。

兼若、光若を
派遣

叱二洛ニテ兼若公、風ニ聞食、忻然限り無く、便チ御迎ノ為ニ光吉ヲ遣サル。光吉、河尻ニ至リ、師ノ草庵ニ尋子着シカハ、師對面マシマシテ、不喜ノ云、吾ハ深く身ヲカクシ、影モ移サヌ柴ノ庵、誰カ告ゲル。遙々ト汝ヲ勞シ來タセルヤ。時ニ光吉、謹テ白上ル條、恐ラクハ隠レタルヨリ顯レタルハ無シト。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス処ナレバ、豈ニ洛ノミナランヤ。朝野悉ク知レ之。

時ニ洛ニテ兼若殿、風ニ聞召、忻然限りナク、便チ御迎イノ為光吉ヲ遣サル。光吉河尻ニ到テ、師ノ草庵ニ尋付シカバ、師對面マシマシテ、喜バズシテノ玉ハク、吾ハ深く身ヲ隠シ影モ移サヌ柴ノ庵、誰カ告ゲケル。遙々ト汝ヲ勞シ來セルヤ。時ニ光吉、謹ンテ白シ上ル條、恐クハ隠タルヨリ顯タルハナシ。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス処ナレバ、豈洛ノミナランヤ。朝野悉ク是ヲ知ル。

叱ニ洛ニテ兼若公、風ニ聞シメシ、忻然限り無く、便チ御迎ノ爲ニ光吉ヲ遣サル。河尻ニ至テ師ノ草庵ニ尋ネ著シカバ、師對面マシマシテ、不レ善シテ云、吾ハ深く身ヲ隠シ、影モ移サヌ柴ノ庵ヲ、誰カ告ケル。遙遙ト汝ヲ勞シ來タラセルヤ。時ニ光吉、謹テ白上ル條、恐クハ隠レタルヨリ顯レタルハ無シト聞。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス處成バ、豈ニ洛ノミナランヤ。朝野悉ク知レ之。

叱ニ洛ニテ兼若殿、風ニ聞シメシ、忻然限りナク、便チ御迎ノ爲光吉ヲ遣ワサル。光吉河尻ニ到テ師ノ草庵ニ尋付シカバ、師對面マシマシテ、不レ喜シテ曰ク、吾ハ深く身ヲ隠シ、影モ移サヌ柴ノ庵、誰カツゲ、ルソ。遙々汝ヲ勞シ來タセセルヤ。叱ニ光吉、謹テ白シ上ル條、恐クワ隠タルヨリ顯レタルワナシ。師ノ道德ノ至リ、天神キ推トコロナレバ、豈洛ノミナランヤ。朝野悉ク知之。

兼若の奉迎

故ニ兼若公、僕ヲ以テ迎奉レリ。先告シ上ヘキ事、恨ラクハ、父上去年ノ春三月十日空ク世ヲ逝玉フ。唯其時ノ朝迄モ寢レバ、夢覺レバ幻シニ師ノ御事ヲ言キ、御遺詞ニハ師ノ皈朝マシマサバ、只菩提ニ廻向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セケル。速ニ都ニ御上リアツテ、父上ノ御為ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘト、高充諸共請シ奉ル。時ニ師黙シテ思召ケルハ、我善逝已ニ成道アリ。久カラズシテ國ニ皈テ、父王並ニ親屬ヲ度シ、

故ニ兼若殿、僕ヲ以テ迎ニ奉ツレリ。先申シ上ベキ事、恨ラクハ、父上去年ノ春ル三月十日ニ空シク世ヲ逝リ玉フ。只其ノ時ノ朝マテ寢レハ、夢ニ覺レバ幻シニモ師ノ御事ノミ言キ。御遺詞ニハ師ノ皈朝マシマシサハ、只菩提ニ回向シテ、沈淪ヲ救イマイラセヨト仰セケレバ、速ニ洛ニ御上リ有テ、父上ノ御タメニソ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘトテ、高充諸共ニ請シ奉ル。時ニ師黙然トノ心ニ思召シケルハ、我釋尊モ已ニ成道アリ。久

故ニ兼若公、僕ヲ以迎奉レリ。先告シ上グベキ事ハ、恨ラクハ、御父上去年之春三月十日ニ空ク世ヲ逝リ玉フ。唯其時ノ朝迄寢レバ、夢覺レバ幻ニモ師ノ御事ヲ宣ベキ、御遺詞ニハ師ノ歸朝マシマサバ、只菩提ニ廻向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セラル。速ニ都ニ御上リ有テ、父上ノ御爲ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ渡シ玉ヘト、高充諸共請シ奉ル。時ニ師黙然トシテ思食ケルハ、我が善逝已ニ成道有リ。久シカラズシテ國ニ歸テ、父王並ニ

故ニ兼若殿、僕コ以テ迎奉レリ。先告上ベキコト、恨ラクワ、父上去年、春三月十日ニ空ク世ヲ逝玉フ。只其時ノ朝迄寢レバ、夢覺レバ幻シニモ師ノ御事ノミ言キ、御遺詞ニワ師ノ皈朝マシマサバ、只菩提ニ回向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セケレバ、速ニ洛ニ御上リ有テ、父上ノ御為ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘトテ、高充モロ共請シ奉ル。時ニ師黙トシテ心ニ思シメシケルワ、我が善逝已ニ成道アリ。久シカラズシテ、國ニ皈リテ、父

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>更ニ忉利ニ安居シテ母ヲ利濟シ玉 エリ。或ル黄檗ハ儀渡ニ母ヲ導 キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ救ヘリ。我 後生オクレタリ云トモ、得道何ゾ 仏祖ニ殊ナランヤ。既ニ明師ニ見 ヘ來ル。豈其功無ンヤトテ、則チ 香花灯燭ヲ撃ゲ、禪坐思惟純一也。</p>	<p>シカラズシテ國ニ皈リ、父王亦タ 諸親ヲ度シ、更ニ忉利ニ安居シ テ母ヲ利濟シ玉ヘリ。或ハ黄檗ハ 儀渡ニ母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父 ヲ救イシナリ。我レ後生ヲクレタ リト云エト、得道何佛祖ニ殊ナラ ン。既ニ明師ニ見ヘ來ルトテ、乃チ 香花灯燭ヲ撃、坐禪思惟純一ナリ。</p>	<p>親屬ヲ渡シ、更ニ忉利ニ安居シテ 母ヲ利濟シ玉エリ。或ハ黄檗ハ儀 渡ニ母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ 救エリ。我後生オクレタリト雖 モ、得道何ゾ佛祖ニ殊ナラムヤ。 既ニ明師ニ見ヘ來ル。其功ナカラ ンヤトテ、則チ香花灯燭ヲ撃ゲ、 禪坐思惟純一也。</p>	<p>王又諸親ヲ度シ、東ニ忉利ニ安居 シテ、利濟シ玉フ。或ハ黄檗ハ儀 渡母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ救 エリ。我後生ヲクレタリトモ、得 道何ゾ佛祖ニ殊ナラン。既ニ明師 ニ見ヘ來タルトテ、乃チ香花灯燭 ヲ撃、坐禪思惟純一ナリ。</p>
<p>亡父の生天 時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇リ暗々タ ルガ、四方俄ニ明サシ、香風靜ニ 晴レ吹薫、空ニ声有リ。告テ云、 我ハ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ 振イ、智光幽冥ヲ照サル、ニ由 テ、独リ我苦報ヲ免ルノミニ非 ス。諸ノ罪人込俱ニ免レ、速ニ天 ニ生ズ。爭法恩謝シト計リニテ、 音モ聲モ無ク為セケリ。高充モ光 吉モ、茲希有ヲ瞻仰シテ、亡君ノ 生天ヲ恐怡シ、師ノ道徳ヲ深ク信 ジ、感嘆更ニ涯リ無シ。</p>	<p>時ニ無月ノ夜半殊ニ曇リテ暗々タ ルガ、四方俄ニ明リサシ、香風靜 カニ吹薫、空ニ声エアリ。告テ曰 ク、我レハ是レ師ノ父ナリ。師ノ 道力地附ニ振イ、智光幽冥ヲ照シ ル、ニ依テ、獨リ我苦報ノミ免 ル、ニ非ズ。諸ノ罪人マデ、俱ニ 免レ、速ニ天ニ生ズ。法恩ハ謝シ ガタシト計リニテ、声モナクナラ セケル。高充モ光吉モ、此ノ希有 ヲ瞻仰シテ、亡君ノ生天ヲ恐怡 シ、師ノ道徳ヲ深ク信シ、感嘆涯 リナシ。</p>	<p>時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇リ暗々タ ルガ、四方俄ニ明サシ、香風靜ニ 晴吹薫ヒ、空ニ聲有リテ、告テ云、 我ハ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ 振イ、智光幽冥ヲ照サルルニ由 テ、獨我苦報ヲ免クルノミニ非 ズ、諸ノ罪人迄、俱ニ免レ、速ニ 天ニ生ズ。爭法法恩謝シ難シト計 リニテ、音モ聲モ無ク成セケリ。 高充モ光吉モ、此ノ希有ヲ瞻仰シ テ、亡君ノ生天ヲ恐怡シ、師ノ道 徳ヲ深信シ、感嘆サラニ涯リ無シ。</p>	<p>時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇暗々タル ガ、四方俄ニ明リサシ、香風靜ニ 吹薫ヒ、空ニ声アリ。告テ云ク、 我ワ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ 振、智光幽冥ヲ照サル、ニ由テ、 獨リ我苦報ヲ免ル、ニ非、モロ クノ罪人マデ、俱ニ免レ、速ニ 天ニ生ズ。法恩謝難シト計ニテ、 声モ臭モナクナラセケル。高充モ 光吉モ、茲ニ希有ヲ瞻仰シテ、亡 君ノ生天ヲ恐怡シ、師ノ道徳ヲ深 信シ、感嘆涯リナシ。</p>
<p>○貞永元年 上洛</p>	<p>師出定マシマシテ、二人ノ者ニ仰 セケルハ、吾レ先年建仁ノ佛樹師ニ</p>	<p>師出定マシマシテ、二人ノ者ニ仰 ケルハ、吾レ先年建仁ノ佛樹師ニ</p>	<p>師出定マシシテ、二人ノ者ニ仰 ケルハ、吾レ先年建仁ノ佛樹ニ事ヘ</p>

兼若、家督を
続く

建仁寺寓居

<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ハ子ハ、 上命ヲモ喜ヒズ、猶建仁ニ寓居シ 玉フ事、一年餘リ也。</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ハ子ハ、 上命ヲモ喜ハス、猶ヲ建仁ニ 寓居マシマス事、一年餘リト聞エ タリ。</p>	<p>或曰ク兼若殿、父ノ家督ヲ紹セケ レバ、小字名ヲ改メテ、源ノ朝臣 忠好卿ト稱シ、建仁三年癸亥ノ御</p>	<p>事テ在シ時、母已ニ生天ヲ告ク。 今亦父ガ生處ヲ喜ブ如此。父ヲ渡 シ、吾本懐ヲ茲滿ツ。然ト云レ、 佛祖ノ出世ハ小師ニ同ジカラ。耻 クハ吾末世ニ小師トナリシカレ、 已ニ佛祖ニ紹来ル。何ゾ四恩ヲ忘 ジ三有ヲ憐マサル可ヤ。上洛セン ト言ヘハ、兩人怡ヒ限り無く、則 チ御伴仕リ、洛ニ上ラセ玉イケ ル。頃ハ貞永元年極月廿一日洛陽 エ上着マシマセバ、兼君殿ヲ始メ 御一門ノ公達、花待得タル御對 面、互ニ忻怡不淺、懷抱語リ心内 モ解ル水ノ如クナリ。然而師ノ皈 朝ヲ御門エ奏聞有ケレバ、御門御 歡斜メナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエ ラビ、精舎ヲ建テヨトノ勅命有リ。</p>
<p>或曰ク兼若殿、父ノ家督ヲ紹セケ レバ、小字名ヲ改メテ、源ノ朝臣 忠好卿ト稱ス。建仁三年癸亥ノ御生</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ハ子 ハ、上命ヲモ喜ハス、猶ヲ建仁ニ 寓居マシマス事、一年餘リト聞エ タリ。</p>	<p>或云、兼若公、父ノ家督ヲ續セケ レバ、小字名ヲ改テ、源ノ朝臣忠 好卿ト稱ス。建仁三年癸亥ノ御誕</p>	<p>二事テ在リシ時、母已ニ生天ヲ告 ク。今亦父ノ生處ヲ喜フ。カク父 ヲ度シ、母ヲ度シ、吾ガ本懐茲ニ滿 タリト雖モ、佛祖ノ出世ハ、小々 ニ同カラズ。耻之吾レ末世ノ小 師ナリシカト、已ニ佛祖ニ紹キ来 ル。何ソノ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マ サルベキヤ。上洛セント言ヘハ、 二人悅限ナク、乃チ御伴仕リ、洛 ニ上ラセ玉ヒケル。頃ハ貞永元年 極月二十一日ニ洛ニ上着シ玉ヘ バ、兼君殿ヲ始メ、御一門ノ公卿 達、華待得タル御對面、互ニ忻怡 アサカラズ、目出度シトモ云ハカ リナシ。然シテ師ノ皈朝ヲ御門エ 奏聞ス。御門御歡斜ナラズ、師ノ 爲ニ佳境ヲエラビ、精舎ヲ建立セ ヨトノ勅命アリ。</p>
<p>或云、兼若公、父ノ家督ヲ續セケ レバ、小字名ヲ改テ、源ノ朝臣忠 好卿ト稱ス。建仁三年癸亥ノ御誕</p>	<p>然ドモ師ハ利名ヲ事トシ玉ハネ バ、上命ヲモ喜ヒズ、猶建仁寓居 シ玉フ事、一年餘リ也。</p>	<p>或云、兼若公、父ノ家督ヲ續セケ レバ、小字名ヲ改テ、源ノ朝臣忠 好卿ト稱ス。建仁三年癸亥ノ御誕</p>	<p>仕テ在シ時、母已ニ生天ヲ告。今 亦父ガ生處ヲ喜ブ如此。父ヲ渡 シ母ヲ渡シ、吾ガ本懐于レ茲滿ツ。 然ト雖モ、佛祖ノ出世ハ小々ニ同 ジカラズ。恥之吾レ末世ニ小師 トナリシカドモ、已ニ佛祖ニ紹来 ル。何ゾ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マザ ルベキヤ。上洛セント宣ヘバ、兩 人悅ビ限りナク、則チ御伴仕リ、 洛ニ上セ玉ヒケル。頃ハ貞永元年 極月廿一日ニ、洛陽エ上著マシマ セバ、兼君殿ヲ始メ、御一門ノ公 卿達、花待得タル御對面、互ニ忻 怡淺カラズ、懷抱語リ心内モトゲ ルコホリノ如ク也。然シ師ノ歸朝 ヲ御門エ奏聞有ケレバ、御門御歡 斜メナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエラ ビ、精舎ヲ建テヨトノ勅命有リ。</p>
<p>或云ク、兼若殿、父ノ家督ヲ紹セ ケレバ、小字ヲ改メテ、源朝臣忠 好卿ト稱ス。建仁三年 癸亥ノ御生</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ワ子 バ、上命ヲヨロビズ、猶建仁寓居 マシマスコト、一年餘リト聞ヘタ リ。</p>	<p>或云ク、兼若殿、父ノ家督ヲ紹セ ケレバ、小字ヲ改メテ、源朝臣忠 好卿ト稱ス。建仁三年 癸亥ノ御生</p>	<p>テ在リシ時、母已ニ生天ヲ告ク。 今亦父ガ生處ヲ喜ブ。如此父ヲ 度シ、母ヲ度シ、吾カ本懐于茲 滿シ、シカリト雖モ、佛祖ノ出世ハ 小々ニ同カラズ。恥之ワ吾レ末 世ニ小師ナリシカト、已佛祖ニ紹 来ル。何ゾ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マ サルベキヤ。上洛セント言ヘバ、 二人快ヒ限りナク、乃チ御伴仕 リ、洛ニ上ラセ玉ヒケル。頃ハ貞 永元年極月二十一日ニ洛ニ上着マ シマセバ、兼君殿ヲ始メ、御一門 ノ公卿等、花待得タル御對面、互 ニ忻怡不淺、目出度シトモ云フ量 ナシ。師ノ皈朝ヲ御門ヘ奏聞ア ル。御門御歡斜ナラズ、師ノ爲ニ 佳境ヲエラビ、精舎ヲ建立セヨト ノ勅命アリ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>高充、受戒し 道正と号す</p> <p>生也。今三十字ニナリ玉フ。</p>	<p>レニテ、今三十字ニナリ玉フ。</p>	<p>生也。今三十字ニ成玉フ。</p>	<p>レ、今三十字ニナリ玉フ。</p>
<p>偕テ高充ハ先祖ヨリ木下ニ住シ、 代々通親ノ家ニ事ル。父ガ名ハ木 下將監高利ト云フ。高充生年七歳 ニテ父ノ高利死ス。文治四年戊申 ノ春トカヤ。高充ガ師ニ事ル其ノ イサヲシ、幾多猶未タ休セズ。其 齡ハ壽永元年壬寅ノ生レニテ、今 貞永元年壬辰ノ春ニ至テ五十一歳 也。文武勇力絶倫ナルヲ以テ、公 郷大臣議テ国主ニ封セント有リシ カト、固ク辞ゾ云、僕ハ已ニ老テ 殊ニ妻子ハ俱セサルハ、夫レ宿善 ノ餘慶難値、明師ニ逢。是僕ガ幸 也。唯師ニ隨順ノ、身ヲ終シコソ 本懐ナリトテ、少シモ受ル氣色ナ シ。師彼ガ増々隨侍ノ功ノ至切ナ ルヲ愍ンテ、為ニ法ヲ説キ、優婆 戒ヲ授ケ、法号ヲ賜リテ道正ト云 フ。艸庵ヲ木下ニ結フ。故ニ道正 庵ト名ク。道ハ無上ノ道、正ハ正 直也。是正直捨方便、但説無上道 ノ佛語ヲ示シ玉フ者歟。</p>	<p>偕テ高充ハ先祖ヨリ木下ニ主シト シテ、代々通忠ノ家ニ事ル。父 ガ名ヲ木下將監高利ト云フ。高充 生年七歳シテ父高利ハ死ス。文治 四年戊申ノ春トカヤ。高充ガ師ニ 事ル其ノイサヲシ、幾多猶未 タ休セズ。其ノ齡ハ壽永元年壬寅 ノ生レニテ、今貞永元年壬辰ニ至 リテ五十一歳ナリ。文武勇力絶倫 ナルヲ以テ、公卿大臣議。國王ニ 封セント有リシカド、固ク辞シテ 曰ク、僕ガ已ニ年老テ殊ニ妻子ヲ 欲セス。夫レ宿善ノ餘慶難値、 明師ニ値フ。是僕ガ幸ナリ。唯師 ニ事テ世ヲ終シトテ不レ受。師モ 彼ガ増々隨侍ノ至切ナルヲ愍ミ テ、為ニ法ヲ説キ、優婆塞戒ヲ授 テ、法号ヲ賜テ道正ト云フ。草庵 ヲ木ノ下ニ結ビ、故ニ道正庵ト名 ク。道ハ無上道、正ハ正直ナリ。 是レ正直捨方便、且説無上道ノ佛 語ヲ示シ玉フ者歟。</p>	<p>サテ高充ハ先祖ヨリ木下ニ住シ テ、代々通親ノ家ニ仕ル。父ガ名 ハ木下將監高利ト云フ。高充生年 七歳ニテ父ノ高利死ス。文治餘年 戊申ノ春トカヤ。高充ガ師仕ル其 イサヲシ、幾多猶未ダ休セズ。 其齡ハ壽永元年壬寅ノ生レニテ、 今貞永元年壬辰ノ春ニ至テ、五十 一歳也。文武勇力絶倫成ヲ以テ、 公卿大臣議テ國王ニ封セント有リ シカドモ、固ク辞シテ云、僕ハ已 ニ年老テ殊ニ妻子ハ俱セサルハ、 夫レ宿善ノ餘慶難値。今明師ニ 値フ。是僕ガ幸也。唯師ニ隨順シ テ、身ヲ終エンコソ本懐也トテ、 少シモ受ル氣色ナシ。師彼ガ増々 隨侍ノ至切成ヲ愍ンデ、爲ニ法ヲ 説キ、優婆塞戒ヲ授ケ、法号ヲ賜 リテ、道正ト云フ。草庵ヲ木下ニ 結。故ニ道正庵ト名ク。道ハ無上 ノ道、正ハ正直也。是レ正直捨方 便、但説無上道ノ佛語ヲ示シ玉フ 者歟。</p>	<p>偕高充ハ先祖ヨリ木下ニ主トシ テ、代々通忠ノ家ニ事ツル。父ガ 名木下將監高利ト云フ。高充生年 七歳ニシテ、父高利死ス。文治四 年戊申ノ春トカヤ、高充ガ師ニ事 マツル其イサヲシ、幾多猶未タ休 ス。其齡ハ壽永元年壬寅ノ生レ ニテ、今貞永元年壬辰ニ至テ、五十 一歳ナリ。文武勇力絶倫ナルヲ以 テ、公卿大臣議テ国主ニ封セント 有シカド、固ク辞シテ云ク、僕ワ 已ニ年老テ、殊ニ妻子ヲ欲セズ。 夫宿善ノ餘慶、難値明師ニ値フ。 是僕ガ幸ナリ。唯師ニ事テ世ヲ終 トテ、不レ受。師彼ガマス／＼隨 侍ノ功ノ至切ナルヲ愍ンテ、為ニ 法説、優婆塞戒ヲ授ケ、法号ヲ賜 テ道正ト云フ。草庵ノ木下ニ結 フ。故ニ道正庵ト名ク。道ワ無上 道、正ワ正直也。是正直捨方便、 且説無上道ノ佛語ヲ示玉ウ者歟。</p>

解毒円を広め

師亦解毒圓ノ方ヲ附与シ玉フテ、子々孫々ノ榮營、末代ノ猶盛シナルガ為也。若シ一國ノ主ニ封セラレバ、榮衰量ル可シ。古今榮衰ヲ不レ知シテ、子孫福樂窮リ無キハ、先祖ノ道正ガ成功、且ツ大師ノ深恩ニ非スヤ。

又夕解毒圓ノ方ヲ附與シ玉フテ、子々孫々ノ榮華、末代猶盛シナリ。若一國ニ封セラレバ、榮衰カハルベキニ、古今榮衰ヲ知ラズ、子孫ノ福樂窮リナキハ、先祖ノ道正ガ成功、且ツ禪師ノ深恩ニアラズヤト云云。

師又解毒圓ノ方ヲ附與シ玉ヘテ、子々孫々ノ榮營、末代ノ猶盛シ成ガ爲也。若シ一國ノ主ニ封セラレバ、榮衰量ルベカラズ。古今榮衰ヲ不知而、子孫ノ福樂窮リナキハ、先祖ノ道正ガ成功、且ツ大師ノ深恩ニ非哉。

師亦解毒圓ノ方神仙傳ノ一卷ヲ附與シタモフ。榮衰計ルベシ。古今榮衰ヲ知ラズ。子孫營榮、末代猶盛ナリ。若一國ニ對セラレバ、榮衰計ルベシ。古今福樂窮リナキワ、先祖道正ガ成功、且又師ノ深恩ニ非スヤト云云。

○天福元年
宇治に禪院を
開創

十二、師住持弘法之事附白山詣之事

人王八十六代四條院天福元年癸巳ノ春、師ノ御歲三十三、于時弘誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シテ、伽藍地ヲ洛ノ東南ナル宇治ノ縣深草ノ郷極樂寺旧跡ヲ見立テ、禪苑ヲ營ミ、七堂悉ク成就シテ、即チ師ヲ請シ開山第一ノ祖ト仰キ奉ル。

十二ニハ師住持弘法之事附白山詣之事

全八十六代四條院ノ天福元年癸巳ノ春、師御歲三十三、時ニ弘誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シテ、伽藍ノ地ヲ洛ノ東南ナル宇治ノ縣深草ノ郷極樂寺ノ旧跡ヲ見立テ、禪院ヲ營メリ。七堂尽ク成就シテ、即チ師ヲ請シテソ開山第一ノ祖ト仰キ奉ル。

十二 師住持弘法之事 附白山詣之事

人王八十六代四條院天福元年癸巳ノ春、師ノ御年三十三、于レ時弘誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シテ、伽藍地ヲ洛ノ東南ナル宇治ノ縣深草ノ郷極樂寺ノ舊跡ヲ見立テ、禪苑ヲ營。七堂悉ク成就シテ、即チ師ヲ請シテ開山第一ノ祖ト仰ギ奉ル。

十二、師住山弘法之事 并白山詣之事

人王八十六代四條院ノ天福元年癸巳ノ春、師ノ御歲三十三、于時弘誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シテ、伽藍ノ地ヲ洛ノ東南ナル宇治縣深草郷極樂寺ノ旧跡ヲ立テ、禪苑ヲ營リ。七堂悉ク成就シテ、即チ師ヲ請シ開山第一ノ祖ト仰キ奉ル。

○嘉禎三年
開堂演法

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十七ノ十月十五日ニ開堂演法シ玉エリ。其規儀次第悉ク皆太白ニ則リ、衲子雲ノ如ク集リ、檀越斗ノ如クニ仰ク。寺ヲ勅シテ觀音導利院興聖寶林寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ三十七ノ十月十五日ニ開堂演法シ玉ヘリ。其ノ儀規次第悉ク皆太白ニ則レリ。衲子雲ノ如ク集リ、越檀斗ノ如クニ仰ク。寺ヲ觀音導利院興聖寶林禪寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十七ノ十月十五日ニ開堂演法シ玉エリ。其儀規次第悉ク皆大白ニ則レリ。衲子雲ノゴトク集リ、檀越星ノ如クニ仰グ。寺ヲ勅シテ觀音導利院興聖寶林寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十七ノ十月十五日ニ、開堂演法シ玉フ。其儀規次第、悉ク皆太白ニ則レリ。衲子雲如ク集リ、檀越斗ノ如ニ仰ク、寺ヲ觀音導利院興聖寶林禪寺ト稱ス。

神足弟子雲集

神足ノ弟子ニハ懷井、僧海、詮惠

神足弟子ニハ懷井、僧海、詮惠等、

神足ノ弟子ニハ懷井、僧海、詮慧

神足ノ弟子ニワ懷井、僧海、詮慧

<p>懷井等</p>	<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>	<p>由良の覺心モ師ノ化益昌ニナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受ク。殊ニ菩薩戒ヲ授レリ。此覺心ハ建仁六年ニ入宋シ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益ノ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セラレ、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授カレリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、歸朝シテ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>由良ノ覺心天師ノ化益ノ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受ケ、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セラル。師已ニ興聖寺ニ住シマスコト、前後十一年。</p>
<p>○寛元元年 北越入山 興聖寺を詮慧に託す</p>	<p>然而人王八十七代後嵯峨院ノ寛元元年癸卯ノ夏、師ノ御歳四十三、于時如淨禪師ノ御遺誡ヲ思召シ、繁花ノ地、爰ニ久居ル可ラストテ興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田之郡志比ノ山ニ入り、手ヲ柴ノ庵ヲ結ヒ、安閑ト御座ス。此時ノ御詠歌ニ</p>	<p>然シテ人王八十七代後嵯峨ノ院寛元元年癸卯ノ夏、師御年四十三、時ニ如淨禪師ノ御遺誡ヲ思召シ、繁花ノ地、爰ニ久ク居ルベカラズトテ、興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ツカラ柴ノ菴ヲ結ヒ、安閑ト御居。此ノ時ノ御詠歌ニ</p>	<p>然而人王八十七代後嵯峨院ノ寛元元年癸卯ノ夏、師ノ御年四十三、于レ時如淨禪師ノ御遺誡ヲ思召、繁花ノ地、爰ニ久シクヲルベカラズトテ、興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ツカラ柴ノ庵ヲ結ヒ、安閑ト御坐ス時、御詠歌ニ、</p>	<p>然ジテ人王八十七代後嵯峨ノ院キ寛元元年癸卯ノ夏、師ノ御歳四十三、于時ニ如淨禪師ノ御遺誡ヲ思メシ、繁花ノ地、爰ニ久ク居ルベカラズトテ、興聖寺ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ヲ柴ノ菴ヲ結ヒ、安閑ト御居ス。此時ノ御詠歌ニ</p>
<p>○花紅葉雪ノ明ホノ見シ事モ思エ ハクヤシ色ニ見テケル 然レ道香徳色ノ泄ル、事、弥々潜シテカクレズシテ、増々止テヤマサレバ、衆々ノ大臣官長諸國ノ刺</p>	<p>○花紅葉雪ノ曉ボノ見シ事ヲ思ヘ バクヤシ色ニメデケル ト然レ道香徳色ノ池ル、事ト、弥々潜バ弥々潜レズ、已レバ、衆々已ス、衆ノ大臣官長諸國ノ</p>	<p>花紅葉雪ノ曉ホノ見シ事モ思エ バ悔シ色ニ見テケル 然ドモ道香徳ノ色ノ泄ルル事、彌々潜レズシテ、増々止メテ止ザレバ、衆々大臣官長諸國ノ刺史</p>	<p>花紅葉雪ノ曉ボノ見シコトヲ思 ベクヤシ色ニメテケル ト、然レ道香徳色ノ池ル事、イヨク潜セバ、イヨクアラワレ、已レドイヨク已ズ、衆ノ大臣官</p>	

「弘法靈場」

波多野義重、
寺院を結構

○寛元二年
大仏寺開堂
瑞相

<p>史達、梵宇ヲ造リテ、師ヲ延ント 欲スル人、十有三人ナリ。</p>	<p>中ニ就テ越前ノ大守波多野雲州義 重、佛法ニ帰投スル事、信心甚タ シ。師庵處最モノ佳境ナレハ、師 ノ為ニ精舎ヲ造シテ願シカハ、 師止事ヲ不得シテ祈ニ應ジ玉フ。 義重歡ヒ、秋七月一野ノ東、傘松 ノ峯ノ下ニ於テ、自ラ土籠ヲハコ ビ、木ヲ曳テ、遂ニ精舎ヲ結構セ リ。</p>	<p>刺吏等、梵宇ヲ造リテ、師延ト欲 スル者、十有三人ナリ。</p>	<p>中ニ就テ越前ノ大守波多野雲州義 重、佛法ニ皈投シテ、信甚タアツ シ。師ノ菴處最モノ佳境ナレバ、頻 リニ師ノ為ニ精舎ヲ造シテ願 フ。師モヤム事ヲ得ズシテ、其ノ 祈ニ應ジ、義重歡ヒ、秋七月一 野ノ東シ、傘松ノ峯ノ下ニ於テ、 自手土籠ヲハコビ、木ヲ曳テ、遂 ニ精舎ヲ結構セリ。</p>	<p>就レ中越前之太守波多野雲州義重、 佛法ヲ歸投スル事、信心甚ダ厚 シ。師庵處最モノ佳境ナレバ、師ノ 爲ニ精舎ヲ造シテ願イ奉ル。 師止ム事ヲ得ズシテ、意ニ應ジ玉 フ。義重歡ヒ、秋七月一野ノ東、 傘松ノ峯ノ下ニ於テ、自ラ土籠ヲ ハコビ、木ヲ曳テ、遂ニ精舎ヲ結 構セリ。</p>	<p>長諸國ノ刺吏等、梵宇ヲ造リテ、 師ヲ延ント欲スル者、十有三人。</p>	<p>中ニ就テモ越前太守波多野雲州義 重公、佛ニ皈授スルコト、信甚ア ツシ。師ノ菴處モツトモ佳境ナレ バ、頻ニ師ノ為ニ精舎ヲ造ランコ トヲ願ヘリ。師ヤムコトヲ不得シ テ、其祈ニ應ジ玉フ。義重歡ヒ、初 秋七月一野ノ東、傘松ノ峯ノ下ニ於 テ、自手土籠ヲハコビ、木ヲ曳テ、 遂ニ精舎ヲ結構セリ。</p>	<p>同二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就シ、 秋七月十八日ニ入院開堂マシマセ リ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山神形ヲ 現ジ、弁木叢林迄喜ベル色アリ。 師是ゾ吉祥ノ驗ナリトテ、山ヲ吉 祥ト号シ、寺ヲ大佛ト名ケリ。</p>	<p>同ク二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日ニ入院開堂マシ マシセリ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山 神形ヲ現シ、弁木叢林花ヲ放開 ス。誠ニ是レゾ吉祥ノシルシナリ トテ、山ヲ吉祥ト号シ、寺ヲ大佛 ト名ケリ。</p>	<p>同二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日ニ入院開堂マシ マセリ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山神 形ヲ現ジ、弁木叢林迄喜ベル色ア リ。師是ゾ吉祥ノ驗シ也トテ、山 ヲ吉祥ト號シ、寺ヲ大佛ト名ケリ。</p>	<p>同ク二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日入院開堂マシマ セリ。時ニ天龍雲ヲ興シ、山神形 ヲ現シ、弁木叢林喜ベル色アリ。 師是ゾ吉祥ノシルシナリトテ、山 ヲ吉祥ト号シ、寺ヲ大佛ト名ケ リ。</p>	<p>師義重ニ語リテ言ク、此山ノ主山 ハ高く、案山ハ低シ。東ノ丘ハ白 山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪ハ青海ノ 竜宮ニ接ス。峯巒重疊ニシテ、人 烟ヲ隔ツルハ、實ニ弘法ノ靈場也 ト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依シ ト。</p>	<p>師時ニ義重ニ語テノ玉ハク、此ノ 山ハ主山ハ高く、案山ハ低シ。東 シ岳ハ白山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪 ハ青海ノ龍宮ニ接ス。峰巒重疊ニ シテ人烟ヲ隔。實ニ弘法ノ靈場タ リト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依 シト。</p>	<p>師義重ニ語リテ曰、此ノ山ノ主山 ハ高く、案山ハ低シ。東岳ハ白山 ノ神廟ニ連リ、西溪ハ青海ノ龍宮 ニ接ス。峯巒重疊ニシテ、人烟隔 ツルハ、實ニ弘法ノ靈場也ト。義 重聞テ歡喜シ、益々歸依シテ、誠</p>	<p>師義重ニ語リテノ玉フハ、此山ワ 主山ハ高く、案山ハ低シ。東ノ岳 ワ白山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪ワ青 海ノ龍宮ヲ接ス。峯巒重疊ニシ テ、烟ヲ隔ツ。實ニ弘法ノ靈場タ リト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依シ</p>
---	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	--	--

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>テ、誠ニ須達ガ佛ニ歸シケルニ似タリ。未タ幾ナラザルニ、四衆集ルヲ、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ紫雲山ヲ覆イ、香風吹送テ諸堂ヲ廻リ、尚方丈ニ鬢キ、板戸ニ畫ク如ニ、遂ニ消ヘズ。其戸近キ頃迄宝物トシテ有シガ、朽敗シテ今ハ無シ。惜哉。</p>	<p>○寛元四年 大仏寺を永平寺と改称</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御歳四十六、六月十五日上堂アリ。時ニ大佛ヲ改テ永平ト称スナリ。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始テ佛法ヲ弘メシカ爲、仏経ヲ持シ來テ、仏法大ニ弘通セリ。吾宗始テ日本ニ傳來ルモ、亦彼ノ二師ニ異ナラズ。故ニ永平ト号シ玉フ。</p>	<p>白山參詣 権現の歌</p>
<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>シテ、須達ガ佛ニ皈シケルニ似タリ。未タ幾クナラザルニ、四衆集事、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆ヒ、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、ナヲ方丈ニタナビキ、板戸ニ粘シ畫クガ如クシテ、遂ニ消ヘズ。其戸近キ頃迄宝物トシテアリシガ、朽敗シテ今ハナシ。</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御年四十六ノ六月十五日ニ上堂アル。時ニ大佛寺ヲ改メ永平寺ト称ス。其ノ意ハ昔シ後ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始メテ佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通ス。今始テ吾宗日本ニ傳ヘ來ルモ、亦夕彼ノ二師ノ如シ。故ニ似テ永平ト称シ玉フ。</p>	<p>同ク九月上旬ニ、師情々神恩ヲ謝セント思シ召シ、懷葬、僧海等ヲ誘イ、白山エ詣テマシマス。頃シモ秋ノ未ヘナレバ、御社ノ邊モ皆紅葉ノ錦ナリケルニ、師ミ玉フ</p>	
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ニ須達ガ佛ニ歸シケルニ似タリ。未ダ幾多ナラザルニ、四衆集ル事、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆ヒ、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、尚方丈ニ鬢、板戸ニ畫クガ如シテ、遂ニ消エツ。其戸近キ頃迄實物トシテ有シガ、朽敗シテ今ハナシ。惜哉。</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御年四十六、六月十五日上堂有リ。時ニ大佛ヲ改テ永平ト稱ス也。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始メテ佛法ヲ弘メンガ爲、佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通セリ。吾宗始テ日本ニ傳エ來ルモ、亦彼ノ二師ニ異成ラズ。故ニ永平ト號シ玉フ。</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラノ神恩ヲ謝セント思召、懷葬、僧海ヲ誘ヒ、白山エ詣デマシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師見玉エテ、神祠ニ向テ</p>	
<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>テ、須達カ佛ニ皈シケルニ似タリ。未タ幾ナラザルニ、四衆アツマル事、雲霞ノゴトシ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、方丈ニタナビキ、板戸ニ粘シ畫クガ如クシテ、遂ニ消ヘズ。其戸近頃マテ宝物トシテ有シカド、朽敗シテ今ハナシト。</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御歳四十六、六月十五日ニ上堂アル。時ニ大佛ヲ改メ、永平寺ト称セリ。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始テ佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通ス。今吾宗始テ日本ニ傳來ルモ、亦彼ノ二師ノ如ク、故ニ永平ト号スト。</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラノ神恩ヲ謝セント思召、懷葬、僧海等ヲ誘ヒ、白山ヘ詣テマシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社ノ邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師御覽マシマシ</p>	

二神携帯由来

龍天・権現

<p>是白山権現、何トシテカ紅葉ナルト問玉へバ、御戸則チ豁ト開ケテ、妙ナル神音ニテ</p>	<p>○白露ノヲノカ容ヲ其俛ニ、紅葉ニヲケバ紅井ノ玉</p>	<p>ト答エ玉フ。是ハ此神明ノ御詠歌ナレバ、其意味甚タ深キ到テハ、凡情ノ知ル可キ理ニ非ス。唯師ノ三玄旨ヲ知ロシメシ、乃チ再拜シテ御下向遊シケル。</p>	<p>龍天・権現</p>
<p>テ、神祠ニ向テ既ニ是白山明神、何ントシテカ紅葉ナルト問ハセケレバ、御戸スナハチバツト開ケ、イト妙ナル神音ニテ</p>	<p>○白玉ノヲノガ容ノ無キ俛ニ、紅葉ニヲケバ紅ノ玉</p>	<p>ト御答玉フ。是レバ神明ノ御詠歌ナレバ、其ノ意味ノ甚深ニ至テハ、凡情ノ知ルベキ理ニ非ス。唯夕師ノミ玄旨ヲ知シメシ、乃チ再拜シテ御下向遊シケリ。</p>	<p>龍天・権現</p>
<p>既ニコレ白山権現、何トシテカ紅葉成ト問玉へバ、御戸則豁ト開ケ、イト妙ナル神音ニテ、</p>	<p>白露ノ己ガ容ノナキ儘ニ、紅葉ニヲケバ紅ノ玉</p>	<p>ト御答エアリ。這レハ是レ神明ノ御詠歌ナレバ、其意味甚タ深キニ到テハ、凡情ノ知ルベキ理ニ非ズ。唯師ノミ玄旨ヲシロシ召シ、乃チ再拜シテ御下向遊シケル也。</p>	<p>龍天・権現</p>
<p>テ、神祠ニ向テ、既ニ是白山、何トシテカ紅葉ナルト、問ワセケレバ、御戸スラノト開ケテ、キト妙ナル神音テ、</p>	<p>白玉ノヲノガ容ヲソノ俛ニ、紅葉ニヲケバ紅ナイノ玉</p>	<p>ト御答シ玉フ。是レワ、神明ノ御詠歌ナレバ、其イミノ甚深ニ至テハ、凡情ノ知ベキ理ニ非ズ。唯師ノミ玄旨ヲシロシ召、又乃再拜シテ御下向シ玉フ。</p>	<p>龍天・権現</p>

故ニ吾宗ノ僧徒常ニ竜天白山ノ二神ヲ仰テ求法ヲ禱ル。人果シテ靈

吾宗ノ僧徒、恒ニ竜天白山ノ二神ヲ仰テ求法ヲ禱ル者、果シテ靈應

故ニ吾宗僧徒常ニ龍天白山ノ二神ヲ仰デ、求法ヲ禱ル。人果シテ靈

故ニ吾宗ノ僧徒恒ニ龍天白山ノ二神ヲ仰テ、求法ヲ禱ル者、果シテ

或日、師歸朝マシマシテ、河尻ニ着船ノ辰、彼龍天鉢囊裡ヨリ光ヲ放テ、白雲ニ乗シテ賀州ノ白山ニ飛セ玉フ。是ニ由テ此ヲ觀レバ、龍天モ又白山権現モ一體ノ分身ニシ、支那ニハ招寶七郎ト稱シ、天竺ニテハ龍天ト稱シ、日本ニテハ但縹ニオキ白ニヲキ、信心如法ナルトキハ、一切ノ所願其祈ニ應ジ玉ハズト云事無シ。是去來諸尊、本地八十一面ノ觀世音、三國應化ノ靈神也。

或ハ曰ク、師皈朝マシマシテ、河尻ニ着船ノ時、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光明ヲ放チ、白雲ニ乗シテ賀州ノ白山ヘ飛玉フ。是レニ此ヲ見レバ、龍天モ亦タ白山明神ニテ、支那ニハ招寶七郎大権菩薩ト稱シ、天竺ニテハ竜天ト稱シ、日本ニテハ去來諸尊、本地八十一面觀音、是三國應化ノ靈神ナリ。但縹ニヲキ白ニヲキ、信心如法ナルトキハ、一切ノ祈願、其祈ニ應ジ玉ハズト云事ナシ故ニ。

或云、師歸朝マシマシテ、河尻ニ著船ノ時、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光ヲ放テ、白雲ニ乗ジテ賀州ノ白山ニ飛ビ玉フ。是ニ由テ是ヲ觀レバ、龍天モ又白山権現モ、一體分身ニシテ、支那ニハ招寶七郎ト稱シ、天竺ニテハ龍點ト稱シ、日本ニテハ但縹ニオキ白ニオキ、信心如法成時ハ、一切ノ所願其祈ニ應ジ玉ワズト云フ事ナシ。是レ去來諸尊、本地八十一面觀世音、三國應化ノ靈神也。

或云ク、師皈朝マシマシテ、河尻ニ着船アリケレバ、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光明ヲ放チ、白雲ニ乗ジテ、賀州ノ白山ヘ飛玉フ。是ニ依テ此ヲ見バ、龍天モ亦白山権現ニシ、支那ニハ招寶七郎ト稱シ、天竺ニテワ龍天ト稱ス。日本ニテワ去來諸尊、本地ワ十一面觀世音、是三國應化ノ靈神ナリ。但縹ニ置、白ニ置、信心如法ナルトキワ、一切ノ諸願、其祈ニ應ジ玉ワズト云フコトナシ。

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>應ニ預ラザルハ無シ。実ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、更ニ誤リ無キ者也。</p>	<p>○宝治元年 鎌倉下向 時頼、菩薩戒を受く 後嵯峨院紫衣を賜う</p> <p>(後出)</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ニ預ラサルハナシ。實ニ弘誓深如海歴劫不思議ノ謂ハ、サラニアヤマリナキ者也。</p>	<p>十三、時頼請レ師建ル寺事附師 救亡靈ニ並受レ勅事</p> <p>十三ニハ勅シテ号并ニ紫衣ヲ賜フ事附時頼寺ヲ建テ師ヲ請スル事并師亡靈ヲ救玉フ事</p> <p>人王八十七代後嵯峨ノ院、師ノ道譽叡聞ニ達シ、紫衣ヲ賜リ、號ヲ佛法上人禪師ト輪言ニテ、三度遣御勅使ヲ賜リ、三度辞スレト許シ玉ハス。終ニコレヲ納受シ玉フテ、即作ニ一偈曰ク、 永平雖ニ山浅ハ、勅命重キ重々却レ被レ笑ニ猿鶴、紫衣一老翁 今上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗚呼末世ノ愚僧ハ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲガナト名聞利養グルシキハ、何事ゾヤ。慚愧裏ニ向テ、此ノ意ヲ通ズベキ者也。</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>應ニ預カラザルハナシ。實ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、更ニ誤リナキ者也。</p>	<p>(後出)</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>靈應ニ預ラザルワナシ。実ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、サラニアヤマリナキ者也。</p>	<p>(後出)</p>
<p>○宝治二年 永平寺帰山 時頼に詠歌を</p>	<p>于時師ノ御歳四十七、人王八十八代後深草院宝治元ノ末ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼公、師ノ徳</p>	<p>其後子師ノ御四十七ニテ、人王八十八代後深草院ノ宝治元年丁未ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼、</p>	<p>于時師ノ御年四十七、人王八十八代後深草院寶治元年丁未ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼公、師ノ</p>

授ける

望ノ一時二重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ招ク。師兼テ東國ヲ一件セバヤト思食処ニ、幸ナリトテ相州ニ行キ玉フ。時頼大ヒニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ報ジテ、菩薩戒ヲ受ケ、仰礼供養セル事、精誠ヲ盡セリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スル事、遠近ヲ不レ云、師ノ至德亦教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人授戒ノ者幾千万人ト云數ヲ知ラズ。鞠多尊者ノ昔シ惠能大師ノ古ヘモ、カウソト思イ知ラレタリ。時頼新ニ寺ヲ創シテ師ヲ請セラル。師辭シテ就玉ワズ。

師ノ德望ノ一時二重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ請シケル。師モ兼テ東國ヲ一見セバヤト思召ス処ナレハ、幸ニ相陽ニ趣キ玉フ。時頼大ニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ執テ、菩薩戒ヲ受、朝暮ノ供養セル事、精誠ヲツクセリ。更ニ道俗男女禮謁スル事、遠近ヲ云ハス。師ノ至慈亦タ教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人受戒ノ者、千万人ト云事ヲ知ラズ。鞠多尊者ノ昔シ、慧能大師ノ古モ、角ゾト計リ知ラレケルナリ。時頼最明寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師固ク持シテ就キ玉ハズ。

ノ德望ノ一時二重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ招ク。師兼テ東國ヲ一見セバヤト思召ス處ニ、幸成トテ相州ニ行玉フ。時頼太夕悦ヒ便チ弟子ノ禮ヲ報ジテ、菩薩戒ヲ受ケ、仰禮供養セル事、精誠ヲ盡セリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スル事、遠近ヲ云ズ、師ノ至慈亦教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人受戒ノ者、幾千萬ト云フ數ヲ知ズ。鞠多尊者ノ昔シ、惠能大師ノ古モ、カクゾト計リ知レタリ。時頼新ニ寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師辭シテ就キ玉ハズ。

德望ノ一時二重ヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲマシク。師兼テ東國ヲ一見セバヤト思シメス処ニ、幸ナレバトテ相陽ニ行玉フ。時頼大ニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ執テ、菩薩戒ヲ受ケ、仰禮供養セル事、精誠ヲツクセリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スルコトキ、遠近ヲ不レ云。師ノ至慈教ヘテ不倦、機ニ隨テ說法シ玉フ。度人授戒ノ者、幾千万人ト云フコトヲ不知。鞠多尊者ノ昔、慧能大師ノ古モ、カクヤト計知レケル。時頼新ニ寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師辭シテ就玉ワズ。

時頼の事
建長寺建立

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ皈リ玉フ。或云、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守北条時頼、泰時ノ孫、時氏が二男也。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽、戒ヲ受ク。師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌並ニ法華經ノ二十八品ヲ詠ノ、時頼ニ授玉フ四十八首ハ、皆イロハヲ冠字ニ安シ今往々ニ書傳テ拜見スル者多シ。時頼后入道ノ、最明寺ト云フ。

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ振テ越州ニ皈リ玉フ。或曰ク、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守泰時ノ孫、時氏ノ二男ナリ。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ授リテ、師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌並ニ法華經ノ二十八品ヲ詠シテ、授ケ玉フ四十八首ノ歌ハ、皆ナ以呂波ヲ冠字ニ安キエリ。今二世ニ傳テ有リ、見ル処ナリ。時頼後チハ入道シテ師

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ歸リ玉フ。或云、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守北條時頼、泰時ノ孫、時氏が二男也。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ受ク。師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌并法華經ノ二十八品ヲ詠ジテ、時頼ニ授ケ玉フ四十八首ハ、皆イロハヲ冠字ニ安ジ、今往々ニ書傳テ拜見スル者多シ。時頼後入道シテ、最明寺

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ皈リ玉フ。或曰ク、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守時頼、泰時ノ孫、時氏が二男ナリ。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ受ク。師示玉フニ、四十八種ノ詠歌并ニ法華經ノ二十八品ヲ詠ジテ、時頼ニ授玉フ。二十九種、今後世ニ書傳テ、拜見スル僧徒ノアリトナン。時頼后ニ入道シテ、最明寺ト云フ。師爲ニ造

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>師ノ為ニ造レル寺ハ、鎌倉ノ建長寺是ナリ。建長元年ニ創シケレバ、年号ヲ寺号ニナス。</p>	<p>ノ為ニ造ル最明寺ヲ鎌倉ノ建長寺ト改テ、建長ノ年号ヲ寺号トスレバナリ。</p>	<p>ト云フ。師ノ為ニ造レル寺ハ、鎌倉ノ建長寺是也。建長元年ニ創シケレバ、年號ヲ寺號ニナス。</p>	<p>ル寺ワ、鎌倉ノ建長寺是ナリ。建長元年ニ創スレバ、年号ヲ寺号トス。</p>
<p>蘭溪道隆に開山を請す</p>	<p>師ノ教ニ依テ寛元元年ノ比ヨリ、蜀ノ國ヨリ道隆蘭溪禪師ト云フ知識、來朝シテアリケルヲ請シテ、此ノ寺ノ開山ト仰レケルト也。</p>	<p>寛元四年ニ蜀ノ國ヨリ、道隆蘭溪ト云シ知識來朝シテアリケルヲ、時頼建長元年ニ請シテ、此寺ニ開山ト仰ケル也。</p>	<p>寛元四年ニ蜀ノ國ヨリ、道隆蘭溪ト云シ知識ノ來朝シテ有リケルヲ、時頼建長元年ニ請シテ、此寺ニ開山ト仰レケルトナリ。</p>
<p>星井女人に血脈授与</p>	<p>亦タ師鎌倉ニテ星井女人ノ亡魂血脈ヲ授ケテ、生天セシメ玉フト、世ニ言傳エタリ。</p>	<p>又鎌倉ニテ星井ノ女人ノ亡魂ヲ血脈ヲ授ケ、生天セシメ玉フト、世ニ傳ヘテ、物語リシケル。</p>	<p>又師鎌倉ニテ星ノ井ノ女人ノ亡魂ヲ、血脈ヲ授ケテ、生天セシメ玉フト、世ニ語り傳ヘタリ。</p>
<p>湯尾にて疫病を度す</p>	<p>亦タ鎌倉ヨリ坂山ノ時キ、湯ノ尾峠ニテ、疫神ニ逢玉フ事有テ、説法シテ疫神ヲ度シ、師ハ一生抱瘡ノ役ヲ免レ玉フ事、是レ亦人ノ知ル処ナリ。疫癘ノ公案ハ猶若ト云</p>	<p>又鎌倉ヨリ歸山ノ時、越前ノ湯尾トウゲニテ、疫神ニ逢イ玉キテ、説法シテ疫神ヲ度シ、一生抱瘡ノ役ヲ脱シ玉フ事、是又人ノ知處也。又疫病ノ公案ハ猶若ト云</p>	<p>又鎌倉ヨリ坂山時、伊能峠ニテ疾神ニ逢玉ウテ、説法シテ疾神ヲ度シ、師一生抱瘡ノ役ヲ脱シ玉フト、是亦人ノシル攸ナリ。又疫癘ノ公案ハ猶若ト云、諸寺院ノ室中ニ參スル者ワ、拜視スベシ。智慧愚癡通般若ト云頌、戸札ニ書テ彼防グト云。</p>
<p>師永平ニ皈り、増々説法シ、利生員ヲ知ラス。飛禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ怖シテ聽衆ニ交リテ</p>	<p>師永平ニ皈リ玉フテ、増々説法シ、利生員ヲシラザリキ。飛禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ畏聽聞</p>	<p>師永平ニ歸リ、増々説法シ、利生員ヲ知ズ。飛ビ禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ怖シテ聽衆ニ交リテ</p>	<p>師永平ニ皈リ、マス／＼説法シ、利生員ヲシラス。飛禽走獸蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ畏聽衆ニ交リテ法</p>

「血脈度靈」

法ヲ聽シナリ。

本州ニ藤原ノ永平伝者、師ヨリ優婆塞戒ヲ受ケ信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇トナリ、又愛欲ノアサマシク、嫉妬ノ晴深シテ免レ難ケレバ、又師是ヲ愍テ菩薩戒ノ血脈ヲ授ケ玉ヘリ。脩ニ變シテ男子ノ身トナリ、便チ師ヲ禮謝シ、光明ニ乗シテ天ニ登ル。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至リナリ。然ルニ近代ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ヲ見解ニ苦シンテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ言ヲ悪ク心得テ、常ヲ以テ常ニカエスト云フヲ知ラザルナリ。

セシトナリ。

本州藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲ受テ信心ノ善男子ナリ。其ノ愛妾死シテ蛇トナリ、亦又愛欲ノ淺マシク、嫉妬ノ情深カケレバナリ。師ヨリ是ヲ愍テ菩薩戒ヲ授ケ、血脈ヲ授ケ玉エバ、忽チ變ジテ男子トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ、光明ヲ放チ天ニ登リキ。嗚呼法脈ノ功德不可思議ノ至リナリ。然ルニ近年ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルウテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如クス。不立文字教外別傳ノ言フヲ悪シク心得シ故カ、誠ニ獅子身中ノ虫ナリ。同シク修行イタシテ、天魔外道ノ見解ニシテ、禪天魔トモ云ベキカ、慎ムベキ事トナリ。

法ヲ聞也。

本州ニ藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲウケ信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇ト也、又愛欲ノ淺マシク、嫉妬ノ情深シテ免レ難ケレバ、又師是ヲ愍テ菩薩戒ノ血脈ヲ授ケ玉エリ。忽チ變ジテ男子身トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ、光明ニ乗ジテ天ニ登リキ。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至リ也。然ルニ近代ノ悟リニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルシンデ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ語ヲ悪シク心得テ、常ヲ以テ常ニカエスト云フコトヲ不知也。

ヲ聽シトナリ。

本州ニ藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲ受信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇トナリ、又愛欲ノ淺マシク嫉妬ノ情フカケレバナリ。師是ヲ愍ンデ、菩薩戒ノ血脈ヲ授玉ヘバ、忽チ變ジテ男子ノ身トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ光明ニ乗ジテ天ニ登トナリ。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至ナリ。然ルニ近代ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルフテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ言ヲ悪ク心得、不解之迷冥ニヨルイエナリ。可恐可鎮。

○建長元年
羅漢供養

同建長元年ノ春正月十五日、始テ羅漢供養ヲ行イ玉フ。時ニ五百ノ大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマス。羅漢松トテ今ニ有リ。已ニ供養了レバ、羅漢皆師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下セリ。是モ今ニ傳テ宝物タリ。

茲ニ建長元年ノ春正月十五日ニ始テ、師羅漢供養ヲ行イ玉フニ、十六及ビ五百ノ大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマス。羅漢松トテ今ニ有テ見ル処ナリ。已ニ供養了レバ、羅漢モ師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下ス。是モ今ニ傳テ宝物ト成ル。

建長元年ノ春正月十五日、始テ羅漢供養ヲ行ヒ玉フ。時ニ五百大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止マリマス。羅漢松トテ今ニ有リ。已ニ供養了レバ、羅漢皆師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下セリ。是モ今ニ傳テ寶物タリ。

同建長元年ノ春正月十五日ニ、始テ羅漢供養ヲ行玉フ。時ニ五百ノ大羅漢達、空ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマシマス。羅漢松トテ今ニアリ。已テニ供養了ヌレバ、羅漢達師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以山門ノ内ニ擲下ス。是モ今ニ傳テ宝物ナリ。

瑞相

後嵯峨院紫衣を賜う

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女、羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ植ケン。カ、ル未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙流シ、感嘆セザル者ハナシ。又大布薩ヲ行イ玉フ。今ニ到テ怠タラス。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等昔シ如何ナル善根ヲ殖ケン。未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ流ササルハナシ。亦菩薩ヲモ始テ行ヒ玉フ。今ニ到テ退轉アル事ナシ。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ植シケン。未曾有ノ勝會ニ遇イ奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ落シ、感嘆セザル者ハナシ。又大布薩ヲ行ヒ玉フ。今ニ到テ怠タラズ。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>于時道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜。師ノ道德ヲ思ヒヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ殖ケン。未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ落ササルワナシ。又大布薩ヲ行ヒ玉フ。今ニ到テ怠タラズ。</p>
<p>後嵯峨院道譽聽召シ、紫衣ヲ賜フトテ號ヲ佛法禪師ト勅シ玉フ。師三度辭シ玉エモ不許シテ賜レバ、卒ニ此ヲ納受シ玉ヘリ。則有レ偈</p>	<p>(前出)</p>	<p>後嵯峨院師ノ道譽ヲ聽シ召、紫衣ヲ賜フ。號ヲ佛法上人禪師ト勅シ玉フ。師三度辭スレドモ許シ玉ハネバ、卒ニ此ヲ納受セリ。則在レ偈、</p>	<p>人王八十七代後嵯峨ノ院、師ノ道譽ヲ聽シメシ紫衣ヲ賜リ、號ヲ佛法上人禪師トシ玉フ。師三度辭スレモ不許、卒ニ之納受シ玉フ。依而作偈曰ク、</p>
<p>○永平雖山淺、勅命重々重、却被猿鶴笑、紫衣一老翁ト 上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗟末代ノ愚僧隨俗名利ノ輩ハ、本師ノ深志ヲ失シ、謾ニ金銀ヲ入レ、紫衣ヲカナト名聞ニ眼睛ヲコラシ、這裏ニ大事者ルヲ知ラザルハ何ソヤ。今日遠流ヲ汲テ、師ノ厚恩ヲ報ント、欲セハ、自己ニ省テ、裏ニ慚愧ヲ知りテ、此意ヲ通徹セヨ。光陰空ク送ルコト莫レ。</p>	<p>「永平雖山淺、勅命重重重、卻被猿鶴笑、紫衣一老翁」 上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗟末代ノ愚僧隨俗名利ノ輩ハ、本師ノ深志ヲ失シ、謾ニ金銀ヲ入レ、紫衣ヲカナトテ名聞ニ眼睛ヲコラシ、這裏ニ大事アルコトヲ知ザルハ何ソヤ。今日遠流ヲ汲テ、師ノ厚恩ヲ報ント欲セバ、人人自己ヲ省テ、裏ニ慚愧ヲ知りテ、此意ヲ通徹セヨ。光陰空送ル事勿レ。</p>	<p>永平雖山淺、勅命重々々、却被猿鶴、紫衣一老翁 上増欽重ヲ加ヘ玉フ。嗟末代ノ愚僧ワ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲカナトテ名聞クルシキワ何ソヤ。慚愧裏ニ向テ此意ヲ通ズベキ者。</p>	<p>永平雖山淺、勅命重々々、却被猿鶴、紫衣一老翁 上増欽重ヲ加ヘ玉フ。嗟末代ノ愚僧ワ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲカナトテ名聞クルシキワ何ソヤ。慚愧裏ニ向テ此意ヲ通ズベキ者。</p>

○建長二年
義重藏經施入

亦建長二年ニ、義重公、藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。是偏ニ師ノ大徳ナル故乎。

同ク二年、波多野義重、藏經ヲ捨入セリ。

亦建長二年ニ、義重公、藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。是偏ニ師ノ大徳成ル故乎。

建長二年ニ、義重公藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。

○建長四年
遺教經講授

十四、師就レ病入洛之事附遷化示寂之事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女群ヲ成シ來テ、膝又膝ヲ重テ、日々ニ聽聞頻ナリ。異類モ亦數ヲ知らズ。此緣ニ預ラザルハ無シ。

事附師御遷化之事

十四ニハ師病ニ依テ入洛シ玉フ建長四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講ジ給フ。僧俗男女群ヲナシ來テ、膝ヲカサ子テ、日聽ソソビヤカス。異類モ亦數ヲ知らズ。

十四 師病ニ由テ入洛之事付師遷化示滅之事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女羣ヲナシ來リテ、膝又膝ヲ重テ、日ニ聽聞頻也。異類モ又數ヲ知らズ。此緣ニ預ラザルハナシ。

十四、師病ニ由テ入洛ノ事付師遷化ノ事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女群ヲナシ來テ、膝マタ膝ヲカサ子テ、日々ニ聽ソソビヤカス。異類モマタ數ヲ不知。

○建長五年
上洛

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示セリ。王公親族、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上シマイラセテ、良醫ヲ尽ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志ヲモタサレテ、止事ヲ得玉ハズシテ、

同ク五年癸丑ノ夏、病ヲ示給フ。王公親族達、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上ラセ玉エ。良醫ヲ尽シマイラセントテ、忠好卿ヨリ御迎イトシテ、光吉ヲ遣サル。師モ王公諸一門ノ志シモダシガタク、止事得ザレハ、

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示セリ、王公親族達、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上シ參ラセテ、良醫ヲ盡ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志ヲモタサレズ、止ム事不得シテ、

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示シ玉フ。王公親族タチ、師ノ不豫ヲ聽シメシ、洛ニ上セマイラセ、良醫ヲ尽ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志シモダシガタク、已コトヲ不得シテ、

西洞院逗留

其秋ノ八月五日、駕ニ命ジテ、洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始、御一門ノ公卿、御悅者テ、則チ西ノ洞院ニ館ヲ造リテ、師ヲ安坐マシマセリ。師自手額ヲ妙法蓮華經院ト遊シケルナリ。

其ノ秋八月五日、駕ニ命シテ洛ニ入り玉フ。忠好卿ヲ始メ御一門ノ公卿達、御悅ビ限りナク、乃チ西洞院ニ館ヲ造リ、師ヲ安坐マシマスナリ。師自手額ヲ妙法蓮華院ト遊ハシケルトナリ。

其秋ノ八月五日、駕ニ命ジテ、洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、御悅有テ、則西ノ洞院ニ館ヲ造リテ、師安坐マシマセリ。師自額ヲ妙法蓮華經院ト遊シケルト也。

其秋八月五日、駕ニ命ジテ洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、御悅ビニテ、乃西ノ洞院ニ館ヲ造リテ師安坐マシマスナリ。師自手額ヲ妙法蓮華經院ト遊ハシケルトヤ。

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
<p>僧俗礼謁 愛ニノ僧俗ノ禮謁スル者綿綿トノ一日モ不レ絶。師ノ偏ニ至慈ナル人ヲ教導スルニ、其根機ニ隨テ法ヲ説キ、人ヲ利益マス事不レ少。</p>	<p>愛ニテ僧俗礼謁スル者綿々トシテ一日モ絶エズ。師一重至慈ニテ人ニ倦玉ハズ、其根機ニ隨テ法ヲ説キ、人ヲ利益マシマス事少カラズトカヤ。</p>	<p>愛ニシテ僧俗ノ禮謁スル者、綿々トシテ一日モ不レ絶。師ノ偏ニ至慈人ヲ教導スルニ、其根機ニ隨テ法ヲトキ、人ヲ利益マス事不レ少。</p>	<p>愛シテ僧俗ノ禮謁スルモノ綿々トシテ、一日モ不レ絶。師ノ一ヘニ至慈人ニウマズ。其根機ニ隨テ法ヲ説、人ヲ利益マス事不レ少。</p>
<p>月見の御詠歌 三五ノ夜、明月ノ御詠歌有リ。 ○又見ント思シ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ子ラレヤハスル ト詠シ玉フ。人口ニ膾炙セル者也。其意ヲ推量ルニ、預メ亦寂シ玉ン事ヲ、知ロシメセバナリ。</p>	<p>三五夜ノ明月ニ詠歌マシマシケル。 ○マダ見ント思ヒシ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ寢ラレヤハセン カクヨミ玉イテ人口ニ膾炙セル者ナリ。其ノ御意ヲ推スニ、逆メ示寂シ玉フ事ヲ、知ロシ召シテナリ</p>	<p>三五ノ夜、明月ノ御詠歌有リ。 又見ント思ヒシ時ノ秋ダニモ、今宵ノ月ニネラレヤワスル、 ト誦ジ玉フテ、人口ニ膾炙セル者也。其心ヲ推計ルニ、アラカジメ示寂シ玉フ事ヲ、知シ召バ也。</p>	<p>三五ノ夜、明月ノ詠歌アリ。 マタ見ント思ヒシ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ子ラレヤワスル ト誦玉フ。人口ニ膾炙セル者アリ。其コ、ロヲ推ニ、逆メ示寂シ玉ワヌ事ヲ、知シメセバナリ。</p>
<p>天医治療 上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ヲ以テ計ルベキ非ス。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ遣シテ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如ナレバ、聖者ノ境界、凡身ヲ以テ量リ知ルベキ者ニ非ス。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ノ以テ計リ知ベキニ非ズ。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ヲ以テ量知ベキ者ニ非。</p>
<p>遺傷 同廿八日夜澡浴シ、淨衣ヲ整エ、辭衆、筆ヲ索テ書シテ云、 五十四年、照第一天、打箇躡跳、觸破大千、渾身無着処。咦。活陷黄泉。</p>	<p>同二十八日澡浴シテ、衣ヲ整ヘテ辭レ衆、筆ヲ索テ書テ曰、 五十四年、照第一天、打箇ノ躡跳、觸破大千、渾身無レ處レ覺、活ニ入レ黄泉。</p>	<p>同廿八日ノ夜澡浴シ、衣ヲ整エ、辭衆、筆ヲ素メテ書シテ云、 五十四年照第一天、打箇躡跳、觸破大千、渾身無レ所レ覺、活入ニ黄泉。</p>	<p>同ク二十八日ノ夜澡浴シ、衣ヲ整ヘ、辭レ衆ヲ、筆ヲ索テ書ノ曰、 五十四年、照第一天、打箇躡跳、觸破大千、咦。渾身無レ處レ覺、活入ニ黄泉。</p>

入寂	ト云了テ筆ヲ投 ^{マツ} ケテ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好ハ本ヨリ王公大臣朝野ノ遮 ^{マツ} 民迄、入寂ノ由ヲ聞テ、哀嘆セザル者ハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。生ルガ如シ。	筆ヲ投 ^{マツ} テ、怡然ト坐シナガラ化シ玉フ。忠好ヲ始メ王公大臣朝野ノ庶民迄、入寂シ玉フヲ聞テ、悲ミ哀ザルハナシ。況ヤ法恩ヲ受ケシ輩ヲヲヤ。	ト云テ筆ヲ投ジテ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好卿ハ本ヨリ王公大臣朝野ノ庶民迄、入寂ノ由ヲ聞テ、哀嘆セザル者ハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。	ト云テ、筆ヲ投テ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好元ヨリ王公大臣朝野ノ庶民マデ、入寂ヲ聞テ、悲ミ哀カザルハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。
瑞相	聖體ヲ留事三日、尊容猶室内ニ異香有テ、茶毘ノ後、多ニ舍利ヲ得タリ。	聖鉢ヲ留 ^ト ル事三日、尊容生ルガ如シ。室内異香アリ。茶毘シテ多ク舍利ヲ得タリ。	聖體ヲ留 ^ト ル事三日、尊容生ルガ如シ。室内異香有リ。茶毗ノ後、多ニ舍利ヲ得タリ。	聖留ルコト三日、尊容生ルガコトシ。室内ニ異香アリ。茶毘シテ多クニ舍利ヲ得タリ。
取骨、帰山建塔	季秋九月六日ニ懷 ^{マツ} 井及ヒ隨徒、骨ヲ納テ永平ニ皈 ^{マツ} リ、塔宇ヲ西北ノ隅ニ建ラレタリ。	即季秋九月六日ニ懷井及門人達、御靈骨ヲ、サメテ永平寺ニ皈 ^{マツ} リ、塔ヲ本山西北ノ隅ニ建ラレタリ。	季秋九月六日ニ懷井及門人達、靈骨ヲ納テ永平ニ歸 ^{マツ} リ、塔ヲ本山西北ノ隅ニ建タリ。	季秋九月六日ニ懷井ヲヨビ聞人達、御靈骨ヲオサメテ永平ニ皈 ^{マツ} リ、塔ヲ本山ノ西北ノ隅ニ建ラレタリ。
世壽・撰述書	世壽五十四歳、僧臘ハ四十四年ニナリ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集、衆寮清規、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。並行ル語録有リ。	御世壽五十四歳、僧臘四十四歳ニ成ラセ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集ト、亦衆僚清規ト業識ノ圖等、書ヲ作り玉フ。世ニ業ハル、処、亦語録有リ。	世壽ハ五十四歳、僧臘ハ四十四年ニ成玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集、衆寮清規、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。竝ニ世ニ行ル。語録有リ。	世壽五十四歳、僧臘四十四年ニナリ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集ト、衆寮清規ト、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。並ビ世ニ行ナワル。又語録有リ。
宋 義尹の事、入	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ、是ヲ携テ宋ニ入リ太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作ル。靈隱退耕、徑山處堂、語ニ書尾ニ着テ、悉ク是ヲ稱讚セリ。	其徒寒嚴法王人王八十九代龜山ノ院ノ文永元年甲子ニ、是ヲ携テ宋ニ入リ、太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作り、靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書ノ尾ニ着テ、悉ク是ヲ稱ス。	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ、是ヲバ攜テ宋ニ入リ、太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作ル、靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書尾ニ著テ、悉ク是ヲ稱讚セリ。	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ是ヲ推 ^{ツカサ} 乃テ太白ニ到ル。時ニ義遠無外、序ヲ作ル。靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書尾ニ着ケテ悉ク是ヲ稱讚セリ。

贊辭

奥書

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>嗚呼大師ノ悲願力ニ乗シテ、法ノ檀度トナリ、其契主上、名天下ニ聞、其全機大用ハ、得テ名ケ狀ルヘカラス。事緣軌迹又悉ク記ル事不能。少ニ傳聞スル處、鉅海ノ一滴ヲ記ル而耳。</p>	<p>嗚呼禪師、悲願力ニ乗シテ、法ノ檀度トナリ、道ハ契主上ニ名ハ天下ニ聞エ、全機ハエテ名ケカタドルベカラス事緣軌迹、亦タ悉ク記ス事克ス。少ニ傳聞スル處、大海ノ一滴ヲ記スノミ。</p>	<p>嗚呼大師悲願力ニ乗ジテ、法ノ檀度トナリ、其道契主上、名天下ニ聞エ、其全機大用ハ、得テ名ケ狀トル可ラス。事緣軌迹又悉ク記ス事アタワズ。小カニ傳聞スル處、鉅海ノ一滴ヲ記スル而已。</p>	<p>嗚呼、大師悲願力ニ乗ジテ法ノ檀度トナリ、其道契主上、名天下ニ聞溢レ、其全機大用ヲ得テ名ケ狀ルベカラス。事緣軌迹、マタコトク記スコト克ワズ。少ニ傳聞トスル處、鉅海ノ一滴ヲ記スノミナリ。</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷下尾 寛永六年己丑五月端午日 赤城龍源閑虚聲謹書 又寶歴九戊卯年十月七日 普門謹拜写之</p>	<p>勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行狀傳聞記下終</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之下尾 文化二乙丑歲夷則吉辰 萬松山宗泉院主宰</p>	<p>永平開祖道元大和尚行狀傳聞記卷下終 若州遠敷郡田野村 大光寺去外 荒木三秀拜主</p>

お断り

本紀要の紙幅上、後半部は(十一下)として次号に掲載します。